

第 25 号

平成 28 年度

# 教 育 研 究 集 録



平成 29 年 3 月刊行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

## 平成28年度「教育研究集録」刊行に当たって



新学期を迎え、教職員の皆様方には、何かとお忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。

皆様方には、平素から公益財団法人日本教育公務員弘済会（日教弘）岡山支部の諸事業にご理解とご協力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

日教弘岡山支部は、教職員の皆様方が低廉な保険料で大きな保障の得られる教弘保険にご加入いただくことによる、提携会社のジブラルタ生命保険(株)からの日教弘本部への契約者配当金などを事業資金として、教育振興事業（公益目的事業）や福祉事業などに取り組んでいる公益財団法人であります。教職員の研究実践をまとめたすばらしい教育研究論文や著書を表彰させていただくとともに、それらをまとめた研究集録を県内の教育関係者に配付させていただくこの事業は、そうした教育振興事業の一つであります。

本年度は、学校部門と個人部門、そして著書部門の計3部門で、県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、中等教育学校及び教育行政機関に勤務する教育関係者等を対象にして、教育研究論文等の募集を行いました。その結果、学校部門で9編、個人部門で20編、著書部門で2編の合計31編のご応募をいただきました。

本年度の教育研究論文の内容の傾向としては、次の改訂学習指導要領で校種を問わず求められるアクティブラーニングの実践研究や、岡山県内はもとより各県でも力を入れている学力向上に向けた授業の工夫の実践研究が多かったように思いました。

今回、学校部門で最優秀を受賞された総社市立総社中央小学校の校長横山昌弘先生の論文は、「友だちと心を通わせながら生き生きと学習する児童の育成～思考の交流を促進する協同学習を目指して～」と題した論文で、学習内容の深まりを目指し、協同学習における「思考の交流」に視点を当て、課題意識をもって主体的に取り組む授業を学校全体で進め、児童の学習の様子や学習アンケート、学力調査などからその有効性を明らかにしたものです。また、個人部門で最優秀を受賞された倉敷市立南中学校の指導教諭見尾美恵子先生の論文は、「『減災』をキーワードに、従来の防災学習からの脱皮を図る取組」と題した論文で、今日的な課題である防災教育を、生徒がイメージ化しやすいように、講師の講演を聞いたり、避難所訓練合宿を取り入れたり、学校行事と結びつけた体験学習を取り入れるなどして、生徒自身の心が大きく揺り動かされ、減災意識が高まることはもとより、地域貢献にも目が向きつつあることを、アンケートや生徒の感想などからまとめたものです。

どちらの研究論文もたいへん素晴らしいもので、各学校園で是非とも参考にさせていただきたいと思います。このような優良以上の表彰を受けられたすばらしい研究論文や著書については、冊子にまとめさせていただき、各学校園に配付させていただきます。これらのすばらしい研究実践などが、県下の先生方の教育活動の中で生かされ、新たな課題の研究にも取り組んでいただき、各学校園ですばらしい成果を上げられますよう願っております。

論文審査は、岡山大学大学院教授 住野好久先生、元岡山県高等学校長協会長 山本近信先生をはじめ、多くの先生方にお世話になりながら、厳正に行っていただきました。お忙しい中、審査をいただきました先生方に厚くお礼を申し上げます。

この冊子の終盤には、本年度の日教弘教育賞の全国最優秀論文も掲載していますので、教育研究実践やまとめ方の参考等にしていただければ幸いです。

平成29年3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

支部長 門野八洲雄

# 巻 頭 言

－平成28年度の審査をふまえて－

審査委員長（岡山大学大学院教育学研究科教授） 住 野 好 久



新しい学習指導要領をめぐる議論が活発に行なわれた平成28年度。「学力」から「資質・能力」へ、カリキュラム・マネジメントや新しい教育内容・教育方法の提案など、新しい時代の担い手を育てるための学校教育の在り方が提起されました。他方、学校は「チーム学校」を組織しようとすればするほど多忙化が進んでしまうというジレンマの中、新しい課題に取り組む意欲と希望が弱まってきています。今、何にこそ力を入れて重点的に取り組むべきかを見極め、近視眼的にではなく、戦略的・組織的に教育活動に取り組むことが求められているのです。

日本教育公務員弘済会の教育研究論文・著書への助成事業は、このような戦略的・組織的な教育活動に取り組む先生方を励ます事業です。本誌に掲載されている教育研究論文は、経験と勘とコツでこれまでと同様の教育活動を繰り返すのではなく、目的・目標と仮説を持って創造的に教育実践に取り組み、その成果を冷静に分析することで実践を改善していく研究的教育実践の成果です。これらの教育研究論文から、今どのようなことに力を入れて重点的に取り組めば、子どもたちを育て、教員を育て、学校を発展させられるかがわかります。

さて、私は第一次審査を通過した論文・著書から最優秀賞を選考する第二次審査委員会の委員長をさせていただきましたので、ここでは教育研究論文の第二次審査の内容について紹介します。

今年度は、論文の部に29編、うち、学校部門が9編、個人部門が20編、そして著書の部に2編の応募がありました。論文の部の校種別内訳を見ると、小学校が15編、中学校が7編、高等学校が7編でした。学校部門は9編のうち6編が小学校のものでした。多忙化が進む学校現場で、創造的に教育実践に取り組まれ、それを教育実践研究としてまとめられた先生方のご努力に敬意を表したいと思います。

学校部門には9編の応募がありましたが、「道德教育」や「キャリア教育」「教科外活動」など、学力や教科指導にとどまらない、子どもたちの全人的な教育を図ろうとする取り組みを論じたものでした。その中から第二次審査に残った4編はどれも「目標や方針」「仮説」「実践」「検証」について明確に論じられており、どれも甲乙つけがたいものでした。

その中で総社中央小学校が選ばれたのは、①授業改善の取り組みが学力向上という結果に十分表われていないという岡山県の教育課題を取り上げている（課題）、②いわゆる「協同学習」を通した学び合いの学習スタイルの指導にとどまらず「思考の交流」と「学習内容の深まり」という学力向上に向けてどんな授業をつくっていくのか実践の仮説を設定し、それを全教職員が共有して取り組んでいる（実践）、そして、③この取り組みによる授業の中での子どもの学びの変化が具体的に示されている（変容）からです。

次に、個人部門には20編の応募がありました。タイトルにアクティブラーニングという言葉が入った論文が6編もあり、授業改善が大きな関心事となっていることが伝わってきました。また、第二次審査には、継続的に応募されている方のものが2編あり、「さすが」と思いました。その分、第二次選考も大変な選考になりました。

その中で見尾美恵子先生が最優秀賞に選ばれたのは、①「減災」という視点から、県南地方で要請されている防災学習の改善に取り組んでいる（課題）、②学校外の諸団体とも連携して減災学習カリキュラムを開発して取り組んでいる（改善）、③調べ活動、校内での防災フェアの実施、宿泊研修等の多様な学習活動を通じて、防災・減災に対する生徒の意識が向上している（変容）からです。

最後に、論文を執筆・投稿する際にご検討いただきたいことを三点述べます。

第一に、学校部門と個人部門とを区別してほしいということです。学校全体で取り組んだ実践だとしても、その中で個人としてどのように取り組み、成果を上げ、考察したのかを書けば個人部門の論文になります。例えば、校内研究の取り組みについて校長が実践研究する時、校長が全校的な実践を書き、学校全体で分析・検討した結果を示す時は学校部門に、その中で校長はどのような役割を果たし、どのように実践し、校長としてどのような成果をもたらしたのかを書けば個人部門の論文になります。

第二に、実践は総合的・全体的に取り組んでも、実践研究にはそれらを網羅的・並列的に書くのではなく、その中で最も力を入れて取り組んだことに焦点を当てたり、様々な取り組みをいくつかにまとめ直したりして書くことです。最近「凡事徹底」という言葉をよく耳にします。「うちは当たり前のことをきちんとやってきている」とアピールしたい気持ちは分かりますが、やっていること自体にはオリジナリティも理論的な根拠もないことが往々にしてあります。研究的に重要なのは、その当たり前のことが多くの学校ではできないで困っているのに、なぜできたのかを明らかにすることです。それこそが他の学校で活用できる成果となります。今多くの学校が直面している課題に焦点を絞った実践研究に取り組んでほしいと思っています。

最後に、研究の倫理に関することです。今、研究者の世界でも研究の不正や論文の剽窃といった問題が起こっていますが、論文作成には守るべき倫理があります。例えば、事実ではないことは書かないこと。やってないことやデータの改ざんなどですね。また、研究対象者など関係者の人権侵害にならないようにすることです。人を傷つけるような表現や了解なしに個人が特定されるような記述や写真掲載をしてはいけません。そして、投稿のルールを守ること。様式を守ることはもちろんのこと、注や文献を示さない引用や二重投稿などです。

以上の点を考慮して、是非ともチャレンジしてみてください。みなさんが戦略的・組織的に教育実践研究に取り組まれ、本事業に応募していただくことを楽しみにしております。



## 祝 辞



岡山県教育委員会 教育長 竹 井 千 庫

公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の平成28年度「教育研究集録」が上梓されるに当たり、並々ならぬ御研鑽を重ねられ、このたび教育研究論文及び著書の部で受賞されました方々に、心からお祝いを申し上げます。

また、平素から教育研究助成事業を通じて、本県教育の充実と発展に多大の貢献をしてこられた関係者の皆様に深甚なる敬意を表すものであります。

さて、昨今、急速なグローバル化や高度情報化、そして少子・高齢化など、我が国の教育を取り巻く状況が大きく変化する中、教育においては、子どもたちの学ぶ意欲の低下などが懸念されるとともに、社会全体の規範意識の低下などが子どもの健やかな成長に影響を与えています。本県においても学力向上やいじめ、不登校、暴力行為の問題など、一部は改善傾向にあるものの依然として厳しい状況にあります。

こうした状況の中、県では、「心豊かに、たくましく、未来を拓く」人材の育成を基本目標とした「岡山県教育大綱」を踏まえ、昨年2月に「第2次岡山県教育振興基本計画」を策定し、今後5年間に推進する施策の具体的な内容やその工程をお示ししたところでありますが、教育上の諸課題に適切に対応していくためには、教職員が学校現場で創造的に教育実践に取り組み、それを実践研究として取りまとめ、お互いに研鑽を重ねることは非常に意義深いことであります。

このたび、受賞されました教育研究論文や著書は、学校経営や授業改善、地域連携等、多岐にわたっていますが、いずれもそれぞれの学校や地域の実態を踏まえ、課題を検証し、重点化・具体化した改善策を示す研究であり、多くの教職員の資質能力のために、広く活用していただけるものと考えております。

また、受賞された皆様には、今回の受賞を更なる契機として、引き続き実践や研究を深められ、それぞれの学校や地域の先導役として御活躍いただけることを期待しております。

終わりにになりましたが、教育研究助成事業の実施に当たり御尽力いただきました関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の今後益々の御発展を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

# 平成28年度 教育研究論文・著書

## 審査委員名簿

### 第一次審査委員

(敬称略)

審査委員長	元高等学校長	山本近信
審査副委員長	くらしき作陽大学専任教授	松原泰通
審査委員	岡山大学特任教授	荒尾真一
審査委員	ノートルダム清心女子大学非常勤講師	小川 潔
審査委員	元高等学校長	永井 裕
審査委員	元中学校長	福田 宇一

### 第二次審査委員

(敬称略)

審査委員長	岡山大学大学院教育学研究科教授	住野好久
審査副委員長	岡山県教育庁義務教育課長	福原洋子
審査委員	岡山市立西小学校長	牧平芳明
審査委員	岡山市立竜操中学校長	堀井博司
審査委員	岡山県立西大寺高等学校長	三善 真
審査委員	元高等学校長（第一次審査会審査委員長）	山本近信
審査委員	公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部専任幹事	宇佐見一郎

# 目 次

(所属は平成29年3月31日現在)

## 論文 (学校部門)

〈最 優 秀 日教弘教育賞推薦〉

1. 友だちと心を通わせながら生き生きと学習する児童の育成  
—思考の交流を促進する協同学習を目指して—  
総社市立総社中央小学校 校長 横 山 昌 弘 ..... 1

〈優 秀 日教弘教育賞推薦〉

2. 学力向上を目指した組織的プロジェクト  
—小規模中学校の挑戦—  
美作市立勝田中学校 校長 西 村 睦 美 ..... 5

〈優 秀〉

3. 希望の登校 満足の下校を実現する学校づくり  
—授業と生徒指導の一体化, 知・徳・体のバランスを意識して—  
津山市立大崎小学校 校長 奥 山 仁 ..... 9

4. 特別支援教育の視点を生かした教科外活動  
—教科指導の発想を教科外へ広げる—  
赤磐市立石相小学校 校長 藤 原 伸 哉 ..... 13

〈優 良〉

5. 重点項目を核にした学校全体での道德教育の推進  
倉敷市立倉敷東小学校 校長 長 濱 美根子 ..... 17

6. キャリア教育を通して自主的・主体的に学ぶ児童を育てる  
赤磐市立仁美小学校 校長 河 本 弘 志 ..... 21

7. 故郷を誇りに思い, 確かな学力・豊かな心・健やかな体で, 未来へ飛躍する伊里の子どもたち  
—学校・家庭・地域の総合力を基盤にして—  
備前市立伊里小学校 校長 坪 本 義 裕 ..... 25

8. 地域と連携した体験学習の取り組み  
—自己肯定感を高めるために—  
里庄町立里庄中学校 校長 田 原 直 樹 ..... 29

9. 社会人基礎力の育成を目指し  
—工業高校におけるアクティブラーニング「専門5科プラス生徒会」の取り組みを通して—  
岡山県立東岡山工業高等学校 校長 難 波 宏 明 ..... 33

## 論文 (個人部門)

〈最 優 秀〉

1. 「減災」をキーワードに, 従来の防災学習からの脱皮を図る取組  
倉敷市立南中学校 指導教諭 見 尾 美恵子 ..... 37

〈優 秀 日教弘教育賞推薦〉

2. アクティブ・ラーニングの視点からの数学の授業実践とその考察  
岡山県立倉敷天城中学校 教諭 八 代 真 哉 ..... 41

〈優 秀〉

3. “学修”する子どもを育てる小学校英語の授業と評価  
—ワークシートと指導法の工夫を通して—  
倉敷市立連島南小学校 教諭 江 尻 寛 正 ..... 45

4. 児童が主体的に学ぶ書写教育の可能性と展望				
総社市立総社東小学校	教諭	角田早苗	.....	49
〈優良〉				
5. 働くことの喜びを感じ、進んで働く児童を育てる道徳の学習				
倉敷市立倉敷東小学校	教諭	伊住継行	.....	53
6. 中学2年「電流」問題解決学習				
—アクティブ・ラーニングを取り入れた授業作り—				
倉敷市立玉島東中学校	教諭	山本芳幸	.....	57
7. 農業教育におけるアクティブ・ラーニング型授業の取り組み				
—科目“生物活用”の協同学習を通じて—				
岡山県立井原高等学校	教諭	前崎靖彦	.....	61
8. 生徒の学校適応感を高める主体的グループ活動の実際				
—リーダー研修をMulti Level Approachの観点から考える—				
岡山県立岡山大安寺中等教育学校	教諭	大西由美	.....	65

## 著書部門

〈優良〉

1. 宮脇紀雄 人と作品				
—備中の奥深い山ひだに生まれ育った童話作家—				
岡山県立図書館	主事	岡長平	.....	69

## 平成28年度「日教弘教育賞」

〈最優秀賞・学校部門〉

ふるさと見附を愛する子どもを育む地域教育プログラムの創造

—地域と協働で取り組む3年総合「私たちの力で大好きな商店街を盛り上げよう」の実践を通して—

新潟県見附市立見附小学校	校長	布川治夫	.....	73
--------------	----	------	-------	----

〈最優秀賞・個人部門〉

児童の意欲を引き出す体育の授業を考える

—「もっと運動がしたい」を目指して—

栃木県宇都宮市立陽東小学校	教諭	五十嵐太一	.....	77
---------------	----	-------	-------	----

## 奨励賞の所属・氏名・研究題目の一覧表（参考）

### 個人部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
総社市立 昭和小学校	校長 池上真由美	小学校英語から中学校英語へのスムーズな移行をめざして —スピーチ(暗唱)指導の効果的な方法とその有用性について—
岡山市立 曾根小学校	校長 鈴木 学	岡山市の「教育に関する総合調査」を学校経営に生かすための —考察—
赤磐市立 仁美小学校	教頭 松本 哲也	地域の方の力を借りて、学力の向上をめざす
倉敷市立 菫小学校	教諭 土井 理子	「深い学び」を生起させる説明的文章の読みの指導 —ディープ・アクティブラーニングの理論をもとに—
岡山市立 浦安小学校	教諭 片岡 学	自分の思いや考えを豊かに表現し、伝え合うことで考えを深める 子どもの育成 —思考力・判断力・表現力を高める授業作りを目指して—
備前市立 日生東小学校	教諭 延原 一泰	理科教育におけるICT機器の活用について —児童の関心や意欲を高め、分かる授業を目指して—
浅口市立 寄島中学校	教頭 山室 哲郎	学校評価を活用した学校経営に関する研究
倉敷市立 北中学校	教諭 神原 優一	アクティブラーニングを意識した授業の実践 —全員ができるようになるための工夫—
岡山県立 岡山東商業高等学校	指導教諭 笠木 秀樹	本校におけるアクティブ・ラーニングの実践 —主体的・協働的な学びによる授業力向上—
就実高等学校	教諭 木多 功彦	“晴れの国おかやま”で未来につなぐ80年前の教訓 —就実高等学校歴史研究部による岡山大洪水の調査・保存活動—
岡山県立 倉敷中央高等学校	教諭 前田 昌義	音楽と映像で学ぶ「世界史A」の試み
岡山県立 岡山操山高等学校	養護教諭 万城公美子	教育福祉（Edufare）に向けて —一次世代の豊かな学びと育ちの保障をめざして—

### 著書部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
退職者	宮本 進	「西田哲学」の核心 —「絶対無」と「絶対矛盾的自己同一」—



# 論文（学校部門）



# 友だちと心を通わせながら

## 生き生きと学習する児童の育成

—思考の交流を促進する協同学習を目指して—

総社市立総社中央小学校 校長 横山 昌弘

### I はじめに

本校の協同学習は、平成22年度から取り組んでいる「総社市だれもが行きたくなる学校づくり」の1つとして始まった。これまでの協同学習のめあてを重視した取組は、「感情の交流」「役割の交流」(図1参照)を生み、子どもたちのより良い人間関係につながっていった。本校では、協同学習の時間を「かがやきタイム」とよんでいるが、教師が「かがやきタイム」と告げると歓声上がるほど、子どもたちは協同学習が大好きである。しかし、「話し合いは盛り上がったが深まりはあまり感じられなかった」「教科の目標を達成することができなかった」など、学習内容の深まりや知的欲求の充足という点において課題が残った。

そこで、協同学習のもう1つの側面である「思考の交流」に視点を当てた取組が必要だと考えた。本論文では、生き生きと学習する児童を育成するために「思考の交流」のある協同学習を目指した平成26年・27年の実践を報告したい。

### (2) 課題

- 協同学習の場面での話し合いは盛り上がったが、学習内容の深まりはあまり感じられない。
- 教材研究をしっかりと行わないと、ただ話し合っただけという協同学習になりやすい。

### 2 研究仮説

平成25年度までの取組から、本校の協同学習が、児童の相互理解、安心感、達成感などにつながっていることがはっきりした。そこで、この良さを生かしながら、さらに学習内容の深まりや学ぶことの楽しさにつながるようにするために、次のような仮説をたて研究に取り組んだ。

一人一人が課題意識をもち、友だちと共に積極的に参加する授業を行えば、「思考の交流」のある協同学習が生まれ、児童は友だちと心を通わせながら生き生きと学習することができるであろう。

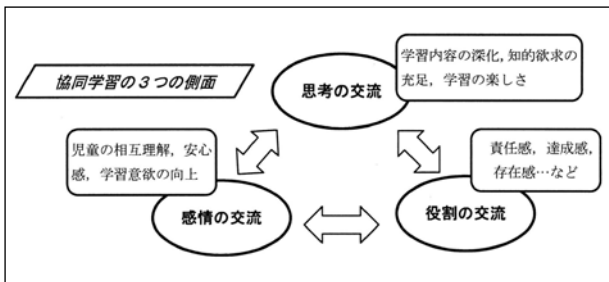


図1 協同学習の3つの側面

### 3 「思考の交流」のある協同学習にするために取り組んだ4つの視点

「思考の交流」のある協同学習にするためには、児童一人一人が「話し合って解決したい」という願いをもち、課題意識をもって取り組むような授業にしていかなければならない。そこで、次の4点に視点を当て授業実践を行った。

### II 研究の概要

#### 1 平成25年度までの成果と課題

児童が活躍する場を保障するために、「感情の交流」「役割の交流」に視点を当てた協同学習に取り組んできた。その結果、次のような成果と課題が見えてきた。

##### (1) 成果

- 相手を意識し共感的な声かけのできる児童が増えた。
- 協同学習で生まれた人間関係が、普段の生活でも励まし合ったり認め合ったりする姿として表れた。
- 役割があることで目的意識をもって協同学習を行うことができ、最後まで責任を果たす児童が増えた。

##### (1) 課題設定の工夫

- ・協力して解く必要のある課題を設定することで、グループで学ぼうとする思いにつながった。
- ・個人で学習するよりも、ペアやグループで学習する方が有効であると実感できるような課題を与えた。

##### (2) 学習展開の工夫

- ・単元を通して効果的な協同学習の取り入れ方を検討した。必要な場で必要な形の協同学習が行われるようにした。
- ・児童の意識の流れを大切に、主体的に協同学習に取り組むことができるような学習展開とした。

##### (3) 話し合いの観点の明確化とスーパーかがやき言葉の活用

- ・「何について話し合うのか」を明確にすると、論点がぶれず、効果的に話し合うことができた。
- ・積極的な話し合いの一助になるように、思考の交流を促進する言葉（総社中央小学校ではスーパーかがやき言葉とよぶ）を作成し、教室に掲示した。協同学習の中で、この言葉を使うことにより、話し合いが活発になり、思考の交流が促進されると考えた。

表1 スーパーかがやき言葉の例

- なんでそうなの？
- ～が分からないから教えて
- ～と言うけれど、本当に～でいいのかな
- もっとちがう考えはないかな

#### (4) 特別支援教育の視点を生かした授業

能力や学習意欲の高い児童だけが活躍するのではなく、どの児童でも積極的に関わることのできる協同学習にしていくことが必要である。そのためには、特別支援教育の視点を取り入れた授業にしていかなければならないと考えた。

どの児童も参加できる授業はレベルを下げた授業ではない。特別な支援が必要な児童に対する指導の工夫は他の児童にも通じ、全ての児童が「満足する授業」「分かりやすい授業」に通じると考えた。そこで、本校では、特別支援教育の視点である「焦点化」「視覚化」を取り入れた授業に取り組んでいった。

表2 焦点化・視覚化を行う際の視点

- ① 焦点化
  - ・ねらいに迫るための授業のしかけ
  - ・ねらいや付けたい力の明確化
  - ・児童の意識にそった単元構想
- ② 視覚化
  - ・学習の流れや学びの視覚化
  - ・必要な時、必要な効果的な視覚化

## 4 研究の深まりにつながる取組

### (1) 専門家からの継続的な指導

全職員が、研究の4つの視点を取り入れ、児童が主体的に参加できるような授業を目指した。しかし、1人では研究は深まらない。みんなで見合うことが授業力の向上につながり、研究が深まると考えた。つまり、研究も協同学習でなければならぬ。そこで、同僚に授業を見てもらうだけでなく、外部からの意見を聞くことができる場を設定するようにした。

平成26年度は、全員が公開研究授業を行った。そのうち7回は指導主事を招聘して、全校研究授業を実施した。その際、研究協議から指導主事に参加してもらうことで、お互いが納得するまで意見の交流を行うこ

とができた。

平成26年度の振り返りをしたとき、「講師からの指導はありがたかったが、1年間継続して指導を受けることであれば、さらに研究が深まるのではないか」という意見がでた。そこで、平成27年度は、平成26年度同様、全員が公開研究授業を行うが、全校研究授業へ招聘する講師は1年間を通して同じ講師にお願いすることにした。

平成27年度の公開授業は全て算数であったため、1年間を通して、算数・数学が専門であり小学校での経験がある大学教授を招聘し、7回の全校研究授業と1回の全体研修会を実施した。また、特別支援教育の視点から指導してもらうために、特別支援教育が専門の指導主事を招聘した。全校研究授業では、教科と特別支援教育の両面から1年間継続して研修を行うことができた。

このように、1年間を通して同じ講師から指導を受けることができるため、常に前回の内容を受けて研修を行うことができ、授業者はねらいをもって授業公開をすることができた。参加する職員にとってもめあてが絞られ、分かりやすい研修になった。

### (2) 外部への発信

児童も職員も、校内だけでなく外部からも認められることで、さらに意欲が高まる。しかし、それには、総社中央小学校がどのような取組をしているか、どのような実態であるかを知ってもらう必要がある。そこで、総社中央小学校の取組をいろいろな機会を使って外部へ発信した。

#### ① 視察の受け入れと授業公開を通しての発信

表3 視察団体の例

- 県外の2つの県教育委員会
- 県外の1つの市教育委員会
- 福岡県の小学校2校 ○岐阜県の小学校6校
- 岐阜県の中学校2校 ○大阪府の小学校1校
- 大阪府の中学校1校 ○岡山市外の小学校1校
- 岡山市外の校長会

視察を受け入れやすいように、HPに年間の研究授業の計画を載せ、市の教育委員会へは研究の具体的な計画を伝えておいた。その結果、2年間に受け入れた視察は表3のように16団体にのぼった。全ての視察において、授業公開を行い、総社中央小学校の取組を説明した。職員もいろいろな人に授業を見てもらうことで、常に研究の視点を意識しながら授業を行うことができた。

#### ② 学会発表や学校便りなどを通しての発信

研修会での講師や学会での発表、教育誌の原稿依頼

などを積極的に引き受け、総社中央小学校の取組を県内外へ発信した。また、保護者や地域に知ってもらうために、学校便りに本校の考えや児童の様子をタイムリーに掲載し、地域の回覧を利用して配付した。このように、学校を取り巻く人たちに取組の様子や児童の実態を知ってもらうことは、職員にとっては外部に評価してもらったり、自分の授業を見つめ直したりする良い機会となり、授業改善につながっていった。また、保護者や地域からの児童に対する声かけが確実に増えていき、児童もいろいろな人に認められることでさらに意欲を増していった。



写真1 H26学校便りNo42の記事

## 5 授業の実際

### (1) 6学年算数科「速さ」の実践

#### ① 課題設定の工夫

同じ道のり(50m)を走るアニメーションを見せることで実感を伴わせながらどちらが速いか理由を話し合わせたり、同じ時間(8秒)で進んだ道のりが異なる場合について話し合わせたりした後、道のりと時間のどちらも異なる場合の速さ比べを考えさせた。その結果、「1秒あたりに進む道のり」と「1mあたりにかかる時間」を求めればよいという2つの考え方に絞ることができ、算数に苦手意識のある児童も、自分の意見と友達の意見を比べながら協同学習に取り組むことができた。

#### ② 学習展開の工夫

まず、個人で課題解決に取り組んだ後、児童が自分の考えを確認したいと思ったときに、協同学習の場を設定した。児童は、「1秒あたり」「1mあたり」という単位量あたりの考えを使って考えているので、友だちの意見と似ている点や違っている点に気付きやすく、活発な話し合いにつながっていった。

また、協同学習の振り返りの時間を毎時間確保した。児童は次の感想のように、分かったことやできるようになったこと、参考になった友達の意見を書いていた。

このことから、友だちと学習した良さを感じ、「感情の交流」も起こったことが分かる。

自分は1秒あたりで考えていたけど、他の人は1mあたりで考えていたので、こういう方法でできるんだと思いました。Nさんが教えてくれたので分かりやすかったです。

### ③ 話し合いの観点の明確化とスーパーかがやき言葉の活用

「式の意味」「答えの単位」「どちらが速いのか比べる方法」などの話し合いの観点や「ノートや図を使って説明」などの話し合いの手順を確認して協同学習に取り組むことで、話し合いが焦点化され効果的な討論となった。ノート指導でも、ポイントや理由を書き込ませたことで、児童は自分の考えと友達の意見の相違点や良さを見つけ、活発に話し合うことができた。

また、スーパーかがやき言葉(質問する・付け加える・反論するなど)を、協同学習の話し合いで活用できるように教室に掲示しておいた。協同学習「かがやきタイム」のめあてを示すときには、スーパーかがやき言葉の中から、特に身に付けさせたいものを1つに絞って提示することで、話し合いに必要なスキルを1つずつ身に付けていくことができた。

### (2) 5学年国語科「大造じいさんとガン」の実践

#### ① 特別支援教育の視点(焦点化)を生かした取組

部分精読(深め発問)では、児童が立ち止まって考え、語りたくなるような課題を提示することで、読み深めたい箇所に気付かせることができた。第二次第2時では、「『ううむ』と『ううん』が同じか」と発問することで話し合いの焦点化が図られた。協同学習もねらいがはっきりしているので、児童は意欲的に取り組み、話し合いの内容が深まった。

また、協同学習場面で、思考の交流を促進する手助けとなるよう、表4のように話し合いの観点を明確に示した。

表4 話し合いの観点
＜説得力のある意見＞ 根拠を(本文から)言う ・言葉、文 ・場面を比べて ・いろいろなところから

#### ② 特別支援教育の視点(視覚化)を生かした取組

登場人物ごとに色を変えた短冊に感想を書き、黒板に整理していった。その後、多く集まった感想や重要だと思われる感想を全員で確認したことで、読みの視点を共通理解することができた。

第二次では、「行動」「様子」「変化」などのカードを使って板書を整理した。児童は、どんな仕掛けにどのように反応しているのかをとらえることができ、話し合いの深まりにつながった。

## 6 研究の結果

### (1) 学習アンケート（協同学習に取り組んだ児童の感想）より

児童は協同学習に取り組むことの「良さ」を実感している。友達との話し合いを通して、自分と友達の考えを比べ、新しい考えを生み出した。図2からも、生き生きと学習に取り組んできていることが分かる。



図2 児童の主な感想

### (2) 協同学習についての学習アンケート（H27）より

図3のように、「ペアやグループでの学習は楽しい」「ペアやグループでの学習はよく分かる」の割合が大きく上昇している。「少し楽しい、分かる」を合計すると9割を超えている。

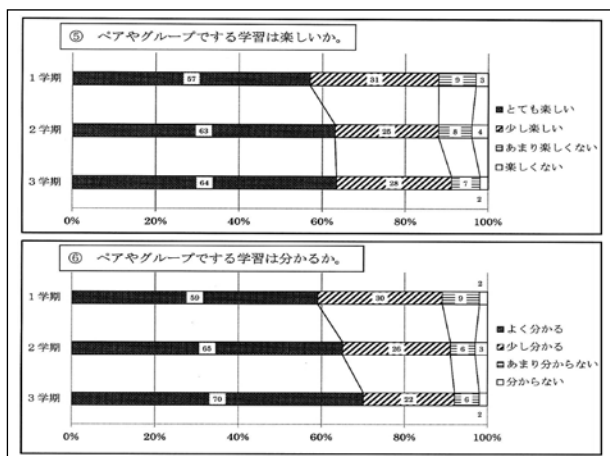
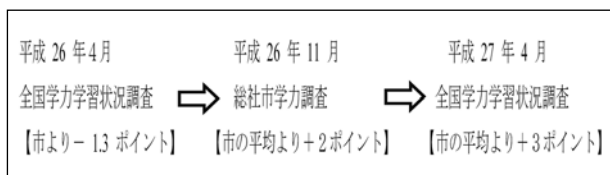


図3 学習アンケートの結果

### (3) 6年生の学力調査（国語科・算数科B問題）結果から（総社市の平均正答率との差）



(1)(2)(3)の結果から、課題意識をもって取り組む授業を行い、「思考の交流」のある協同学習を目指したことが、児童にとって楽しく分かる授業につながり、思考力の育成につながったと考える。

## 7 成果と課題

- ・「比較」や「共有」「協力」「深化」などをキーワードとして課題設定すると、必要感のある話し合いになり、思考の交流につながる事が確認できた。
- ・学習展開によって、様々な場面（基礎を理解する場面や応用問題へ挑戦する場面など）で、思考の交流が促進される協同学習を設定することができる。ただし、協同学習ありきではなく、学習目標を達成させるための協同学習として考えていかなければならない。
- ・スーパーかがやき言葉は、児童が常に協同学習を意識し定着させていくために有効である。日頃から、これらの言葉を使っている児童を称揚するなどして意識させることが必要である。
- ・ねらいを焦点化することで、授業の構造化が促進され、漠然とした話し合いから必要感のある話し合い（思考の交流）へと変化した。また、視覚化で話し合いの観点を提示することで、見通しをもちにくい児童も安心して授業に参加することができるようになった。ただ、まだ職員の中で焦点化や視覚化のとらえ方に差がある。児童の学びとの関係性の中で明確にしていく必要がある。
- ・職員は、全員による研究授業の公開、全国からの視察に対する授業公開、学会やカレッジなど全国の研修会への積極的な参加、納得いくまで続ける授業についての話し合いなど、常に前向きに挑戦する姿を見せていた。このように生き生きと毎日過ごしている職員の姿こそが一番の成果であり、それが主体的に取り組む児童の姿へつながったと考える。

## III おわりに

この2年間で、学校全体のASSESS・学習適応感尺度は53 (H25) ⇒53.9 (H26) ⇒54.1 (H27) と、1ポイントも上昇し、不登校児童数は5人 (H25) ⇒3人 (H26) ⇒1人 (H27) と大幅に減少した。習字や絵画、研究などで、県や国で最優秀賞に輝いた児童も20人近い。また、毎朝、6年生を中心にボランティアの清掃や挨拶運動も続いている。このように、毎日生き生きと過ごす児童が増えた。これは、職員全員が、同じ思いで協力しながら取り組んだ成果であろう。言い換えれば、私たちの研究そのものが協同学習であったからだと考える。もちろん、教育は日々変化している。今後も更に生き生きと活躍する児童の育成を目指して、職員一丸となり協同して取り組んでいきたい。





# 学力向上を目指した組織的プロジェクト

## —小規模中学校の挑戦—

美作市立勝田中学校 校長 西村 睦美

### 1 研究テーマ及びテーマ設定の理由

#### (1) 学力面での課題と現状

本校は現在、全校生徒37名の小規模校で、特別支援学級は設置されていない。しかし、通常学級在籍生徒で特別な教育支援を要する生徒は9名、それぞれ個別支援計画を作成して個の課題に応じた教育支援を行っている。

平成27年度までの各種学力検査では、いずれも市や県・全国の平均値を20～40ポイント下回る学力低位校である。家庭学習時間も県・全国調査に比べて大変少なく、基礎学力の定着が困難で生徒の学習意欲も極めて低い。決定的な弱点は作文力であった。テスト問題では時数制限のある問題や長文問題の無回答率が非常に高く、生活ノートのコメント欄や学習の感想は1、2行程度。語彙も乏しく考えがまとまらない。学習は苦手と初めから諦めている生徒も多い。

こうした実態を反映し、学校教育に対する生徒や保護者・地域の信頼度は低く、中学校の活力と自信を取り戻してほしいという強い願いがあった。

#### (2) 研究の6つの仮説

平成27年度に着任した私は、学力不振という本校の最大の課題を克服するために、学校組織をあげて学力向上の取組を進めることを学校経営方針の第一に掲げた。そして、確かな学力を伸ばす6つの仮説を立て、小規模校という強みを生かし、個の課題に応じた指導を徹底しながら、全職員で学力向上に取り組んだ。

- ① 組織をあげて取組を徹底（＝全員でやり抜く）すれば、学力は伸びる。
- ② 全ての教育活動で「書く」ことを徹底すれば、学力は伸びる。
- ③ 生徒が学ぶ意欲、学び方、学ぶ習慣を身に付ければ、学力は伸びる。
- ④ 教師の意識改革と授業改善が進めば、学力は伸びる。
- ⑤ 個の課題に応じた指導を徹底すれば、学力は伸びる。
- ⑥ 家庭学習の習慣形成をすれば、学力は伸びる。

### 2 研究の方向性

#### (1) 学力のとらえ方、目指す学力観

狭義の学力を「数値で図る学力」「自ら考え、表現する力」、広義の学力を「学ぶ意欲と目標に支えられた豊かな人間性と社会を生き抜く力」ととらえる。広義の学力形成を基盤に狭義の学力向上を実現することを目指す。

学力の中心を「書く力」と規定し、「書く」という総合的な営み（書くことは、聞く、読む、話す、考える、まとめるといったあらゆる分野の能力を必要としているため）を全ての教育活動を通して徹底的に鍛えることを学力向上対策の基本とする。

#### (2) 組織として学力向上に取り組む（仮説①）

私は校長着任と同時に「学力向上と落ち着いた学習環境づくりを実現し、生徒・保護者・地域の学校への信頼を高める」ことを学校経営の中軸に据え、組織一丸となった取組を進めてきた。学びの定着には、落ち着いた学習環境と毅然とした指導の下に校内に規範意識を確立することが不可欠であり、まずはこのことに徹底して取り組んだ。校長の強いリーダーシップの下、明確なビジョンと確かな戦略を示しながら、学校の信頼回復への道のりを全教職員が生徒とともに歩んでいる。そして、最大の課題である学力向上を実現するために「学力フロンティア」（学力向上担当者）を校務分掌に位置づけ、徹底的に組織をあげた取組を展開している。

組織をあげた取組の基本は、共通理解と共通実践である。そのための手立てとして、学力フロンティアは学力向上策の全体像を教員に示し、教科や学年、学校全体の取組を明確に区分し、学期毎のスケジュールを提案している。共通理解・共通実践の成否は「徹底」にかかっている。全員がどの取組でも見過ごさずやり抜くこと、生徒や保護者に通信等で取組の内容や進捗状況、成果と課題をわかりやすく伝えることを徹底している。

また、職員の中に「学力補充の場では理解できても次には忘れてしまう」「厳しく学習を課すると生徒が休んでしまう」「まとまった量の文章を書く力がない」「家庭では学習させる環境が整わない」といった諦めが蔓延していた。学力向上の取組が単一の教科や担当者に

任され、全職員で徹底することができなかつたために徒労感だけが募っていたのである。これでは、生徒の学力がつくはずはない。生徒の課題は、職員の課題でもある。学力向上のための手法や連携について、学力フロンティアを中心に学校組織あげて取り組む姿勢を改めて強く打ち出して、学力向上策の実践が始まった。

年度当初、学力フロンティアが校長の示した「組織としての学力向上の方針」を踏まえた実践について職員に提案。生徒や保護者には学校通信等を用いて年間を見通した学力向上策を説明した。全教科、全教育活動、全教職員、全生徒による校内の学力向上実現に向けた取組がスタートした。

組織として取り組んだ成果はすぐに生徒の学びの構えとなって表れ、授業への集中力を始め、課題提出や小テスト等への取組、心理テストi-checkの分布図も非常に学校生活に前向きな形を示した。

### 3 仮説に基づく組織的取組

#### (1) 書く活動を授業の中心に据える（仮説②）

学力をつけるには徹底して書かせることが基本と考える。学力の定着を図るには反復練習して書くことが有効である。書くためには、「読んだり聞いたりしたことを記憶し、自分でそのことについて自分なりの考えを持ち、自分で判断して書く内容を決め、構成を考えて、相手に分かるように順序立てて記述する」という手順が必要である。その意味で「書く」という活動は、極めて総合的な能力を必要とする、究極の「総合的な学習」である。したがって、本校では徹底して書く活動を大切にしている。例えば、

○ノート作り→どの教科も授業開きで「ノートの使い方」を説明、指導を徹底する。授業中の板書は必ずノートにまとめる。1単位の授業では、必ず自分の考えをまとめて書く活動を取り入れる。

○生活ノートのコメント欄→必ず7行全て埋めて毎日提出。教員も必ず、コメントを返す。

○感想を書く→学年・学校行事等の感想は必ず書かせ、最後の行まで自分の考えを記述させる。そのための支援として「書く視点」を明示する。

○滴一滴ノート→毎日10分学習（帰りの会後）で週2日、全校で取り組む。「正確に、丁寧に、速く」書くトレーニングの時間でもある。

#### (2) 学ぶ意欲、学び方、学ぶ習慣を育成する（仮説③）

生徒が「学びの構え」を身につければ、主体的な学びが構築できる。そのために、生徒に身につけさせる

ものとして次の3点を掲げている。

#### ① 学ぶ意欲

学力向上は、生徒が興味関心や課題意識をもって授業に臨み、自ら学びたいという意欲、学ばなければならないという目標や必要感、自分の将来への展望をもつことから始まる。

#### ○授業づくり

授業では「わかった」という実感や「がんばった」という充足感、「できた」という達成感をもたせる授業づくりに力を注ぐ。解説的授業や演習的授業ではなく、生徒自らの活動や自己表現の場を保障した授業づくりへの転換を進めている。

#### ○スモールステップでの確認

生徒の学ぶ意欲を引き出すために忘れてはならないことは、スモールステップでの生徒の理解度・定着度の確認である。定期テストや単元テストといった大きくくりの確認ではなく、毎時間、前時に学習した内容が身についたかどうかを工夫して確認する。全教科が、このスモールステップの確認をすることで、生徒自身も教師も個々の到達度が理解でき、次の手立てが工夫できる。

「生徒の学ぶ意欲は、教師の授業づくりの意欲に比例する」が本校の合い言葉である。

#### ② 学び方の習得

生徒が「何をどう学べばいいか」「わからないときは何をどうすればいいか」など、中学校での学習の進め方を理解できるよう、工夫する。

#### ○「授業開き」→生徒が学習の見通しを持つ

授業の進め方やノート作り、予習や復習などの内容、家庭学習の進め方や課題、小テストや評価材料等について教科通信等を用いて適宜、説明。生徒が何をどうがんばれば力になるかがわかる、授業でがんばるめあてを持てるように工夫する。

#### ③ 学ぶ習慣

#### ○「かつたっ子授業のスタンダード」

「授業態度がよくない」「授業がわからない、退屈だ」これらは、教師の授業づくりも含め、「授業で何をどう学ぶか」という生徒の学びの習慣ができていないことに起因する。「授業は、このように進む」ということが理解できていれば、学ぶ習慣として身につく。そこで小学校・中学校で共有する「かつたっ子授業のスタンダード」を定め、授業の流れを理解させ、これを繰り返すことで授業で「学ぶ習慣」が確立した。

#### ○復習（反復練習）

### ・「毎日10分学習」

帰りの会後10分間、5教科復習プリントをする。ここで間違った問題も後述の「夢ノート」で学び直しをする。

### ・「漢字ステップアップ20問」

1学期は小学校の漢字、2学期は入試によく出る漢字、3学期には間違いやすい漢字と分野を分け、漢字ステップアップシリーズの全校テストを実施。「昨日の自分を乗り越える」がテーマで、前回の自分からのアップ率を図りながら目標クリアする。

## (3) 教師の意識改革と授業改革を進める（仮説④）

### ○かつたっ子15の春プロジェクトから

前述の通り、中学校では授業改革が一番の課題である。生徒の活動が教師主導で進められやすく、教科担任制の特性として学校として一体感のある授業づくりが難しい。小学校も2校でそれぞれ授業の進め方が異なり、中学校入学時に生徒たちの戸惑いが大きかった。昨年より勝田ひまわり園から勝田中学校卒業までの15年間の学びと育ちを視野に『かつたっ子15の春プロジェクト』という保・幼・小・中の連携組織を立ち上げた。そこで「岡山型授業のスタンダード」を基に「かつたっ子授業のスタンダード」を設定。小小連携と小中連携を実現するために授業のスタンダードを定めて児童や生徒の「学びの構え」を創ることにした。

### ○授業改革（中学校の課題）

特に中学校では1単位の授業時間で生徒が活動する時間が圧倒的に少なかったため、アクティブ・ラーニングの視点や生徒の自己表現の場を確保する授業改革が不可欠であった。Off-JTやOJTの活用、本校の教育課題に適合した研究指定の活用などにより、積極的に授業改革を進めている。本年度は美作市教育委員会指定ICT教育推進事業、文部科学省指定人権教育推進事業を軸に、授業改革を進めている。

### ○教師の意識改革

組織的プロジェクトの成否も、学力向上の取組も、授業改革の進捗状況も、すべては教職員の意識改革にかかっている。「どうせ、ここでは」「家庭学習はできないから」「小規模校だから」「大規模校だから」と『できない理由』をあげていては何の成果も生まない。「現状でできることは何か」「この陣容でできることは何か」「学校でできることは何か」と『できること』に目を向けて取組を生み出さなければ、前に進めない。こうした教職員の意識改革を推し進め、学力フロンティアを中心に教員ができることを着実に進めたこと

が学力向上の成果となって表れている。

### ○人材育成のための工夫と指導力の向上

学力フロンティアが1年間の見通しを持って、全教職員で取り組む学力向上プランを提起したことで、教職員個々の力量や指導力も向上してきている。従来、本校のような小規模校ではできないと思い込んでいたことが着実に成果を上げていることがさまざまな形になって学校生活に活力を与えてきている。生徒のひたむきな姿と学力の伸びが教職員のモチベーションを高め、教職員の意欲ある姿が生徒たちの力を伸ばすという相乗効果が表れている。学力向上の組織的プロジェクトの原動力となった「学力フロンティア」の育成が他の教職員の指導力向上につながり、そこから派生して学力向上以外の取組にも教職員や生徒の力が反映できるようになりつつある。

### (4) 個の課題に応じた指導を継続する（仮説⑤）

本校には、小学生3年時から不登校を続けている生徒がいる。中学校1年の2学期から学校とSSWやSCとの連携で美作市適応指導教室「美作塾」への通塾が可能となり、滴一滴ノートや夢ノートの取組を自主的に進めている。また、小学校で特別支援学級に在籍していた1年生や今春転入した2年生は、家庭での学習ができない環境にある。放課後学習部で毎日、中学校での課題に取り組んで個別の補充学習をしている。

どの学年も少人数だが習熟度の差が大きいため、5教科を中心に習熟度に応じた3ステップの問題を用意して、授業で個別指導ができるよう工夫している。数学・英語は美作市が問題データベースを導入しており、大変有効な学習教材になっている。37名個々の課題を全職員が把握できるため、小規模校の強みを徹底して生かし、個別の対応を続けている。

### (5) 家庭学習の習慣を形成する（仮説⑥）

「授業では理解できたのに、次の時間には忘れていく」生徒たちの学習内容定着ができていない。反復練習の時間が圧倒的に足りていない。保護者に学習内容の助言は求められない。生徒が自ら取り組むことのできる家庭学習の習慣形成が何よりも求められる。

- ・デイリーワーク（毎日の学習、予習・復習）
- ・ウィークリーワーク（週末プリント・課題）
- ・夢ノート（テスト直しノート）→校長へ提出

これらの課題は週1回提出日が設けられており、完全提出させている。できなかった生徒は放課後学習部で個別に補充学習を続けている。

- ・「学習の手引き」「評価の手引き」→生徒の学びのし

くみを生徒だけでなく、保護者も知る。

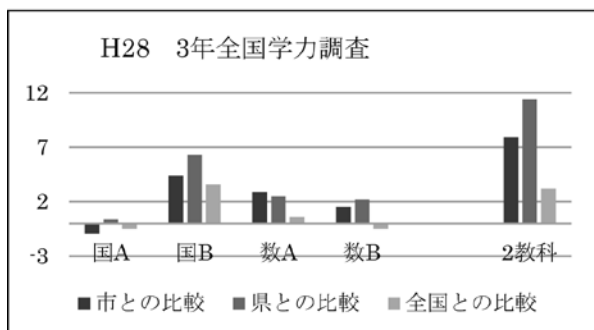
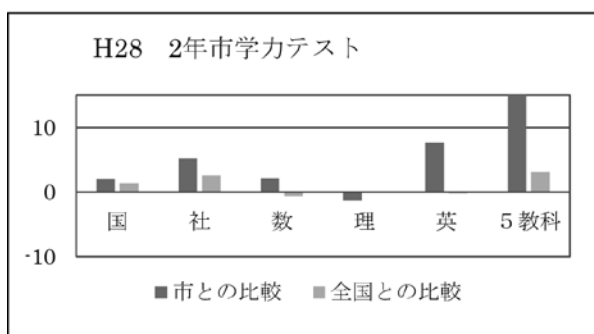
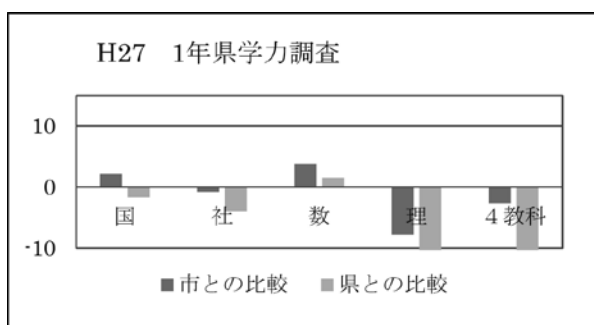
生徒が授業や学級指導で学んだ「学習の手引き」「評価の手引き」を保護者に解説、家庭でがんばる姿を見つける、あるいはほめる材料にする。

#### 4 取組の成果

##### (1) データに見る学力の改善

下図は、現2年の1年次県学力学習状況調査結果(H27.4) 2年次美作市学力テスト(H28.4) 現3年の全国学力学習状況調査の正答率比較表である。

市平均との差を比較すると、1年間の学力向上の取組成果が把握でき、いずれも市や県、全国の平均値を上回る成果を上げられた。また、2年は心理検査i-checkと学力の相関関係もわかるので、学習状況や生徒の自己有用感や規範意識なども含めて指導の手立てとして有効に活用している。



##### (2) 学習への取り組み方の変化、意欲の向上

この1年半の取組で、生徒自身は真剣にひたむきに授業や学校行事に取り組むようになり、「ノー原稿ノーマイク」で堂々と多くの聴衆を前に自分の意見表明や

説明ができるようになってきた。課題提出率も100%達成が基本となり、全校あげての取組が定着してきた。まさしく「学校ですべきことは学校で完結する」体制が整いつつある。

滴一滴ノートや夢ノート、生活ノートなど学校主導だった取組が、今や生徒の自主的な取組として創意工夫が随所に見受けられるようになってきた。生活ノートの赤帯(家庭学習時間)青帯(メディア時間)記録を毎日続けた成果が表れ、定期テスト前の学習計画表やメディアコントロール自己チェック表でも生徒自身がセルフコントロールできるようになっている。「継続は力なり」である。

#### 5 まとめ

落ち着いた学習環境づくりと規範意識の徹底を基盤に、6つの仮説を立てて学力向上に取り組んできた。

仮説① 組織をあげた取組は、生徒にとっても保護者にとっても非常に分かりやすい取組となり、個々の教職員の力量を超えた成果をあげることができた。組織の矛盾は、生徒や保護者の不信を生む。誰もが同じめあてで取り組むことが最大の学力向上策である。

仮説② 「書く」指導は効果がすぐに表れ、生徒の実感につながる。学びの意欲を高める有効な取組である。

仮説③ 生徒自らが何をどう学ばばいいか、自分は何ができるようになったかが明白になれば学習意欲が高まり、学力は定着する。

仮説④ 生徒の課題は教師の課題、教師の意識改革と授業改善を実現することが、学力向上の要である。

仮説⑤ 個の課題に対応することで、生徒の居場所ができ充足感を得られる。そのことが学習への意欲を高め、学びの構えを創ることにつながっていく。

仮説⑥ 生徒自身が家庭学習の内容をつかみ習慣がつけば、毎日の反復練習ができ、学力は定着する。

生徒の姿が変われば、保護者や地域の学校への信頼はついてくる。これは、私の教育理念の根幹である。この1年間、確かな学力をつけるための6つの仮説を、一つ一つ組織的プロジェクトで具体的な実践にかえてきた。成果が生徒の姿や力となって表れてきたことで、学校が活力と自信を取り戻し、学校への信頼も生まれつつある。小規模校の限界はたくさんあるが、弱みを強みに加えて工夫した取組が生きている。

学力低位校の挑戦は、組織的プロジェクトを基盤にして、さらに一つ上のレベルを目指して続けている。



# 希望の登校 満足の下校を実現する学校づくり

## 一授業と生徒指導の一体化, 知・徳・体のバランスを意識して一

津山市立大崎小学校 校長 奥山 仁

### 1 はじめに

本校は長年にわたり不安定な学校状況が続き、生徒指導上の課題が非常に大きく、低学力（国語算数NRT 全校平均偏差値44）という実態があった。さらに、新体力テストでも全国平均に遠く及ばず、体力的な課題も大きかった。結果的に、児童の学校生活満足度は非常に低く（Q-U 満足群28%）、保護者からの信頼もなくなっていた（学校評価アンケートクレーム率79%）。

「どうせ無理」着任当初、子ども・保護者・職員それぞれから同じようにこの言葉を耳にした。「子どもにとって楽しい学校」をみんなが願っているはずなのに、学校全体にあきらめのムードが蔓延していた。

本論文では、知・徳・体（学力、心力、体力）のバランスのとれた児童の育成を通し、学校課題の解決をめざして、どのような取組をしたかを報告する。

### 2 研究を始めるにあたって

不安定な学校状況について、職員は子どもや保護者・地域に、保護者は職員の質や学校の取組に原因を求め、互いに不信感を募らせていた。そこで、「人のせいにしない」「自分にできることをやりきる」「善意の流れをつくる」の3つを保護者・地域・職員に強く要請した。学校は、課題の解決に向けた取組すべてを研究ととらえ、次の視点で研究を進めていくことにした。

#### (1) 当たり前のことをやり切る

目標やねらいをもって取り組んでいても課題が大きいと、挫折しそうになりがちである。しかし、だからこそ当たり前のことを意識してやり切るようにする。

#### (2) 組織でやり切る

校務分掌の中心となる三部会（研究部、生徒指導部、保健安全部）が連携し、それぞれの立場で研究を意識した取組をする。研究内容は次の通りである。

- ① 研究部 → 授業改善（知・徳・体）
  - ② 生徒指導部 → 積極的生徒指導（徳）
  - ③ 保健安全部 → 心の安定支援（徳）
- (3) 情報公開、関係機関との強固な連携、その他学校

課題の解決につながる取組を総動員する。

- ① 情報公開（学校状況、取組目標、協力要請）
- ② 関係機関との連携、その他
- (4) 検証方法

学力、心力、体力の検証指標を以下のものとする。

- ① 学力（知） → NRT（教研式標準学力検査）
- ② 心力（徳） → Q-U
- ③ 体力（体） → 新体力テスト

### 3 具体的な取組

#### (1) 低学力の原因を探る

客観的なデータを集め学校として改善できることに取り組むようにした。そして、NRT、Q-U、新体力テストのみならず、以下の活用を考えた。

- ① 知能検査
- ② 全国学力・学習状況調査

全学年の知能検査を実施し以下のことがわかった。

○男子より女子の数値が高いが全国平均と差異はない

この結果から、「学力の低さは子どもの素質や能力的なものではない」ことが分かった。

また、平成26年度全国学力・学習状況調査から全国平均と比べ、特に大きな課題が以下のものであった。

- 国語・算数ともにすべての項目で非常に低い
- B問題はほとんどの項目が20ポイント以上の差
- TVゲーム・スマホ等に費やす時間が桁違いに多い
- 家庭学習の習慣がある子が極端に少ない

これらのデータや数値から、本校の学力的な課題は、単に学習の習慣がないだけで、「普通のこと、当たり前のことをやり切る」ことで解決できると考えた。

#### (2) 研究部（授業改善）

##### ① チャイム授業スタート・終了・次時の準備

まず、授業の当たり前とは、「45分間の授業時間の確保」である。それを実現するために「授業と生徒指導の一体化」を合い言葉にし、以下のことを徹底した。

- 授業者は1分前には必ず教卓前にいる
- チャイムが鳴った時、遅刻者を待たず授業を始める



- 遅刻者には「遅れてすみません」を言わせる
- 終了のチャイムで授業を終わる
- 次時の学習の準備をして休憩する
- ② 津山市教育委員会提案「授業改善の視点」をいかした授業の徹底をし、自主公開授業を実施した。

公開授業では、以下の2点を意識して取り組んだ。

- チャイム授業スタート・終了・次時の準備
- 「授業改善の視点」1～3

この取組が「授業と生徒指導の一体化」である。反省会では、指導主事の先生から「学校が確実に変わってきている。それは、先生方があきらめていない。指導者が子どもにメッセージをちゃんと伝えている。事実を具体的に認めほめている。その学校の姿勢が素晴らしい。」等、高い評価と励ましの言葉をいただいた。

### 津山市教育委員会授業改善の視点

#### <提案1>授業の導入

フラッシュ教材(歴史人物, 漢字, 公式, 九九, ことわざ等)  
5分間ミニテスト(前時の復習:基礎基本を中心に黒板に問題を書く)  
復習プリント(5分間程度でできるもの:答え合わせは全員でテンポ良く)

<提案2>子ども同士が関わり合う活動を5～10分間設定  
子どもに任せる時間(何をどこまでどのようにするのか明確にする)  
隣同士で指確認する, 読み合う, ○つけする, 相談する, 短く素早く何度でも行う。だらだらは×。

タイマーで時間設定をする, 特に, 考える活動や子どもに任せる活動は10分を超えない。

<提案3>ノートにまとめる時間や, 黒板を写す時間を確保  
中間層の子どもが当たり前に行っていることを意識的にほめる。  
学びの記録を残す。学習状況が見える化する。まじめに取り組んでいる子どもの良さをしっかり認める。

- ③ 学力テスト・新体力テストのデータ分析・活用  
全国学力・学習状況調査とともに以下の取組をする。
- 2月末に全学年がNRT受検(国語と算数)
- 知能と学力の関連を分析した相関表の活用
- 学力・体力分析データを授業・生活改善に生かす
- 担任は自己目標シートにNRT・新体力テスト等の目標数値・対策を具体的に記述
- ④ 変心カード(目標管理カード)

**大ざきへんしんカード** ~こんな2・3年生になりたい~

名まえ( )

◎どんな2・3年生になりたいか。

1・2年生変心カードの一部

◎そのために運動会でがんばりたいことは。

生徒指導上の課題が大きい児童ほど、将来への見通しがなく、苦手なことから逃げ反社会的な行動をとることが多い。そこで、学年に応じて短期・中期・長期目標を意識させ、子どもなりの目標管理をさせた。

#### (3) 生徒指導部(積極的生徒指導)

暴力・暴言・授業妨害・いじめが絶えず発生し、生徒指導といえば、もつれた糸を解くような「後追いの生徒指導」ばかりであったが、これだけでは根本的な解決にはならない。問題が起きないような環境や集団づくりをめざし、積極的生徒指導に力を入れている。

##### ① 縦割り・自主活動で育てる

縦割り班活動では、上級生にはリーダーシップを下級生にはフォロワーシップを意識させる。その中で、上級生は自己有用感や自己有能感を味わい、下級生は理想のモデルを上級生に求め、よりよい生活態度をめざすようになると考えている。

##### ○行事で育てる(縦割り)

運動会や学習発表会では、縦割り班を4色に分け色別対抗戦にする。チームワークや生活態度を3週間にわたり毎日評価し競わせる。当日の演技以上に普段の生活態度に重点を置いて評価をする。なお、学習発表会では、色別合唱コンテストを取り入れている。

職員の声を参考にして模範的な児童の名前をあげ校長が評価する。全校児童187人が、毎日毎時間の得点を競う真剣勝負である。

運動会チームワーク得点表

##### ○四色対抗綱引き(縦割り)

対戦前に応援団長が「いくぞ!」と声をかけ、メンバーが「オー!」と雄叫びをあげて対戦する。各学期に行い、運動会につなげている。



縦割り班による綱引き

##### 観光客の前で「和っしょい津山」



##### ○和っしょい津山(縦割り・自主活動)

運動会の全校種目として取り組んでいる。表現運動ではあるが、一部に色別の創作を取り入れ得点種目として児童のやる気を引き出すようにしている。6年生

のリーダーの中には「師匠」と呼ばれる技術を身につける児童もいて、下級生の憧れとなり、運動会後も踊りグループを結成して自主的に発表している。

#### ○バンド（自主活動）

ギター、ドラム、キーボードに加え、いくつかの楽器も加わり、ボーカルは何人もいる。6年生限定で始めた活動だが下級生のあこがれの的となり、6年生になったら「ドラムをしたい」、「エレキギターをしたい」と今から希望が殺到している。



昼休み、先生と共に練習に励むメンバー

バンドと和っしょい津山は、地域文化祭で発表要請があり、地域の一大行事である福力荒神祭では観光客に発表する機会も生まれている。

#### ○その他

毎週月曜日に行う全校朝の会では、開始までの時間に縄跳び、剣玉、ヒップホップダンスなど特技の発表をしている。また、全職員で規律を守らせ模範的な取組をする児童をMVPとして毎回紹介している。

縦割り掃除は清掃活動であると同時に縦の人間関係を大切にしたい指導を心がけている。

#### ② 関係機関との連携（警察・地域）

規範意識や自己肯定感が低く、家庭環境の厳しい児童にとって、筋の通った当たり前の指導はたびたび反発の引き金になる。また、子どもとはいえ大人が怯むツボを熟知しており「体罰、教育委員会、親に言う」等、状況に応じてうまく使い分ける。さらに、明らかな対教師暴力があっても教師は我慢しがちで加害児童をさらにつけあがらせる環境があった。被害者の安全確保をし、教師が自信を持って指導しきる環境をつくるため、県教育庁生徒指導推進室「暴力行為対策アドバイザー」や津山警察署サポートセンターの指導・助言を受け警察との連携を強化した。

また、地域との連携は大崎小学校の強みの一つである。夏休みに行う「ラジオ体操40日作戦」は地域全体で早起きをして取り組み、夏休みの生活リズムができ2学期のスムーズなスタートにつながっている。

**8月27日より警察への通報も…**

**警察との連携**

<目的>

- 学校の責任のもと、学校・保護者・地域+関係機関等、社会全体で子どもの健全育成をするため
- 被害者の安全確保、加害者の規範意識を育てるため
- 大崎から非行0、いじめ0をめざすため

<対象事案> ○器物損壊 ○暴力 ○脅迫 ○暴言など

**ダメなものはダメ!!**

大人の責任として、そう言えるように、社会全体で子どもの健全育成をしまいませ

**学校便り「警察との連携」**



地域がバックアップする生活リズムのある暮らし

#### (4) 保健安全部（心の安定支援）

研究主題に迫るためには、子どもの心の安定支援が非常に重要になる。それを組織的に行うことで高い効果を期待できると考えた。

##### ① Q-Uの実施・分析・活用

4月の第1回職員会議において、Q-Uデータから要支援児をピックアップし、長期欠席・不登校傾向児とともに全職員で情報共有し、始業式からすぐに支援ができる体制をとった。また、Q-Uは5、10、2月の年3回実施し、5月は実態把握と対策、10月は指導効果の確認・軌道修正、2月は指導効果の確認として活用した。分析結果と対策はすぐに学校便りで公表した。

Q-U速報値 全国平均11P超…学びの大波到来!!								
	友達関係	学習意欲	学級の雰囲気	学校生活意欲合計	満足群	非承認群	優害行為認知群	不満足群
全国平均	9.85	9.7	10	29.6	40%	18.5%	17.5%	24%
<b>学校便り「Q-U速報値」</b>					<b>28.6</b>	28.4	10.8	<b>31.7</b>
					<b>40</b>	18.1	16.2	<b>25.2</b>
					<b>40.1</b>	18.2	16.1	<b>25.7</b>
H28.2	10.4	9.75	9.68	29.8	<b>48.4</b>	16.4	14.0	<b>21.6</b>
H28.5	<b>10.4</b>	<b>10.1</b>	<b>10.0</b>	<b>30.5</b>	<b>51.1%</b>	<b>19.4%</b>	<b>12.4%</b>	<b>17.2%</b>

非承認群 悪徳所がなく無気力で自己表現の苦手な子 優害行為認知群 トラブルの可能性があり、やや自己中心的な子  
不満足群 非承認、優害行為認知の両面での指導が必要で、学校生活全般に不満を持った子 ※特に配慮

##### ② 環境整備

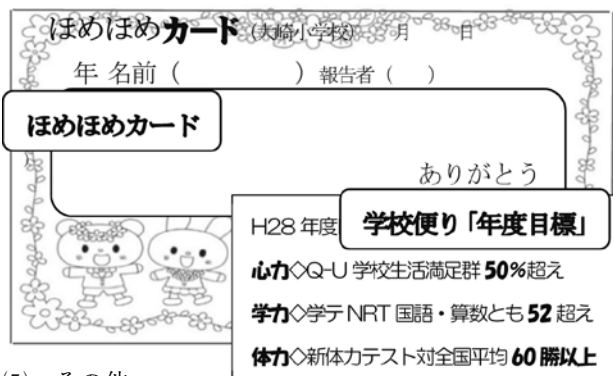
児童の心の荒れを示すかのように、全校のトイレがすぐに乱れ、便器の中にいつもサンダルが突っ込んであり、汚物もよくばらまかれていた。環境整備は職員にとって心が折れそうになる作業であったが、ドアをはずして密室にならないようにしたり、学級ごとに使用できるトイレを決めたりしてチーム対応を徹底した。

また、校舎は老朽化しているが、掲示物を工夫したり、清掃活動に力を入れたりして環境の整備に努めた。

##### ③ 宝物ファイル、ありがとう・ほめほめカード

自己有用感や自己肯定感を高めるために、ありがとうカードやほめほめカードを利用して日常的に全職員

で模範的な行動をした児童に対し手渡している。また、それらのカードを宝物ファイルに入れ学級で保管している。時々、自分のファイルを開いて眺めている児童がいるが、心が落ち着く時間になるようである。

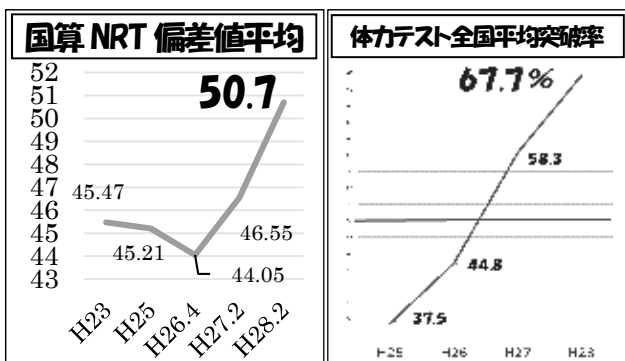


(5) その他

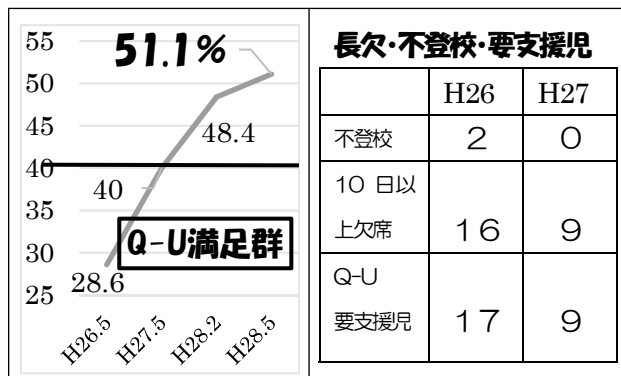
多くの取組をしてきたが、基本は「チャンスをちりばめ、ほめちぎる」ことである。例えば、教育課程を変え休憩時間を増加させたり、施設していた特別教室や体育館を解放したり、昼休みを20分から33分に増やし、ロング昼休みは50分にしたりした。その結果、35%だった外遊び率が55%に高まり、平成28年4月には85%を超えるようになった。子どもの可能性を信じて育てることを意識した取組である。

また、地域や保護者に対し素早くこまめな情報公開に心がけ、年度目標や行事ごとの短期目標、さらに具体的な対策を示し協力要請をしてきた。

4 成果と課題



学力、心力、体力の指標データから検証すると、この2年間ですべてのデータの数値が大きく伸びている。学力は、NRTで7ポイント近く伸び50ポイントを突破した。また、平成27年度はすべての学級で前年度の数値を超え、算数は国語の2倍の伸びがあった。新体力テストの全国平均突破率も70%に迫っている。さらに、心の安定を測るQ-Uの学校生活満足群も50%を超え、全国平均を大幅に上回った。市の相撲大会で個人・団体戦優勝、善行少年表彰、毎月のように本校



児童の新聞投書が掲載される等、活躍が目立つようになった。ちなみに、クレーム率は79%だった学校評価アンケートの記述が平成27年度は26.7%に減少した。

このことから、本校の学校課題の解決をめざした取組は大きな成果を上げたと言える。

また、本研究の一連の取組から、本校のように生徒指導上の課題・学力的課題が大きい学校では、「当たり前のことをやり切る」ことが特に重要だと再認識した。さらに、それを「組織でやり切る」ようにすれば、より効果的であること。特に授業では「授業と生徒指導の一体化」を意識すべきことがわかった。

これらの結果について、単に生徒指導や学力対策の成果だというのではなく、教育の原点に立ち返った総合対策の成果だととらえている。そもそも、学校教育の目的は何なのか。それを簡単に言い表すならば、「人格の完成をめざす」ことである。さらに、「知・徳・体のバランスがとれた人を育てる」ということである。

本校ではこの原則を再確認し、子どもたちにとって今日が楽しく、明日が待たれる学校、つまり、「希望の登校、満足の下校を実現する学校」をただまっすぐにめざしてきただけである。Q-UやNRTを実施し、学力テストの過去問題や補充学習をいくらしても、学校教育の目的を見誤ってれば、教育効果は限定的であり、一方が良くなっても必ず他方で新たな課題が生まれるからである。知・徳・体をバランスよく伸ばす、その対策を地道に続けていけば結果的に学力は上がり、同時に他の課題も解決に向かっていくのである。

最後になるが、課題がなかったわけではない。「当たり前のことをやり切る」「組織でやり切る」については、やはり職員の取組に温度差があった。また、児童に「あいさつ」の習慣が身についておらず、「自分の思いを相手に上手に伝える」技術とともにコミュニケーション能力の育成に課題があると感じている。体力面では持久力がほとんど伸びていない。これらの課題は、平成28年度の研究の中心にすえて取り組んでいる。



# 特別支援教育の視点を生かした教科外活動

—教科指導の発想を教科外へ広げる—

赤磐市立石相小学校 校長 藤原伸哉

## 1 はじめに

本校は明治7年創立で、実に140年以上の歴史ある伝統校である。旧赤坂町の中心で、「赤磐」の地名の元となった「赤坂郡磐梨郡」からも古くから栄えた地域であることが伺える。しかしながら近年の児童数減には歯止めがかからず、昭和50年代中頃には全校児童300人を超えていたが、年々児童数は減少し、今現在は94人である。

学区からは多くの著名人を輩出している。まずは山本徳一先生である。大正10年に「鳥取上村小児保護協会」を正式に立ち上げ、母親教育及び乳幼児の衛生的保護活動に御尽力された。その後、法人組織への移行がなされ、現在の児童養護施設「社会福祉法人 鳥取上小児福祉協会 天心寮」に至っている。また、田中ビネー検査で有名な田中寛一博士も輩出している。



校庭にある山本徳一先生像

そして、本校の教育の特徴（特長かも知れない）として、全教職員で推進しているのが「特別支援教育」である。前出の児童養護施設「社会福祉法人 鳥取上小児福祉協会 天心寮」（以下、寮）は様々な課題を抱えている子どもたちが入寮してくる。歴史ある寮なの

で地元では寮の存在は当たり前になっており、寮の職員と本校職員そして地元住民と手を携えてしっかりと個々の子どもたちの教育的ニーズに応じていく必要がある。最近の入寮してくる子どもたちはいわゆる発達障がいや情緒障がいを抱えている割合が高い傾向にある。

また、障がいに対する理解という点でも学区全体でかなり進んでいる。そういった背景の中、本校の向き合うべき課題は自ずから「特別支援教育」であることは避けて通ることはできない。次に示すとおり数字の上からも課題は明白である。

	人数(人)	割合/全校(%)
特別支援学級(知的)	4	4.3
〃 (自閉・情緒)	9	9.6
診断のある児童	21	22.3
支援の必要な児童	36	38.3

## 2 本校の特別支援教育の概要

### (1) 学校経営計画への位置付け

学校教育目標の具現化は、特別支援教育の視点を骨子にしながら図ることとしている。また、学習指導の充実「学習の構造化の100%達成」を目指し、授業のユニバーサルデザインとダブルスタンダードに配慮する教職員であることを課している。

### (2) 学習環境への配慮

#### ①刺激量の調整

- ・普通教室の前面は極力掲示物等を貼らず、必要最少限のものにしている。
- ・ロッカー等へは必要に応じてカーテンを張り、目隠しをしている。
- ・教室内外を分けるドア等の透明ガラスには一部分に遮光シートを貼り、刺激の調整をする。

#### ②場の構造化

- ・教室内の物は、一つ一つ置く場所を決めている。
- ・当番活動の手順等を分かりやすく示している。

#### ③時間の構造化

- ・月、週の予定を示し、見通しをもたせている。
- ・1日のスケジュールを提示している。
- ・1時間の学習の流れを提示し、見通しをもたせている。

なお、この①～③については、定期的に管理職による「環境チェックリスト〈ハード編〉」でチェックし、常に改善を図れるようにしている。

## 教室環境チェックリスト 《ハード編》

90%以上できている：◎ 70～89%できている：○ 70%未満：△（改善をお願いします）

記入者（ ）	担当学級（ ）年
記入年月日（ 年 月 日）	
場の構造化	
①	教室内の物については、一つ一つ置く場所が決まっている。
②	教材の場所や置き方が一目で分かるように整理されている。
③	席の位置は個々の特徴に合わせたものになっている。
④	当番活動の手順や順番を分かりやすく示している。
刺激量の調整	
⑤	教室内の掲示物によって気がそれないような配慮がされている。
⑥	教室の前面の壁の掲示物は必要最小限なもの（時間割等年間を通して必要なもの）だけにしぼられている。
⑦	教室の壁等には、目隠しをする等、余計な刺激にならないような配慮がされている。
⑧	教室内、教室外から刺激となるような騒音（水音、声、楽器の音等）が入らない工夫がされている。
⑨	机の上に出すものを、学習に必要な最小限のものにしている。
時間の構造化	
⑩	月・週の予定を示し、見通しをもたせている。
⑪	一日のスケジュールを提示している。
⑫	1時間の学習の流れを黒板に書く等して、見通しをもたせている。
⑬	チャイムの合図を認識させ、開始時刻と終了時刻を守っている。

参考文庫：通常学級での特別支援のスタンダード  
教室でできる特別支援教育のアイディア

### ④視覚支援

・特別支援教育には視覚支援は欠かせない。口頭指示だけでは子どもたちへ十分に伝わらない。ICT機器を効果的に用いたり、他の視覚に訴えるものを活用したりしている。

## 3 特別支援教育の発想を教科外へ

学校教育は授業が中心である。しかしながら授業以外にも特別支援は求められ、本来的には区別されるものではない。当然、すべての教育のコアの部分に「特別支援教育」があるべきである。そこで教科外での特別支援教育の発想の生かし方について次の3点から述べる。

### (1) 一日の時程を想定して

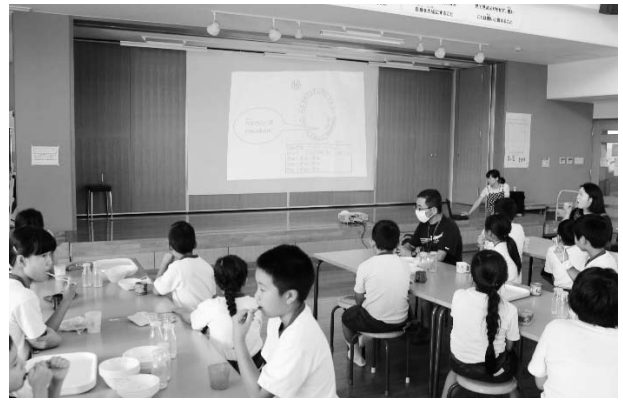
#### ①全校朝会

視覚支援による内容の構造化と時間の構造化



後ろのスクリーンには朝会の順番が示されている。写真は「4年生の学年目標発表」で子どもたちも視覚支援資料を示している。「今月の歌」を朝会で全校合唱するには、スクリーンには歌詞が示される。

## ②給食時間



ランチスペースで一斉に「歯磨き」をする際、前面のスクリーンには磨く場所を示した絵が映し出されている。なお、サンバの音楽を流し、軽快なブラッシングを支援している。音量に注意し過度な刺激にはならないようにしている。

## ③掃除時間



見えないゴミに見える化するために、シュレッダー処理された紙を床に適量まいて、それを目印にほうきで掃いている。なお、写真は自閉・情緒障がい学級での様子である。集める場所もビニールテープで示しており、広い教室を3か所に分け、数字で順序を示している。

なお、「もくもくそうじ」で黙って掃除をしている。音による刺激はないようにするため、音楽は流さない。

## ④一斉下校

下校担当教員が話をする際、二つのことに配慮している。一つ目は「褒めシャワー」である。その日にあった出来事で子どもたちの頑張りを見つけ、紹介することを必ず行っている。注意されて下校するのではなく、褒められて下校するのである。特別支援教育の大事な視点の中に「自己肯定感」をもたせることがあげられる。担当教員が短い時間の中で心温まる話ができるよう工夫している。二つ目はやはり視覚支援である。常時ではないが大切な内容は視覚支援を行っている。例



えば次のような内容のときである。

- ・危機管理に関すること……事故防止
- ・行事等への意欲喚起
- ・「褒めシャワー」の紹介を強調



なお、学年下校の際も同様である。そして「音(声)」の刺激調整のため、無言で集合を徹底している。支援の必要な児童、とりわけ寮の児童は登校下校のタイミングで気持ちを整えていくことが重要である。朝、寮で嫌なことがあって登校すると活動への入りがスムーズにいかないことがある。一方、学校で嫌なことがあった場合も同様である。無言での集合は下校集会や下校時の心の落ち着きぶりに繋がっている。なお、下校時には校門まで寮の先生が迎えに来てくださっている。登校時には校門で生徒指導主事が、運動場で養護教諭が、毎日全校児童を出迎えている。

## (2) 特別活動・学校行事の中で

### ①運動会の練習

全校、学年を問わず「見通し」が大切である。視覚支援によって「内容の構造化」と「時間の構造化」を図っている。さらに内容については、スケジュールと練習での注意点が示される。

また、体育館での練習ではプロジェクターによる視覚支援が頻繁に行われている。



②儀式的行事



どこの学校でも同様であろうが練習・本番での視覚支援は大切である。校長も視覚支援を怠ってはいけない。

### ③秋の遠足

運営委員会の児童が具体物を用いて出発式を盛り上げている。



### ④委員会活動

・図書委員会

「5年連続貸し出し  
10,000冊 達成イベント」  
くす玉わりでクライマックス。



### (3) 保健指導の中で

本校は前述したように寮の児童も含めて、心のサポートが必要な児童が多い。その中で養護教諭の果たす役割は実に重要である。保健指導にも当然、特別支援教育の視点が求められる。

#### ①場の構造化

・健康診断等での動線は大切である。必要最少限の動線の指示がなされている。(写真右)



## ②内容の構造化

・これから何をするのかの見通しを示している。また、自分がどう行動すればいいのかも示している。



## ③痛みの見える化

・保健室に痛みを訴えに来たとき、今の自分の痛みがどのレベルなのかを分かりやすく支援している。



## ④テーマ別の支援

・時期によって、保健指導の軽重がある。例えば、「自分のからだを知ろう」「よい歯の週間」「目の愛護デー」等々様々であるが次に示すものは「熱中症予防」である。ポイントになるものを4つ紹介する。

### ○ショート指導



身体測定の前に、保健室前のスペースを活用してプレゼンテーション等を行いながらショート指導を実施する。

○校舎内に「熱中症情報」を掲示し、毎日更新する。(写真右)

○掲示資料を工夫して、視覚支援を行う。

○児童の活動と繋げる。健康委員会がトイレに尿の色チェック表



を掲示し、自己チェックを促している。写真(右)は職員男子トイレのチェック表である。

## ⑤養護教諭自身がいるという安心感

わずかなことだが知らず知らずの内に子どもたちに安心感を与えている。例えば全校草取り

の活動中でも養護教諭は運動場で救急バッグを身に付けたまま草取りをしている。これも視覚支援である。



## 4 成果と課題

どの学校でも実践していることかも知れない。しかしながら、やっていることの「位置づけ」と「関係性」を整理することは案外手をつけていない。そして今回その一部を整理して分かったことが多くある。それは地味だが大きな成果である。

○ 本当に支援が生きたものなのか。

例えば運動会の行進練習で視覚支援として「しっかり手を振る」を書いたものを用意する。実は内容の構造化にはなっていない。できれば絵入りの支援が欲しい。そうすると誰にでもできるユニバーサルデザインへと繋がっていく。

視覚支援で止まって安心していないかどうか常に評価が必要である。

○ 当たり前と思って必要な支援をしていない場合がないだろうか。

掃除は「ゴミを掃く」は当たり前である。しかしそれを一歩立ち止まって考えると支援の中身が声かけ、もしくはほうきの使い方に関与してはいないだろうか。

○ 不要な刺激を取り除いているだろうか。

掃除中に常に音が流れているとつらい子もいるはずである。本校では掃除時間中のBGMはない。または放送で「片づけましょう」と一斉にスピーカーから流れてくる指示もない。静かだからこそ掃除に集中できている。

特別支援は本来、教科・教科外と分けられるものではない。あえて言うならば教科外は学校生活全般に支援を行い、スムーズに安心して生活できるということかも知れない。その支援で、今まで気づかなかった子が救われることもある。そして一方で「その支援は不必要なのでは」と振り返ることも忘れてはならない。特別支援は「生きる力」に必ず繋がる。





## 重点項目を核にした学校全体での道徳教育の推進

倉敷市立倉敷東小学校 校長 長 濱 美根子

### 1. はじめに

本校は倉敷市の中心部にあり、倉敷駅の近くに位置し、美観地区や大原美術館等の施設がある文化的に豊かな地域である。学校規模は、第2学年3学級、第1、3～6学年2学級、特別支援学級、院内学級を含め17学級児童数約380名の中規模校である。

現在の社会の状況や地域・児童の実態等を踏まえ、本校では、学校教育目標を『心豊かに 確かな知性をもってたくましく未来を生きる 児童の育成』と設定し、平成26・27年度の2年間、岡山県小学校教育研究会道徳部会指定の研究校として、学校全体で道徳教育を推進してきた（倉敷市立倉敷東小学校、2016）。

平成27年7月に「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」が出され、道徳の時間を教育課程上「特別の教科 道徳」として新たに位置付けて、道徳教育の具体的な指導に関する事項の改善がなされた（文部科学省、2015）。

今、学校全体の教育活動を通して、道徳性を育成していくことが喫緊の課題であり、そのために、各学校の実態を踏まえた道徳教育に関する対応が求められている。

そこで、本論文では、学校全体での道徳教育の推進について本校が行った実践の成果と課題について述べていこうと思う。

### 2. 本校の道徳教育における重点

本校の学校教育目標を達成するために大切にしたい重点内容項目（以下重点項目）を以下の4点とした。

- A 希望と勇気、努力と強い意志
- B 親切、思いやり
- C 勤労、公共の精神
- D 生命の尊さ

本校の重点項目を学校全体で推進していくため、各重点項目について、以下の実践を行った。

- A 希望と勇気、努力と強い意志
  - (1) みんなで頑張る自主学習
- B 親切、思いやり

- (2) 「よいとこ見つけの木」

C 勤労、公共の精神

- (3) みんなで応援！委員会活動

D 生命の尊さ

- (4) 大切にしよう！みんなの「命」

これらの実践を通して、児童の道徳性を高めることができると思った。

### 3. 研究仮説

学校全体で重点項目を意識して指導することで、児童の道徳的価値理解が深まり、道徳的実践意欲が高まるだろう。

上記の仮説について、まず、行った実践のねらい、関連する重点項目、活動の内容や様子を紹介する。そして、各実践が児童の道徳性の育成にどれほど影響したと教職員が思ったかについて、年度末にアンケートを実施したり、自由記述で研究を振り返ったりして、実践を評価した。

### 4. 実践内容

#### (1) みんなで頑張る自主学習

- ねらい
  - ・ 目標を立て、日々努力しようとする心情を育てる。
- 道徳教育の重点
  - A 希望と勇気、努力と強い意志
- 活動の内容・様子

本校では、どの学級も家庭学習の一つとして自主学習（以下自学）に取り組んでいる。伊垣（2012）を参考に、自学ノートを一冊使い終わったら、クラス内に蓄積し、自分たちがどれだけ頑張っているかが可視化されるようにした。

ノートを終わらせることだけを目標にしては、ページ数を増やすだけの自主学習になりかねない。そこで、優れている自主学習ノートの内容を互いに共有できるよう、クラス内に手本ノートを掲示したり、全体で紹介したりして、内容面の指導も行った。

また、互いにノートを褒め合うことで、友情を深めたり、自分らしさを自覚したりすることができるようになった。

クラス内にノートのタワーができると、自分も頑張ろうという思いや自分たちのクラスはよく頑張っているという思いを抱くようになる。他クラスとの比較ではなく、自分たちが立てた目標に向かって、努力することの大切さを感じることができた。



自主学习ノートのタワー

が気持ちよくなることに気付くことができた。

人権週間後は、全学級の台紙を廊下に掲示した。そうすることで、児童が廊下を通る度に友達の良さを感じることができるようになった。10月には、ペア学年で良いところを見つけ合う活動を行い、12月の人権週間では、学校全体で良いところを見つけ合う活動を行うことで、学年内だけでなく、他学年の良さも認め合えるよう広げていった。



学級内に掲示した「よいとこ見つけの木」



手本ノートの紹介コーナー



廊下に掲示した「よいとこ見つけの木」

## (2) 「よいとこ見つけの木」

- ねらい
  - ・ 友達の良さに気付き、積極的に伝え合おうとする心情を育てる。
- 道徳教育の重点
  - B 親切、思いやり
- 活動の内容・様子

6月の人権週間の取組の一つとして、各学級で友達の良さに気付き、それを伝え合う活動を行った。普段、児童は友達の良さに気付いても意識して伝え合うことは難しい。そこで、改めて友達の良さを文章にして表したり、伝えたりすることができるようになるために「よいとこ見つけの木」の活動を行った。この実践を通して、児童は誰にでも良さがあることや良さを積極的に見つけて伝えることで、互い

## (3) みんなで応援！委員会活動

- ねらい
  - ・ 体験活動を通して勤労の尊さに気付き、みんなのために働こうとする心情を育てる。
- 道徳教育の重点
  - C 勤労、公共の精神
- 活動の内容・様子

委員会活動でどのような仕事をどのような願いでしているのかが分かるように、掲示板で各委員会の活動を紹介することにした。掲示板には、活動の様子が具体的に分かる写真を掲載し、各委員会がそれぞれの立場からどのように学校をよりよくしようと願っているのかが分かるように掲示した。

日頃、目立たないところで活動している委員会で

も、このように掲示することで、どのような願いを込めて仕事をしているのかが分かるようになった。また、互いが学校のために働いていることを再確認できる機会となっている。掲示するだけでなく、昼の放送で、各委員会が自分たちの取組について紹介することで、低、中学年の児童が学校を支えている高学年の姿を意識できるようになった。

さらに、委員会活動を頑張っている人に向けて手紙を出し、それを放送で紹介することで、働くことが人の役に立ち、感謝されていると実感できるようにしていった。こうすることで、低・中学年の児童も委員会が呼び掛ける活動に積極的に参加するようになった。このように、学校全体で勤労の価値を高め、自分から働くことの良さを感じて行動することができるようになっていった。



委員会活動紹介ポスター



委員会活動の様子

#### (4) 大切にしよう！みんなの「命」

- ねらい
  - ・ 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にしようとする心情を育てる。
- 道德教育の重点
  - D 生命の尊さ
- 活動の内容・様子

本校には、院内学級があるので、院内学級との交流を意識して活動している。主に教職員が院内学級の行事に参加し児童と交流している。校内では、院内学級の児童の活動の様子を掲示したり、第6学年の児童と手紙の交流を行ったりした。そうすることで、命と向き合っている生活している友達のことを身近に感じ、命を大切にしていこうとする気持ちが、教職員だけでなく児童にも高まっていった。



院内学級の掲示

## 5. 結果と考察

今年度の実践を振り返るために、年度末に実践を評価するためのアンケートを実施した。

まず、今年度、児童の道德性を高めるために行った様々な実践について、「とても効果がある」を4点、「全然効果がない」を1点として4段階で評価するアンケート用紙を教職員全員に配布した。その結果、14名から回答が得られたので、各実践の評価平均値と標準偏差を求めた。その結果、下の表のようになった。

実践名	平均値	標準偏差
自学ノートタワー・紹介コーナーなどの充実	3.31	0.91
よいとこ見つけの木	3.69	0.46
委員会ポスター	3.62	0.49
院内学級との交流	3.69	0.46

今年度の実践評価アンケート結果

平成27年度に行ったその他の実践（例えば、スピーチ活動の充実や授業観察シートの活用など）についても評価した平均値は、3.39であったが、全ての実践において、平均値と同じくらいかそれ以上の値になっていることが分かる。平均標準偏差も0.55になっており、自学ノートタワーの実践以外は、標準偏差も小さかった。このことから、回答した教職員が同じように高い

効果があったことを感じていることが分かった。

また、同じ実践について、次年度も実践するべきかについてもアンケートを実施した。今年度のアンケートと同様に、「とても実施すべき」を4点、「実践すべきではない」を1点として、4段階で評定してもらった結果、下の表のようになった。

実践名	平均値	標準偏差
自学ノートタワー・紹介コーナーなどの充実	3.25	0.92
よいとこ見つけの木	3.58	0.49
委員会ポスター	3.33	0.62
院内学級との交流	3.50	0.65

#### 次年度も実践するべきかアンケート結果

他の実践についても次年度行うべきか尋ねた結果、平均値は3.20、平均標準偏差は0.69となった。こちらの結果からも自学ノートタワーの標準偏差以外、他の実践よりも実践すべきと思った教職員が多いことが分かった。

さらに、研究の振り返りからも、今年度の実践について次のような記述が見られた。

- 6年生が関連的な道徳の中で、院内学級について学習する機会を設けることができよかった。6年生が院内との学習で学んだことを学校全体に発信しようと掲示物を作成し、文化祭で掲示することができた。今後も交流を図れるよう、年計に取り入れてもらいたい。
- 委員会の掲示物などは、低中学年の児童にとって、委員会の内容を知る良い機会になった。

このように、重点項目について学校で共通理解を図りながら行った実践について、教職員全体がその効果を高く実感し、次年度も実践すべきという思いであることが分かった。

## 6. 終わりに

以上のように、学校全体で重点項目を核にして、道徳教育を推進した結果について考察してきた。

平成30年度から実施される「特別の教科 道徳」では、各学校の実態に応じて重点項目を決め、教職員全体で道徳教育を推進していくことがより一層求められる。そのためには、まず、重点項目を教職員全体で共通理解し、全員で大切にしていこうとすることが何より大切である。本校の重点項目を決める研究推進の話

合は3時間にも及んだ。しかし、議論を経て決めた重点項目なので、みんなで大切にしようという意識が高まった。

その上で、今行っている実践を重点項目という視点から見直し、学校全体で力を入れて実践できるかどうかを判断することである。

本校でも年度当初、重点項目に対して行う実践について様々な意見が出された。しかし、特別なことや実践が難しいことではなく、今行っている実践を基本にして、そこに重点という「魂」を入れるということを大切にして実践した。そうすることで、今まで個別になされていた各教科や諸活動の指導が、重点項目で関連付けられ、道徳の時間が、重点項目の理解を補充・深化・統合する要として機能するようになっていったのである。このように、道徳の時間が要として機能するためにも学校全体で重点項目を意識することは大切であると感じた。

一方、4つの重点項目は多いのではないかという意見も出された。その理由は、4つの重点は覚えづらく、やるが多くなりがちで無理が生じるというものであった。そのような意見も踏まえると、重点項目としては2～3つが望ましいのではないかとと思われる。今後、さらに学校の実態に応じた道徳教育を実践し、児童の道徳性を高めていきたい。

#### 〈参考文献〉

- 倉敷市立倉敷東小学校. (2016). 研究紀要
- 伊垣尚人. (2012). 子どもの力を引き出す 自主学习ノートの作り方. ナツメ社.
- 文部科学省. (2015). 小学校学習指導要領解説道徳編

#### 謝 辞

本論文は、平成27年度岡山県小学校道徳教育研究大会の研究紀要を再構成して作成したものです。

研究大会に際して、環太平洋大学 特任教授 大野光二先生をはじめ、岡山県小学校教育研究会道徳部会の先生方には、本校の道徳教育の推進のために、懇切丁寧にご指導していただきました。この場を借りて感謝の意を表します。



# キャリア教育を通して 自主的・主体的に学ぶ児童を育てる

赤磐市立仁美小学校 校長 河本 弘志

## 1 はじめに

学力向上が学校の最重要課題であることは間違いない。日々の授業実践を通して、確かな学力を身につけるよう学校は授業改善などの取り組みを日々進めている。学習したことを確実に身につけさせる手立ても大切であるが、それ以上に児童に自主的・主体的に学ぶ力を身につけさせることは、将来にわたって、児童の「生きる力」を身につけさせることにつながるのではないかと考えている。

## 2 主題設定の理由

### (1) 児童の実態から

本校は赤磐市北部の山間部にある全校児童24名の極小規模校である。児童は指示された課題に対しては真面目に取り組めるが、自ら課題を見つけ自主的・主体的に学習をしたり、友達と協力して学習を進めたりするなどの意欲面に課題が見られる。

### (2) 地域の特性から

周囲を山林や田んぼに囲まれた自然豊かな環境にある。地域の主な産業は農業である。地域に工場や商業施設など就労の場は少なく、若者の市部への流出が多く、それに伴って児童数は年々減少傾向にある。昨年度より学校支援地域本部事業が発足し、多くのボランティアの方が登録してくださり、学校に対してとても協力的である。

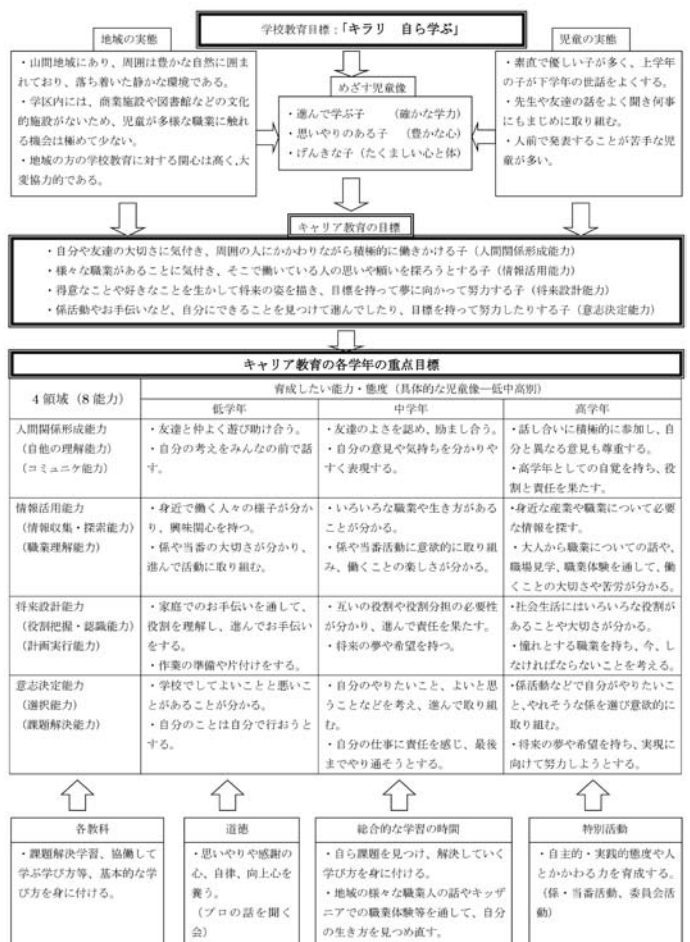
キャリア教育の目的は、子供たちが力強く生きていくために必要な資質や能力を育てていくことであり、本校の児童の実態や地域の特性から、キャリア教育を進めていくことが重要であると考え研究主題を設定した。そして、本校キャリア教育の目標(児童像)を、キャリア教育の4つの領域から次のように設定した。

### (3) キャリア教育の目標

① 自分や友達の大切さに気づき、周囲の人に関わりながら積極的に働きかける子(人間関係形成力)

- ② 様々な職業があることに気づき、そこで働いている人の思いや願いを探ろうとする子(情報活用能力)
- ③ 得意なことや好きなことを生かして将来の姿を描き、目標を持って夢に向かって努力する子(将来設計能力)
- ④ 係活動やお手伝いなど、自分にできることを見つけて進んでしたり、目標を持って努力したりする子(意思決定能力)

赤磐市立仁美小学校 キャリア教育 全体計画



キャリア教育全体計画

そして、児童の実態や地域の特性を考慮して、研究内容を次の4点に絞って進めることにした。

- ① キャリア教育年間指導計画及び年間指導計画（学年別）の作成
- ② 体験活動の充実
- ③ プロの話聞く会の開催
- ④ キッズニア甲子園での職業体験

### 3 研究内容及び具体的な実践

#### (1) キャリア教育全体計画・年間指導計画の作成

キャリア教育で目指す4領域の能力について低中高等学校毎に、育成したい具体的な能力・態度を整理し、各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動など全ての教育活動を通して取り組めるよう教育課程に位置づけた。また、学年毎に年間指導計画を作成し、学年に応じた実践を進めるように工夫した。

キャリア教育年間指導計画（3・4年）

時期	特別活動	総合的な学習の時間	道徳	教科
4月	「3・4年生になって」 「係・当番・委員会の仕事」		2-（4） 生活を支える人や高齢者に尊敬と感謝の気持ちをもつて接する。	
5月	みんなのために自分の役割を果たし、より良い学校・学校生活のために工夫する。	「仁美お宝探偵団 すごいぞ！夢百笑」		社会 「住みよい暮らしをつくる」
6月		探求的な学習を通して、地域の人々の暮らしや生き方を学ぶ。 「夢百笑をもっと活性化するため何をしたらいいか考え工夫する。」	「プロの話聞く会」 ・歯科衛生士 森さん ・陶芸家 戸川さん ・消防士 石原さん ・浄化センター 藤田さん ・水泳指導者 小原さん	「火事から暮らしを守る」
7月				
9月	「2学期のめあて」 自分のやりたいことやよいと思うことを考え、進んで取り組む。	「夢に向かって」 キッズニアでの職業体験等を通して、自分の生き方を見つめ直す。 事前学習 ① 働くことについて考える（家の人へのインタビュー） ② 身近にある仕事を知る（発表・交流） ③ 陶芸教室 ④ 行動計画を立てる		体育 「運動会」 音楽 「学習発表会—音楽発表」 困ったことがあった時、話し合っ解決していくことで協働して学ぶ学び方を身につける。
10月		キッズニア校外学習		
11月		事後学習 ① 体験の振り返り ② 学習発表会 ・プレゼンテーション（4～6年） ・発表（1～3年） 「みんな手をとりあって」（ハンディキャップのある人の暮らし）	「プロの話聞く会」 ・陶芸教室 戸川さん ・声楽家 福原さん ・声楽家 大塚さん	
12月				
1月	「3学期のめあて」 今の自分を確信し、より高いめあてに向かって取り組むことで社会性を培う。	・車椅子体験と手話を学ぶ（高齢者の暮らし） ・高齢者体験 ・市社会福祉協議会の方に話を聞こう ・1人暮らしの方たちに手紙を書こう	「プロの話聞く会」 ・翻訳家 小池さん ・手話通訳者（ ）	理科 「物のあたり方」 協働して課題発見・実験計画・実験の実行・原因の追究を行う力を養う。
2月				
3月				

中学年の年間指導計画例

#### (2) 体験活動の充実

##### ① 餅米作り

地域の農家の協力を得て、餅米作りに取り組んでいる。地域の基幹産業である米作りを少しでも理解でき



田植え



稲刈り風景



地域の人と餅つき



感謝集会



登り窯の見学

るように、一部の体験だけでなく、初蒔きから、収穫感謝祭まで一連の作業を体験すること、また、農家の人や地域ボラン

ティアの方との交流を通して、米作りの苦労や喜びを体験できるように工夫している。活動は、4月の初蒔

きから始まり、育苗、田植え、案山子の制作、稲刈り（収穫）そして、秋の収穫祭、2月の感謝祭へと年間を通して活動を進

めている。また、児童が主体的に取り組めるよう、高学年の児童が作業の仕方や世話の仕方など調べてまと

め、作業前に全校児童に説明をして作業を始めるようにしている。

特に、収穫祭は、「仁美ふれあい祭り」と銘打って地

域・保護者の方の協力を得て、餅米の販売や餅つき、おこわの調理・販売等を行っている。そこで児童は、

米作りについての発表や合奏・合唱などを披露し、地域の方に楽しんでいただいている。そして、2月には、米作りを指導して

くださっている農家の方やボランティアの方を招待して、お米を使った調理でもてなし、ゲームや発表をして感謝の気持ちを

伝えて一連の米作り体験を終えている。

##### ② 備前焼制作

地域の備前焼作家の協力を得て、



窯出しの様子を見学



手回しろくろで作品作り

窯の見学や窯出しの様子を見学するなど一連の制作過程を体験することを大切にしている。

### (3) プロの話聞く会の開催

地域に就労の場が少ない現状から、児童が職業を意識する場は極めて少ない。そこで、各方面の人を講師に招いて、職業紹介とともに、どうしてその職業に就



プロの話聞く会（消防士）

いたか、仕事の魅力やその職業に就くための努力などについて話をしていた。消防士や警察官、新聞記者、陶芸家、スイミング指導者など、日頃からお世話になっている方を中心に話をしていた。

最初は、本校の卒業生でもあり、近くの消防署に勤務されている方に来ていただいた。自分たちに近い



プロの話聞く会（警察官）

先輩でもあり、とても興味深く熱心に話を聞くことができた。「どうして消防士になったの?」「どんなお仕事をしているの?」「消防士になるために、どんな勉強をしたのですか?」等の質問に、丁寧に時には熱く語ってくれた。

続いて、地元の駐在所の警察官に来てもらった。登

窯の見学や作品作りに取り組んでいる。窯の見学では備前焼の特徴や窯の作りなど、実際に見学しながら説明を聞く機会を設けている。作品作りでは、中学年以上の児童は、手回しろくろを使っての作品作りに挑戦するなど、学年に応じた作品作りに

校時挨拶運動など身近な方だけど、警察官の仕事について、具体的に話を聞くのは初めてである。ここでも児童は、「警察官になってよかったことは?」「警察官になるためにどんな勉強をしたの?」など具体的なことについて意欲的に質問していた。

その他にも、児童の指導に来ていただいている音楽の先生や水泳の先生など多くの方に、少しの時間を利用して職業について話を聞く機会を設けた。日頃なかなか聞くことができない様々な職業の方の生の話を聞くことができ、児童は自分の将来の職業についての関心を持つことができ、どの会も有意義なものになった。

### (4) キッザニア甲子園での職業体験（10月）

キッザニア甲子園は楽しみながら社会のしくみを学ぶことができる、こどもが主役の施設である。体験できる仕事やサービスも多く多様（約100種類）である。そこで、児童は、本格的な設備で様々な道具を使って、大人同様に様々な仕事やサービスを体験することができる。

#### ① 事前学習

児童は、まず最も身近な職業人である家族へのインタビューを行い、グループでの交流を通して、様々な職業への理解を深めた。その後、キッザニア甲子園での体験計画を立てた。関心のある仕事、挑戦してみたい仕事を、「仕事の内容」「誰のための仕事か」「何のための仕事か」という観点から、それぞれ10個書き出した。そしてグループ毎に体験する順番を決めていった。

#### ② キッザニア甲子園での職業体験



パビリオンで

キッザニアでは、グループごとに計画に沿って体験したいパビリオンを回り体験していった。仕事場への大人の立ち入りは一切禁止されており、児童は主体的に活動することができる。パビリオンによっては、希望者が多く、待ち時間が長



銀行で口座開設





放送局スタッフに

することができた。児童は日ごろ体験したり、身近に触れたりすることのできない職業にも積極的に挑戦することができた。また、同じパビリオンで他校の児童とコミュニケーションを図りながらの仕事体験も経験でき、楽しく取り組むことができた。そして、働いて得たお金（キッズ）を児童は貯金したり買い物したりと、自ら考えて行動することもできていた。このようにキッズニアでの体験学習時間は4時間余りだったが、児童は、様々な職業や施設の利用など生き生きと活動することができていた。

### ③ 事後学習

自分が体験した仕事を紹介する「仕事紹介カード」を作成し、それぞれの体験を交流する機会を設けた。時間的な制約もあり、希望していたができなかった仕事もあり、友達の仕事紹介カードを見てさらに興味を広げる場になった。

ワークシート  
10月26日  
4年3組

Kidz'nia

## 仕事紹介カード

ホテル (宿泊) の仕事

笑顔 が好きな人にオススメ!

仕事の内容

お客様がホテルに入ってきた時にうけつけてお客様のよやくをかくにんしたりする。お客様から電話がかかってくることもたまにはある。次のよやくをしているお客様のデータをパソコンに入れたりする。

オススメする理由

この仕事は、笑顔がまてきな人でいうちゃうか、のある人がまいていると思う。あとお客様がまたとまりに来たときてくれるようなホテルになれはいいと思う。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

一連のキャリア教育を通して、今まで以上に職業や自分の将来についての関心が高くなった。また、様々な職業や社会の仕組みについて理解を深め、仕事に対する責任や協力、充実感など「仕事」の面白さや大変さを自覚することもできた。そして、将来の夢について具体的に考える児童が増えた。

また、一連の活動の中で、友達と協力して、進んで活動したり自ら考えて行動したりする姿が多々見られたことも一つの成果である。

一方、事前アンケートでは「働くこと」に対して、「忙しい」「大変」「疲れる」「お金を稼ぐ」というイメージを持っている児童が多かったが、事後アンケートでは、「地域・社会・誰かのため」「役に立つ・守る」「みんなを笑顔にする・喜ばせる」「楽しい・やりがいがある・うれしい」等々の感想が多くみられた。このように、児童の職業観が広がったことは大きな成果である。

### (2) 課題

本年度は初年度でもあり、実践しながら年間計画を作成し、様々な活動を積極的に取り入れた。しかし、キッズニア甲子園での活動は、保護者の経済的な負担も多く、毎年実施することには無理がある。また、プロの話聞く会も、毎年違う方をお呼びするとなると幅広いボランティアの方の確保が必要となる。

したがって、キッズニアでの職業体験やプロの話聞く会など、6年間を見通した計画が必要である。

## 5 おわりに

本校の教育目標は、「きりり 自ら学ぶ」である。極小規模校であり、一人ひとりの教育機会は恵まれている。地域の協力もあり、様々な体験も可能である。しかし、少人数のため、教師や大人が、子供が考えた行動したりする前に、手出し口出ししたりして子供の自主性・主体性を奪ってしまうこともあり配慮が必要である。今後も、小規模校の良さ（少人数・地域の協力・豊かな自然等）を生かして、児童の自主性・主体性を伸ばす教育を進めていきたい。



# 故郷を誇りに思い、確かな学力・豊かな心・ 健やかな体で、未来へ飛躍する伊里の子どもたち —学校・家庭・地域の総合力を基盤にして—

備前市伊里学園代表 備前市立伊里小学校 校長 坪本 義裕

## 1 はじめに

平成28年4月1日、学校教育法が改正された。小中一貫教育を行う義務教育学校の設置が可能となり、全国15市区町に22校が設置されている。中高一貫教育校の設置が落ち着き、今は全国的に小中一貫教育や小中連携を推進し、市区町村教委が主体性を持って我が町の教育の充実を図ろうとしているようである。

備前市においても、平成29年度から順次、市内全小中学校を小中一貫校とする方針が示された。伊里中学校・伊里小学校はパイロット校として指定を受け、研究に取り組むことになった。

2年間の研究の成果と課題を報告する。

## 2 研究の目的

平成29年4月1日の小中一貫教育校伊里学園の開校に向けて、小中一貫教育の在り方を研究する。

## 3 平成27年度の研究方針

### (1) 研究計画

小中学校ともに異動で新しい校長が赴任した。1学期は中学校の修学旅行、運動会や体育会等、大きな行事が続く。そこで、4～6月は市教委と管理職とが協議して研究の方向を定め、6月から本格的に研究をスタートさせることにした。また、3学期は中学校が進路事務で多忙になることを考慮し、主な研究期間は12月までとすることにした。

研究計画は次の通りである。

月 日	内 容
5月13日	市教委・管理職の協議 ※他の日も適宜、電話で協議・連絡
6月29日	第1回研究推進委員会 ※市教委出席
7月30日	第1回小中合同研修会
8月28日	第2回小中合同研修会
9月30日	第2回研究推進委員会
9～12月	小中学校それぞれで実践
12月25日	第3回小中合同研修会 第3回研究推進委員会 ※市教委出席

### (2) 第1回研究推進委員会

小中学校の校長・教頭・教務主任・研究主任で開催

し、(1)の研究計画を決定した。更に次の点について協議し、必要事項を決定した。

### ①「目指す子ども像」の設定

小中一貫教育を行う上で大切にしたいことは、小中学校が共通の目標を持ち、その達成に向けて協働し、結果に対して共に責任を持つことである。そこで、まず共通の目標となる、義務教育9年間で育てたい「目指す子ども像」を設定した。設定に当たっては、伊里地区及び伊里小中学校の児童生徒の特長や課題を踏まえるとともに、「備前市教育に関する大綱」の趣旨を生かし、市の施策との連動を図ることにした。

＜「備前市教育に関する大綱」重点取組方針＞

- ①確かな学力・健やかな体・豊かな心の育成
- ②未来への飛躍を実現する人材の育成
- ③安全で安心できる学び場の確保
- ④家庭・学校・地域の総合力で取り組む教育活動
- ⑤取組を支える環境整備

論文のタイトルが「目指す子ども像」である。知・徳・体のバランスが取れた子どもたち、備前市が推進する英語・ICTの力を身につけ、未来へ飛躍しようとする子どもたち、そして、地元伊里に残って伊里を盛り上げるもよし、伊里を出て日本全国や世界で活躍し、外から伊里を支えるもよし、そんな故郷を愛する子どもたちを育てたいという思いを込めた。

### ②研究組織

「目指す子ども像」の実現に向けて、外国語、学習指導、生活指導、特別活動（地域や児童生徒同士の交流について研究する）の4専門部会を設置した。



そして、4専門部会で協議し、決定したことを次表の12名からなる研究推進委員会で検討し、最終的に小

中合同研修会で共通理解する仕組みにした。

部 会	顧 問	部 長	副部長
外 国 語	小教頭	中研究主任	小外国語主任
学習指導	中校長	小研究主任	中学習指導係
生活指導	小校長	中学生徒指導	小生徒指導
特別活動	中教頭	小教務主任	中特活主任

### (3) 第1回・第2回小中合同研修会

#### ①各部会の「目指す子ども像」と「評価指標」

小中学校の全教職員を各部会に振り分け、小中合同研修会を開催した。最初は緊張した雰囲気であったが、すぐに打ち解けて熱心に討議を始めた。

まず、「目指す子ども像」を受けた「各部会が目指す子ども像」を、続いて「評価指標」を設定した。

部 会	目指す子ども像(○)・評価指標(■)
外 国 語	○外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図り、広い視野を持ち、社会に貢献できる児童生徒の育成 ■英検3級(同等の学力)中卒時60%
学習指導	○主体的に学び、自らの進路を切り拓いていける児童生徒の育成 ■全国学力・学習状況調査で全国平均を超える生徒70%以上(中3)
生活指導	○社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成 ■友達・教職員・来校者に挨拶できる児童生徒100% ■地域で挨拶できる児童生徒80%以上
特別活動	○地域を誇りに思い、郷土愛を持ち続け、地域に貢献しようとする児童生徒の育成 ■中学校卒業時にアンケートで「地域を誇りに思う」生徒100%

## 4 平成27年度の研究内容

### (1) 外国語部会

#### ①中学校英語科教員による小学校での指導

小中一貫教育充実のため、中学校の英語科教員が週1日、小学校で勤務することになった。授業は学級担任・英語科教員・ALTの3人で行う。ALTとのコミュニケーションが充実し、内容の濃い授業を行えている。英語科教員は休み時間にも積極的に児童と関わり、6年生は中学校進学への不安感が軽減した。

一方、英語科教員は小学校の様子を深く知ることができ、それを中学校の他の教員に伝えている。

### ②英検の受検推進

これまでも中学校で英検を受検する児童はいたが、学級担任や英語科教員が受検を呼びかけるようになり、受検する児童が大幅に増えた。英検Jr.の受検者も増えており、英語への関心の高まりを感じている。

中学校では二次のインタビューテストから指導を行っていたが、一次の筆記・リスニングも希望者対象に指導を始めた。小中学校ともに英語に親しむ生徒が増えており、今後の英検合格者の増加を期待している。

### ③英語スピーチコンテストへの参加

中学校から岡山城東高校英語スピーチコンテストに2名の生徒が出場した。小学校では英語科教員がコンテストの様子をビデオで紹介した。

### ④校内の英語表示

写真1は職員室の入口である。このように、職員室、保健室、体育館など主な部屋に、小中学校が協力して作成した英語の表示カードを掲示している。



写真1 部屋の表示

また、小学校では写真2の通り月名や数字を階段に掲示し、児童が日常的に英語に触れられるようにしている。



写真2 階段の掲示

### ⑤「English Room」の設置

小中学校ともに、空き教室を利用して英語教室を整備した。写真2 階段の掲示英語の辞書やTV、地球儀等を置き、授業の充実と意欲の向上を図っている。今後、世界地図、外国の図書、AV機器等を整備し、映像や資料を活用しながら、授業の充実を図っていきたいと考えている。

### ⑥「English Day」の取組

小学校は毎週金曜日、中学校は木曜日を「English Day」とし、朝晩の挨拶や校内放送を英語で行っている。また、小学校ではALTによる絵本の読み聞かせ、中学校では「English Salon」という、ALTが母国の歴史や文化を紹介する取組を行っている。

### (2) 学習指導部会

#### ①小中相互の授業参観

まず、互いの授業を知り合うことが大切と考え、相互の授業参観を行うことにした。空き時間を調整したり、一斉下校後の水曜日6限に中学校に行ったり、参観日や研究授業を利用したりしている。改善点よりもその授業のよさを見ることを共通理解している。

## ②授業規律の一貫化

小学校で指導され身に付けた授業規律を中学校で継続できれば、中学生は学習しやすくなり、学力の向上にも繋がるであろう。そこで、小中学校の授業規律を持ち寄り、検討を行った。結論は「表現は違っても、ポイントは同じ」であった。小学校、中学校だけのポイントもあるが、準備・姿勢・声の大きさ・話し方・聞き方の5点が共通していた。一番大切にすべきことは小中学校の指導の継続だと改めて感じた。

## ③家庭学習の一貫化

県教委から「家庭学習のスタンダード」が出された。学力の向上、学習習慣や生活習慣の確立、進路を自ら切り拓く意識の育成等、家庭学習の意義は大きい。

まず、学習時間の目安を、小学校は学年×10分、中学校は1・2年生が平日90分、休日120分、3年生が平日120分、休日180分と設定した。そして、これだけの時間、学習できるようにするために、自主学習を実施することにした。担任裁量で行っていた自主学習を小学校3年生から中学生までの全員が実施することにした。内容のある取組、継続した取組が難しい児童生徒もいるが、工夫しながら指導を行っている。

### (3) 生活指導部会

#### ①生活のきまりの一貫化

授業規律と同様、生活のきまりについても検討した。概ね小学校はおおらかで、中学校は細かい印象である。指導の不徹底が荒れに直結する中学校ではやむを得ないのであろう。検討する中で、小中学校ともに「職員室は入口まで」のような不文律が多いことが分かった。「靴や靴下の形や色」等はこれまでの指導から、急な変更は難しい。まずは、不文律を文章化して曖昧さを減らし、時間をかけて調整していくことにした。

#### ②四つの重点の決定

生活指導の重点を小中一貫教育の視点から特に大切にしたいことに絞り、指導を徹底することにした。一つ目は挨拶と返事、二つ目は無言集合、三つ目は靴揃え(特に下足箱)、四つ目は大きな声で歌う校歌とした。

小学生も卒業式等で大きな声で校歌を歌う。中学校の入学式でも校歌を歌おうということになった。中学生が校歌を歌う様子のDVDを6年生に見せ、練習を始めた。1日体験入学では音楽科教員の指導も受けた。入学式では1年生や地域の方を含めた全員合唱になった。地域の方々が大変喜ばれ、中学校は入学式から学校の一体感を感じることができた。

## ③メディアスリム

小学校でも高学年はスマホを持つ児童が増え、トラブルも発生するようになってきた。ゲームやTV等メディアとの関わり方にも指導が必要である。

そこで、養護教諭を中心にして「メディアスリム化大作戦」を実施し、写真3のようなポスターを作成した。また、小学校と中学校の保健委員会が協働して写真4のようなのぼりを作成した。強化月間にはこれらを使ってメディアスリムと呼び掛け、小中学校が一緒になって、啓発活動を行っている。

### (4) 特活部会

#### ①小中合同奉仕活動

普段からお世話になっている地域のために、小中合同の奉仕活動を行った。10グループに分かれ、中学生



写真3 ポスター



写真4 のぼり



写真5 合同奉仕活動

をリーダーにして活動した。伊里駅の自転車置き場に溜まった砂をすっかり取り除いたり、こども園の園庭に溜まった落ち葉をきれいにしたりして大変喜ばれ、児童生徒は達成感を味わうことができた。

平成28年度は区長さんにも参加していただいた。平成29年度は各地域に出向いての奉仕を計画している。

#### ②卒業式のメッセージ交換

小学校の卒業生へ、中学校生徒会役員が「小学校のリーダーとして活躍したことを讃え、中学校で待っていることを伝える」メッセージを持ってきてくれた。

小学校からは5年生が「小学校時代にお世話になったことへの感謝の気持ちと高校での活躍を祈る」メッセージを送った。

どちらも心温まる気持ちのこもったメッセージであった。今後の小中一貫教育の進展が楽しみである。

## 5 平成28年度の研究方針

### (1) 第1回研究推進委員会

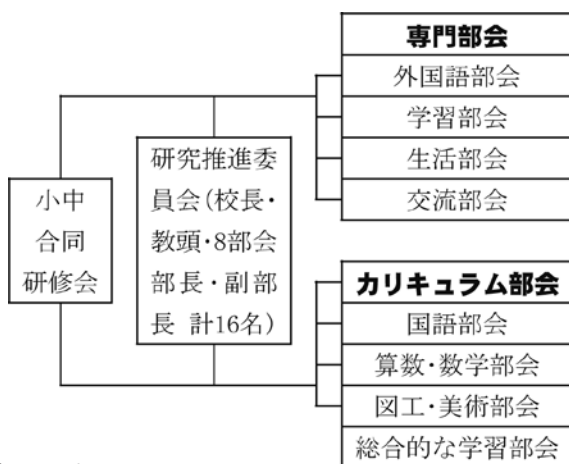
平成28年度の研究の進め方について、学年始休業中に協議した。異動により6人が新メンバーとなったため、研究の意義と基本的な進め方について、確認と意思統一を図ることも重要なねらいとした。

## ①組織改革

研究組織は非常に上手く機能しているが、「指導」は教師主導の感じが強く、「特別活動」は内容が見えにくいとの意見が出され、下の組織図の通り修正した。

また、9年間を見通したカリキュラムの作成も必要との意見が出され、新たにカリキュラム部会を設置することにした。しかし、1年間で全教科・領域で作成するのは困難である。平成28年度は組織図の4教科・領域、平成29年度は理科・外国語・保健体育・学活、平成30年度は社会・音楽・技術家庭・道徳とした。

これに伴い、研究推進委員会にカリキュラム部会の各部長・副部長を加えることにした。ただし、専門部会との兼務があり、実際は4人の増加である。



## ②研究計画

平成28年度は、5～12月に毎月1回、合同研修会を持つことにした。また、その後必ず研究推進委員会を持ち、8部会の研究内容と進捗状況を確認し、学園全体で共通理解しながら研究を進めることにした。

月 日	内 容
4月 4日	第1回研究推進委員会
5月18日	第1回小中合同研修会 ※市教委出席
6月22日	第2回小中合同研修会
7月29日	第3回小中合同研修会
8月24日	第4回小中合同研修会「市教委講話」
9月 7日	第5回小中合同研修会「不登校」
10月12日	第6回小中合同研修会「防災」
11月 4日	第7回小中合同研修会
12月26日	第8回小中合同研修会 ※市教委出席

## 6 平成28年度の研究内容

前半30分は専門部会、後半50分はカリキュラム部会とし、今年度はカリキュラム重視で研究を進めている。

## (1) 専門部会

平成27年度の研究内容の充実を図りながら、次の点を新しく加え、研究を発展させている。

部 会	新たな研究内容
外国語	・「書くこと」の指導の充実 ・小学校では英検Jr.の全員受検
学 習	・家庭学習の詳細な実態調査の実施 ・その充実に向けた効果的な手立て
生 活	・小中合同挨拶運動 ・特別支援教育における小中一貫
交 流	・小中合同芸術鑑賞会 ・小学校運動会等への吹奏楽部の派遣

## (2) カリキュラム部会

詳細で分厚いカリキュラムは、特に複数教科を指導する小学校においては使いにくい。そこで、教科書会社が作成した系統表を参考にして学習内容を整理し、系統づけ、それに身につけさせたい能力や語句等を連動させ、A3用紙1～数枚での作成を目指している。図工・美術、総合的な学習は、地域の教材や人材の活用についても記述するなどの工夫も行っている。

下は算数・数学のカリキュラムである。

## 7 今後に向けて

2年間の研究で、小中学校の教職員が「伊里の児童生徒を育てる」という共通の意識を持つようになってきた。その一方で、小中学校の学校文化の違いを感じることもある。来年度の小中一貫校開校を契機に、更に踏み込んで協働を進めたい。

また、こども園との連携について記述できなかったが、3校園の合同研修会や懇親会を開催し、運動会や生活発表会へは小中学校長も出席している。3校園が協働する伊里学園の一貫教育を進めていきたい。



# 地域と連携した体験学習の取り組み

—自己肯定感を高めるために—

里庄町立里庄中学校 校長 田原直樹

## 1 はじめに

里庄町は、岡山県南西部に位置し、笠岡市の東に隣接している。国道2号線が町を二分するように東西に走り、2号線沿いには精密機械や食品など多くの会社が軒を連ねている。

また、現代物理学の父と呼ばれる故仁科芳雄博士の生誕の地であり、仁科芳雄賞やノーベル賞受賞者等による科学講演会など、将来を担う子どもたちを称揚する様々な行事があり、町を挙げて教育にも大変熱心な土地柄である。

このように環境に恵まれた里庄中学校であるが、近年は核家族化や少子化が進み異年齢世代との交流が希薄になったり、小学校から固定化された人間関係での活動が多かったりと、他の人から褒められたり認められたりすることが少なく、自己肯定感が低くなっていると感じられる。その結果、些細な言動で他人を傷つけてしまうことも多く、トラブルの増加を助長していると考えられる。

そこで、地域や行政機関の方々の協力を得ながら体験学習を充実させることで、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、他とかかわり合う体験を増やしていきたいと考えた。そして、生徒たちに、「感動すること」「感謝され、認められること」を実感させることで、自己肯定感を高めていきたいと考えた。

## 2 活動を始めるにあたって

里庄町では、平成21年度から遊休農地解消対策として「耕作放棄地解消プロジェクト」チームが「まこもたけ」の栽培実証実験を開始し、平成23年度からマコモ同好会をはじめ地元有志による本格的な栽培が始まった。またそれにともなって、里庄町では、町を挙げてまこもたけの特産品化を進めてきた。

そんな折、里庄中学校とマコモ同好会がコラボして、町おこしができないだろうかという話が持ち上がった。中学校では、技術家庭科の「栽培」単元の必修化にともなって、教育課程の編成等で試行錯誤していた時期だったため、技術家庭科の授業の一環として取り

組むこととした。

近年、教育改革国民会議等の報告においても、「少子化・核家族時代における自我形成、社会性の育成のために、体験活動を通じた教育が必要である」と体験活動の重要性がクローズアップされている。こうした中、マコモ同好会等の高齢者の方々や地域の方々との交流を通じた体験活動を行うことは、非常に重要だと考えた。そして、作物の栽培という体験をすることで、収穫の喜びや感謝の気持ちを実感するとともに、自分たちも町おこしに参加している、町の人々のために役立っているという成就感や自尊感情を得ることができると考えた。

そこで、里庄町教育委員会・農林建設課・企画商工課の支援をいただくとともに、マコモ同好会の全面協力のもと、平成25年度から中学2年生による、まこもたけの栽培体験が始まった。

## 3 各機関の役割分担の決定

栽培体験を始めるにあたって、マコモ同好会の代表者の方々との準備会を開催した。

準備会の中では、様々な問題点も出てきた。

- ・100人程度の生徒が参加するためには、どれくらいの作付面積が必要か。
- ・サポートに必要な人数はどれくらいか。
- ・生徒の活動時間を何時間にするか。

等、当然考えられる問題だけではなかった。

例えば、

- ・圃場（まこもたけを植える田んぼ）は、湿地帯となっており、まむし等が出没するなどの危険性があり、安全確保が必要である。
  - ・圃場周辺は、水道等の施設がなく、作業後に手足を洗うのが難しい。
  - ・里庄町の町おこしに中学生として参加しているという実感をもたせるためにはどうしたらよいか。
- 等の課題も出てきた。

そこで、教育委員会を中心に関係各機関と連携することで、こうした課題を克服していきたいと考え、マ

コモ同好会・教育委員会・農林建設課・企画商工課・学校との合同会議を開催した。そこで、各機関で協力できることを考え提案してもらった。

- 教育委員会 … 関係機関との連絡調整
- 農林建設課 … 作業後の手足の洗浄等のため、災害用給水設備の提供
- 企画商工課 … 「里庄まこもたけひろめ隊」結成と中学校栽培体験とタイアップしたPR活動
- マコモ同好会 … 圃場の整備・維持、まむし等の駆除と安全対策、苗、作業道具等の準備。

以上のように役割を分担するとともに、適宜連絡等を取り合って進めていくことを確認した。

#### 4 具体的な取り組み（H27年度）

- 4月下旬 各機関合同会議開催
  - ・各機関の担当者・マコモ同好会の代表者・学校の担当者が一堂に会して、栽培体験の日程・段取り等の確認を行う。
- 5月11日 オリエンテーション
  - ・3クラス合同で、グループ分けや1年間の日程説明を行う。
- 5月18日 マコモ同好会の人を迎えてのオリエンテーション
  - ・まこもたけの説明や栽培・商品化等の経緯の説明を受けるとともに、田植え等の作業工程の説明をしてもらう。
  - ・田植えの準備物の確認も行う。

##### 〈生徒感想〉

- ・親切に丁寧に教えてくださったので、まこもたけのことがよく分かった。
- ・まこもたけを里庄の特産品にしようとする意欲が、よく伝わってきた。

- 5月中旬 しろかき
  - ・マコモ同好会のメンバーで行う。
- 5月29日 株分け体験
  - ・放課後、マコモ同好会のメンバーと生徒有志で行う。株分けには、ナタや大型のクワ等を使うため、マコモ同好会の方々が、丁寧に使い方の

説明をしてくださる一方、安全に配慮した作業をしてくださった。

#### ○6月1日 田植え体験

- ・学年を2つのグループに分け、作業時間1時間（往復時間・片づけ等を含めて2時間）を目どに行う。圃場全体への田植えはできなかったため、残りはマコモ同好会のメンバーにお願いすることになった。



##### 〈生徒感想〉

- ・非常に暑い中での田植えとなったが、マコモ同好会の人に教えてもらったように植えていった。初めて、田んぼに入ったが足をとられてなかなか動けなかった。
- ・足場がすごく悪くて焦った。株もけっこう重かった。とてもしんどかったけれど、大きな実をつけてくれればいいと思った。
- ・皆で協力して植えることができて、けっこう楽しかった。

#### ○7月13日 草取り体験Ⅰ

- ・学年を2つのグループに分け、作業時間1時間（往復時間・片づけ等を含めて2時間）を目どに行う。

#### ○8月20日 草取り体験Ⅱ 登校日

- ・全クラス、一斉に1時間程度の草取り作業を行った。非常に暑い時期のため、早朝7時45分頃から行った。活動のPRのため、企画商工課がまこもたけひろめ隊の隊員である、吉本興業の岡山県“住みます芸人”の江西あきよしさんとの草取り作業を企画してくださり、地元新聞やケーブルテレビの取材も入って、活気あふれる草取り作業となった。





〈生徒感想〉

- ・7月の時と違って、まこもたけが2メートル近くに成長していた。その間を、かき分けながら草取りをした。中腰になるのがつらかったけれどがんばった。
- ・今年の夏は、雨が少なく例年より草が少ないとのことだが、私たちが草取りをする以外にも、何度も草取りをしてくださっていたことを聞いてありがたいと思った。
- ・草取りを終えて、マコモ同好会や役場の人たちから、「暑いのにご苦労さん」「ありがとう」と声をかけていただいたのが、とてもうれしかった。

○8月末～9月初旬 病害虫の駆除

- ・マコモ同好会のメンバーにお願いする。

○9月28日 収穫・出荷作業の説明

- ・各クラスの技術の時間に行う。

○10月5日 収穫体験

- ・全クラス一斉に圃場に入り、収穫作業を行った。2メートル近くに成長したまこもたけを収穫していくことは、生徒たちにとって大きな喜びとなった。



〈生徒感想〉

- ・ぬかるんだ圃場で、マコモ同好会の人に助けってもらいながら、刈ったり運んだりした。とても大変だったけれど、自分たちが育てたと思うと、とてもうれしかった。

○10月14日 出荷作業体験

- ・まこもたけ直売所西側で、皮をむいたり形を整えたりする出荷作業を行った。



〈生徒感想〉

- ・収穫したまこもたけの皮をむいで、実を取り出して同じ大きさにそろえていった。そして、計量・袋詰めをしていった。自分たちが育てた物が販売されうれしかった。
- ・このまこもたけは、中華料理では高級食材として使われるそうである。私たちも、給食で食べたけどシャキシャキしておいしかった。たくさんの人が、里庄のまこもたけを食べようになって欲しいと思った。
- ・里庄町のまこもたけが有名になって、町の活性化につながればいいなと思った。

○10月下旬 プレゼン製作

- ・一日学校公開日に行うクラス発表に向けて、栽培体験をまとめ、発表用プレゼンを製作した。

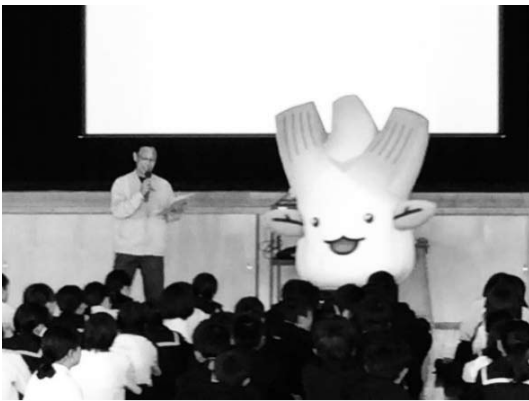
○11月7日 発表会

- ・技術の授業を利用して、各クラスで発表会を開催した。この発表会には、お世話になったマコモ同好会の方々や保護者・地域の方々等、多くの方々にご参加いただき、中学生の栽培体験の様子を知っていただく良い機会となった。

今回の栽培体験は、授業時間14時間を当てる大イベントとなった。生徒たちは、暑い中での作業が中心となったが、おじいちゃんおばあちゃん年代となるマコモ同好会のメンバーに丁寧に指導していただいたり、励ましの声かけをしていただいたりして、教室内とは違った生き生きとした笑顔での活動となった。

## 5 さらになる取り組みに

この栽培体験は、技術科の授業の一環として取り組んできた。その過程で、町おこしとして行われているまこもたけの特産化に他の教科も関わることができないかと考えるようになってきた。そんな中、生徒の中からキャラクターを作ってはという意見が出てきた。そこで、美術科で「キャラクターをデザインしよう」と呼びかけた。そうして、生まれたのが「まこりん」である。「まこりん」は、まこもたけの妖精として生まれ、里庄町の木「椿」の葉っぱを食べ過ぎて、手と足が椿の葉っぱと花になったという設定である。このような取り組みを知った里庄町のご支援で、28年5月に実施したマコモ同好会の方による説明会では、でき上がったばかりの「まこりん」の着ぐるみが登場し、大いに盛り上がった。今後は、町のイベント等にも「まこりん」が登場し、まこもたけをアピールする予定である。

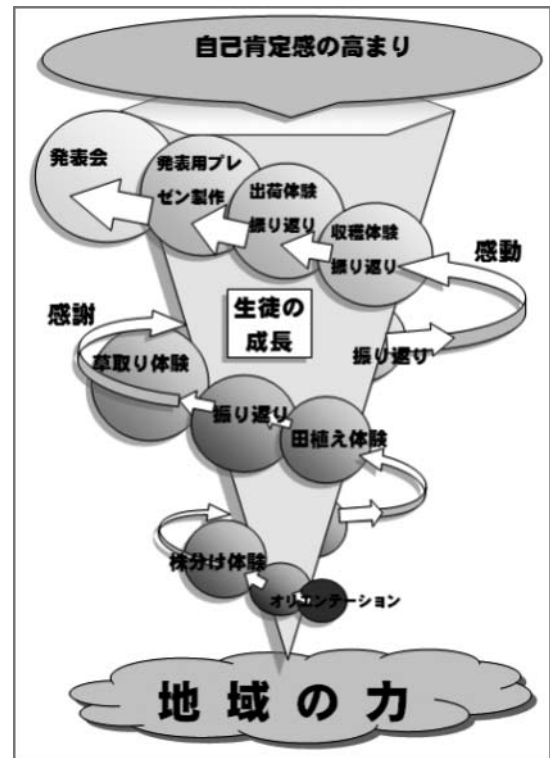


また、今まで何度かは給食の食材として登場してきたまこもたけであるが、家庭科の授業でも、まこもたけを使った料理を作ってみようという話が持ち上がった。そこで、生徒たちがアイデアを出し合い、誰にでも喜んで食べてもらえる料理を考案し、レシピ作り挑戦した。平成28年度は、一日学校公開の日に、まこも料理を家庭科の授業として作り、マコモ同好会の方々や地域の方々に振る舞う予定である。

## 6 まとめ

今回の体験活動では、振り返りの活動を特に大切にしました。生徒たちは、振り返りカードに活動内容を記入するとともに、マコモ同好会や支援して下さる地域の方々との交流から感じたこと等も、記入するようにした。生徒たちは、体験が進むにつれてまこもたけが成長する喜びを感じるとともに、支援して下さる

方々の優しさ・温かさを実感することができた。



まこもたけ栽培体験は、新聞やテレビなどのマスコミで紹介されたり、町の広報誌等にも大きく紹介されたりしたため、町民の多くの人が知るところとなっている。そのため、生徒は、近所の方々から「がんばっているね」「暑い中、ご苦労さんだね」と声をかけられることが多くなっている。また、生徒の中には、マコモ同好会の方々との作業を通して、まこもたけの特産品化の一翼を担っているという自覚も生まれてきており、「自分たちは、町のために役に立っている」「地域の方々から期待されている、感謝されている」と感じる者も増えてきている。この活動を通して、作物を収穫したという成就感だけでなく、自分たちは必要とされているという自己肯定感をもつことができるようになってきたと感じる。

しかし、この活動は、マコモ同好会の方々の協力なしにはできないものである。同好会の方々からは、「中学生から元気をもたらしている」「一緒に活動できることがうれしい」と好意的な言葉をいただいているが、負担になっていることに間違いはない。

これからも、こうした支援をして下さるの方々への感謝の気持ちを忘れることなく、里庄に住む中学生として積極的に何か役立つことをしようという気持ちをもった生徒たちを育てていきたいと考える。



# 社会人基礎力の育成を目指し

## —工業高校におけるアクティブラーニング

### 「専門5科プラス生徒会」の取り組みを通して—

岡山県立東岡山工業高等学校 校長 難波 宏 明

#### I はじめに

本校は岡山市の東部に位置し、我が国の高度経済成長に伴う時代の要請により、昭和37年に県立の工業高校として創立された。開校当初は岡山市の東端に位置し、周囲を水田に囲まれたのどかな学校であったが、現在は、住宅に囲まれた岡山市中区に位置する学校になっている。専門5科（機械科・電子機械科・電気科・設備システム科・工業化学科）840名の生徒が、主に岡山市内と岡山県南東部から通学しており「地域の学校、東工(とうこう)」の名の元、工業高校の責任として地域のものづくり教育や理科教育の推進に取り組み、地域発展の礎になる人材の育成に貢献し、地域から愛される学校になっている。

#### II 5年間の継続研究（地域の防犯に貢献）

本校の周辺には街灯が少なく、地域の人から暗くなると「少し不安だな」の声が聞かれることがあった。

この声を聞いて何か地域の防犯に役立つことが出来ないだろうかと考えて、平成25年度にまず電気科の課題研究で防犯灯を設置したのがこの取り組みの始まりであった。平成26年度から「5科連携」「本物のものづくり」「地域貢献」などをキーワードにして学校全体の取り組みにした。また「岡山県学校経営予算プレゼン枠事業」にも採択され、実用的な風車の設置や太陽光パネルの設置、そして地域の特性を生かした備前焼の灯具の活用などにも取り組みを広げた。この年は外部から3名の評価委員（大学教授2名、企業の代表1名）にも参加して頂き、取り組みについての評価や問題点などを具体的に指摘して頂いた。評価委員の方々からの指摘により「本物のものづくり」に求められるレベルの高さを痛感した。また警察署からは感謝状を頂くことになり、地域の防犯に取り組む責任の重さをしみじみと感じさせられた。

平成27年度は、経済産業省資源エネルギー庁主催エネルギー教育モデル校に認定され「エネルギーを中心にした研究」がテーマに加わった。平成29年度までの

指定研究であり、このことから最初に設定していた完成年度を30年度から29年度に変更した。また、エネルギー教育の地域への発信が今まで以上に重要になり、校内の体制だけでなく地域のグループを巻き込んだ活動に発展し、「地域子ども達に工業高校として、ものづくりの楽しさや科学知識を得ることの魅力をいかに発信し、興味をもってもらうか」の観点から学校から地域への発信を増やしていった。

平成28年度は今までで一番長い距離（約250m）と、今までにない住宅の南側を照らす防犯灯の設置になるので、これまでの技術を活用した継続的な設置にはならない。そのため設置方法を再検討する時間が今以上に必要になった。しかし今年検討した事項は平成29年度に設置する西側外壁にも活用することが可能であるので非常に有意義であった。それとこれまでに設置した防犯灯（約250m）のLEDや2箇所を設置している制御装置の修繕やバッテリーの保守が必要になっていて、今後は保守や改良に要する時間やシステムの改善が必要になってくる。



#### 【平成28年度作成の再計画案】

- ①25年度 東外壁約100mに防犯灯の設置
- ②26年度 実用的な風車・太陽光パネルの設置  
東と南外壁約100mに防犯灯の設置
- ③27年度 南外壁約160mに防犯灯の設置
- ④28年度 北外壁約270mに防犯灯の設置
- ⑤29年度 西外壁約200mに防犯灯の設置

### Ⅲ 工業高校としてのアクティブラーニングとは

工業高校では以前から、課題研究の時間を活用して、グループで工業に関する課題を設定し、自ら学びながら専門的な知識と技術の深化、総合化を図ってきた。それにより生徒達が自ら設定した課題解決に向けて、主体的・創造的・協同的に取り組む態度が養われ、多くの成果を残してきた。しかし中教審諮問事項「初等中等教育における教育過程の基準等の在り方について」の趣旨にある、「学ぶことと社会とのつながり」に関する部分では、まだ十分な取り組みにはなっていなかった。

今回の取り組みでは、「社会とのつながり」にポイントを置いた学習を展開するために、重要となる明確な目標の設定をした。そして、取り組みを進めるメンバーも、今までの課題研究で行っていた3年生だけではなく、生徒会執行部をチームに組み入れながら、学校全体での継続的な取り組みにしていった。まさにこのことは地域に根ざした責任ある取り組みを設定することにより、現実に発生する課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆるアクティブラーニング）になった。

### Ⅳ 社会人基礎力の育成

以下に具体的な取り組みの詳細を示す。

#### 1 課題の設定（シンキング）

まず「防犯灯を学校周辺に設置して地域の防犯に協力しよう」の声が上がった。しかし「学校が地域の防犯に協力する」ことは非常にハードルの高い取り組みであることは明白である。そこで取り組みを盛り上げるためのキーワードをいくつか準備して取り組みを進めることにした。「365日の地域貢献活動」「本物のものづくり」「東工スマートスクール構想」「5科連携」などであるが、活動の方向性を示すには、その時々でキーワードは効果的であった。特に、全体の活動を表すキャッチコピーの「防犯ホタルくん」は広く浸透し、生徒会が中心となり「マスコット」の募集や、家庭科の先生も協力しての「ゆるキャラ」制作にも取り組みが広がり、「ホタルくん・ホタコちゃん」は常に広報担当として校内外で大活躍している。

### 設定したメインテーマとキャッチコピー

メインテーマ  
「エコ発電・自然エネルギーを利用した  
地域防犯システムの製作」

キャッチコピー  
「防犯ホタルくん」



マスコット



ゆるキャラ  
「ホタルくん・ホタコちゃん」

### 2 5科の役割分担（チームワーク）

本校には現在5科の専門科が設置されており、それぞれの特性を活かした分担をすることと、能動的に連携して課題に取り組むことが必要であった。

製作や設置は、課題研究での学習活動が中心になるため、以下のような役割分担をして進めた。

#### 5科の特徴を生かした活動にするための役割分担

担当科	活用した技術	製作した物
機械科	機械加工技術 溶接技術	ステンレス・アルミ架台の製作
電子機械科	電子制御技術 情報関連技術	人感センサー 掲示システム
電気科	電気工事技術 電気機器技術	校内配線工事 LED灯の製作
設備システム科	施工技術	壁面等の加工
工業化学科	セラミック技術	LED灯具の製作

次に総合力を効果的に発揮するために、生徒連絡会議を新たに設置して、発生した課題や既存設備の修繕および改善についての情報共有を図り、迅速に対応できるようにした。年間3回の全体会議と必要に応じて個々の打合せを継続しながら活動している。その結果、生徒達は、自分がどの様な役割を担っているのかを実感するようになり、協働的に活動することの意義を理解することになった。

### 3 生徒会の役割（チームワーク）

生徒会執行部は、主に「ホタルくん・ホタコちゃん」を使っての広報や、点灯式の司会進行などを担っている。また「ゆるキャラ」の製作では家庭科の先生と協力して、毎年その完成度は向上している。そして毎年行われる点灯式では、進行係の担当だけではなく、通行される地域の方々へインタビューし、次年度の製作の参考になる意見などを頂いている。



通行する地域の人へのインタビュー

### 4 行程の管理と見える化（アクション）

到達目標の設定の次には、目標達成のための全体の「行程管理」と「進捗率の見える化」を進めた。

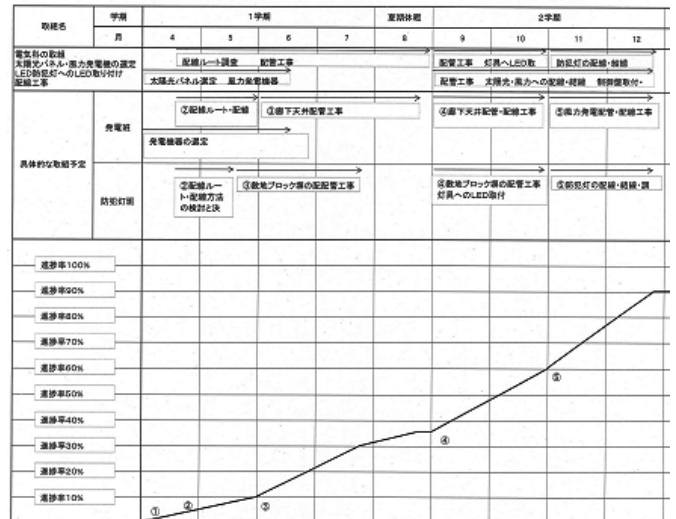
本校が設定した課題の目標は、地域の防犯に貢献することであり非常に大きな責任が伴うことであった。

そのため各担当が主体的に取り組みを進めていくことはもちろん大切であるが、お互いの進行状況を迅速に調整する必要が生じたり、想定外の課題が発生した場合は担当がまず解決方法を模索し解決するが、他への影響を考えてそれを共有する必要があった。そのためにも全員が見ることが出来る作業工程表による行程指示や、それぞれの担当の進捗率をグラフ化して確認する進捗率表の活用も効果的であった。

製作全体の作業工程表の一部

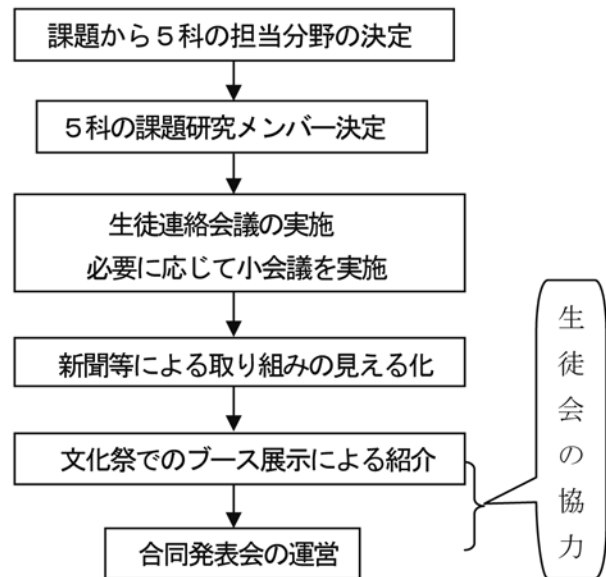
取組名	学期 月	1学期					夏期休暇	2学期				
		4	5	6	7	8		9	10	11	12	
最長のスケジュール		委員会議 (準備期間)		第1回実地見聞				甲斐総合 委員会				
予算管理		第1回委員会(3/25)		7/15付金通				第2回委員会(11/28)		1/5付金通		
学校経営予算フォロー		事業内容変更(3/25)		事業内容変更(8/29)				事業内容変更(11/28)		事業内容		
地域防犯について啓発		アンケート実施		講演会				警察から啓発		東工務 アンケート実施		
環境とエネルギーについて啓発		アンケート実施		講演会				東工務 アンケート実施				
地域の取組 太陽光(ホタル系)・風車等の設計・製作		製作設計作成		材料技術の向上				太陽光パネル設置台座・配		風力発電機製作・組立		
電気系の取組 太陽光パネル・風力発電機の測定 LED取組灯へのLED取り付け 配線工事		配線ルート調査		配管工事				配管工事		灯具へのLED取		
工業化学科の取組 備前換気扇の製作及び設置		備前換気扇の製作		備前換気扇の設置				備前換気扇の設置				
電子回路の取組 人感センサーの製作設置 LED表示の製作設置		表示灯・人感センサーの製作・設置		パソコンソフト調整				人感センサー製作		LED表示器製作・配線・接続		
音楽・ダンス部の取組 校内防犯啓発・配線ソフト工事 上野原防犯水防工事		校内防犯啓発		ソフト調整				穴・ピン調整		ボール調整		
生徒会(全校生徒)		生徒会 委員会 委員会 委員会		オープンスクール 委員会 委員会 委員会				マスコン発表		文化祭で展示		
地域(近所 成人) 中学校区(児童、小学生)		地域防犯訓練 (役員説明)		地域防犯訓練 (役員説明)				地域防犯訓練 (役員説明)		地域防犯訓練 (役員説明)		

進捗率表の一部



取り組みの状況を共有化する方法の一つとしては、「見える化」が効果的である。本校では「新聞の発行」と「校内掲示」に取り組んでいる。

「新聞の発行」は生徒達によって情報収集が行われるため、生徒自ら取り組み全体を把握し、そして調整しながら目標を達成するには効果的な方法であった。また「校内掲示」は取り組みをタイムリーに写真等で見るため、モチベーションの維持を図ることができた。



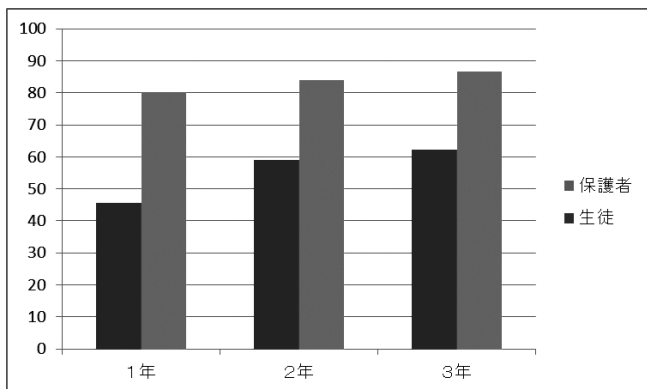
具体的な取り組みのまとめ

### V 継続的な取り組みのメリット

「社会とのつながり」にポイントを置いた学習を展開するためには、継続的な取り組みを進めることが効果的であることが、生徒や保護者対象のアンケート結果からも確認できた。

以下にアンケートの質問と回答の集計を示す。

質問：「防犯ホタルくん」を製作して、地域貢献活動と環境問題に取り組んでいることを知っていますか。



(知っていると答えた割合)

地域の方々に認知して頂き、そして感謝の言葉やアドバイスを頂くことは「現実に発生する課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」を進めるためには効果的である。この様な取り組みを認められH27年度は、岡山県幼小中高PTA連合大会で発表の機会を与えられた。岡山シンフォニーホールを埋めた保護者を中心にした1600名の前での発表は、本校の継続的な取り組みを知って頂くには格好の機会になり、生徒達には社会とのつながりを実感し、そして取り組みへの評価を実感する非常に有意義な発表会になった。

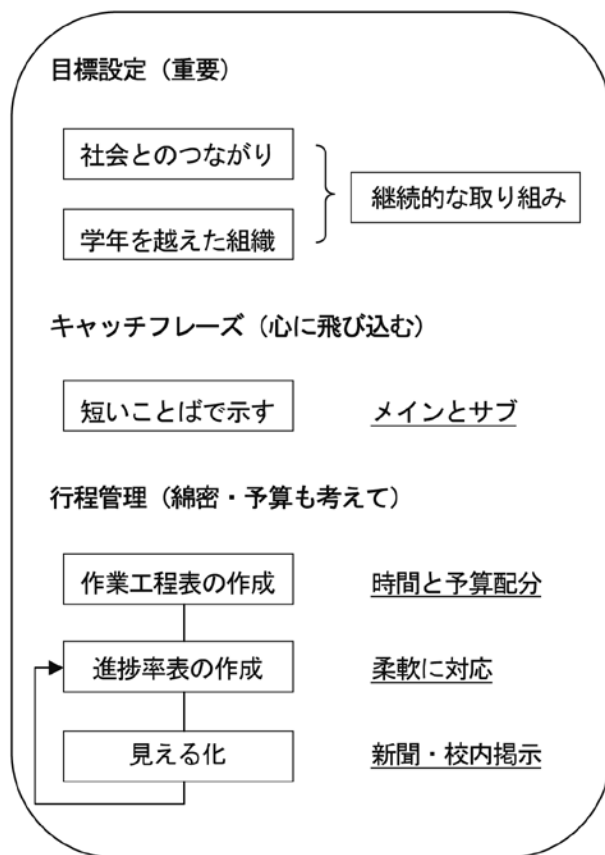


1600名のPTAの前で発表

また、生徒達へのアンケートから、生徒の意識で一番変化したのは「チームによる取り組みの大切さを実感したと思う」であった。2年生のYES回答44%に対して3年生は93%であり、有意義な経験をすることが生徒にはいかに重要であるかがわかる。特に何かの目標に向かって「協同」して取り組むことの意義について、ほとんどの生徒から肯定的な回答が得られた結果から、協働的に学ぶ学習においても非常に有用な取り組みであったと判断できる。

## VI まとめ

ここで工業高校が行う効果的であったアクティブラーニングについて図にまとめる。



## VII おわりに

今回、平成25年から始まった本校の取り組みを工業高校におけるアクティブラーニングを取り入れた授業展開「社会人基礎力の育成を目指し」にまとめた。

以前から工業高校の課題研究ではさまざまな取り組みが柔軟に発想され、学校の実情を考慮して能動的に取り組まれていた実態がある。今回は「社会とのつながり」にポイントを置いた報告であるが、非常に大きな取り組みであるため、視点を変えれば違ったまとめにもなる。このようにさまざまな視点で分析可能な目標を設定することが工業高校における長期的な継続研究には重要である。そのためには地域(工業高校として設定する地域)と人によるつながり、地域と共有する時間の長短、地域との場所の共有などを継続的に進めていることが必要である。理論先行ではなく、実態を肌で感じながら情報の選択をし、具体的な動きにつながる目標を選択できればと考える。目標を設定ではなく選択できるまでになれば理想である。

# 論 文（個人部門）





## 「減災」をキーワードに、 従来の防災学習からの脱皮を図る取組

倉敷市立南中学校 指導教諭 見尾 美恵子

### 1. はじめに

21世紀を生き抜く生徒にとって、リスクマネジメントは必要不可欠な力である。特に「命」に係る防災教育は、学校教育において今日的課題になっている。本校においても、年間3回、火災・地震・津波の避難訓練を行っている。しかしながら、形式的でイレギュラーがないため真剣味が薄い。更に、災害に関して喫緊の課題を抱えている地域ではないため、防災教育への興味・関心は教員・生徒共に低い。「温暖な気候、地震災害の少ない倉敷だからこそ、震災・防災学習が必要」「彼らは将来、県外、国外で活躍する。高い確率で巨大地震が何十年かのうちに起こるのだから、危険予測・回避能力は必要」「減災の考え方（来たる災害時に適切な行動を取ることによってその被害をできるだけ小さくする）も重要」と考え、2年生の校外学習を阪神・淡路震災学習とした。そして、修学旅行では雲仙普賢岳において火山災害学習を盛り込んだ。

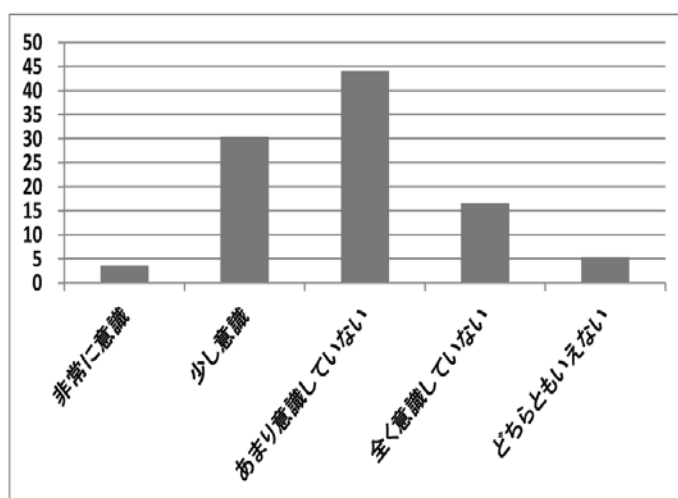
しかし、どちらも生徒たちが生まれる前の出来事だけに、イメージしにくく、自分のこととして取り組ませるのは容易ではない。そこで、記憶に新しい東日本大震災をも取り上げ、想定を越える災害では減災の考え方が大切、マニュアルがあれば安全と考えてしまうのではなく、自然を感じ、情報を集め、自ら判断し、そして行動する力を育む実践的な学習を創造する必要があると考えた。具体的には、文献やDVDからだけでなく、講師を招き講演会を行ったり、体育館で避難所訓練合宿を行ったりするなど、生徒の感性に訴える体験活動を意図的に組み込む。生徒たちは、体験者の語る言葉の重みを受け止め、自分が疑似体験することで心が揺さぶられ変容し、本質を押さえた防災学習ができると考えた。

### 2. 生徒の実態

6月の下旬、防災に係るアンケートを学年の生徒全員（353名）に行った。その結果、「日頃、自然災害に対する防災を非常に意識している」と答えた生徒は

4%、「少し意識している」と答えた生徒は30%であった。自然災害によって被害を受けたり身の危険を感じたりするなどの強い思い入れがないためと考えられる。

#### Q. 日頃、自然災害に対する防災を意識していますか？



また、「あなたが今、心配している自然災害は？」では、地震を選択した生徒が全体の91%、ついで、津波58%、台風（暴風雨）38%、火山災害17%となった。更に「地震が起きた時を想定して、家庭で避難の方法を話し合うことがありますか？」という質問に、「はい」と答えた生徒は35%、今までに話し合った回数の平均は2.6回であった。

東日本大震災は生徒たちが小学校3年生のときで、地震や津波での被害の大きさを覚えている。「地震」「津波」が上位になるのもそのためと納得できる。また、地震91%、津波58%の差33%は、生徒たちが内陸地に住んでいるため、津波を心配していないと考えられる。更に、「家族で話し合っている」が全体の3分の1であることから、保護者の防災意識があまり高くなく、防災に対して切迫感・緊張感を持っていないことが分かる。

### 3. 活動計画

生徒の実態をもとに、まずは「災害に対するイメージ」を持たせる必要があると考えた。次に「危機のイメージ」を、そして、最終的に「行動のイメージ」ができるように計画した。11月に職場体験を予定していることから、10・11月は避けた。

- ①7月 減災学習オリエンテーション
- ②夏休み 総合学習課題「自然災害レポート」
- ③夏休み 地域防災ボランティアリーダー養成研修参加（希望者）
- ④9月中 防災フェア（校内・2年生対象）
- ⑤9月下旬 岡山気象台による講演会
- ⑥1月上旬 日帰り防災キャンプ（希望者）
- ⑦1月21・22日 神戸淡路震災学習の宿泊研修
- ⑧平成28年4月中旬～ 火山災害事前学習
- ⑨平成28年5月16～18日 修学旅行  
雲仙普賢岳にて火山災害学習

### 4. 活動内容

#### ①減災学習オリエンテーション

1年間の大まかな活動とその目的についてオリエンテーションを行った。「減災」という言葉、意味を始めて知った生徒がほとんどだった。

#### ②夏休み 総合学習課題「自然災害レポート」

自然災害のイメージを持たせるために、「自然災害レポート」を夏休みの課題とした。A4 1枚程度で、新聞やインターネット、過去の記事や防災グッズ関係、防災体験などをレポートにまとめるというものである。

レポートの題材は、阪神淡路大震災・東北大震災・広島土砂災害・防犯グッズ・御嶽山噴火等、多岐にわたっていた。また、新聞の記事やコラム、防災の本を読んだり地域の防災学習に参加したりして考え学んだことなどを、自分の言葉でまとめていた。優良レポート（52点）は9月の防災フェアに展示した。

#### ③地域防災ボランティアリーダー養成研修参加

8月5日倉敷工業高校で行われた高校生「地域防災ボランティアリーダー」養成研修に15名が参加した。（高校生主体であるが、中学生も参加可）。高校生のボランティア報告を聞いたり一緒に実技演習やワークショップをすることで、「中学生にもできることがある」「あの高校生のようにになりたい」と思いを強くしたようだった。また、課題レポートを作

成して考えたことや思ったことを作文にまとめ、土砂災害作文コンクールや読売作文コンクールに応募した。更に、研修の活動の様子を写真や文字で模造紙にまとめ、防災フェアで掲示した。



<取り組みが記事に 山陽新聞（H28.9.13付）>

#### ④防災フェア

9月の防災月間にあわせて、防災フェアを行った。空き教室がないため、学年の教室の廊下・階段を利用して掲示・展示した。（写真下）



1か月間の防災フェアでは、級友の優秀作品レポート（52点）を、休み時間や空き時間に読んでいる生徒の姿が常に見受けられた。また、地域ボランティアリーダー研修に仲間が参加した様子や感想のパネル展示は、身近な級友の積極的な姿勢が伝わってきて、生徒たちは大いに刺激されていた。

防災フェアは83%の生徒が関心を持って見ており、特に注目したコーナーは「災害レポート」81%、「ボランティアリーダー研修のパネル展示」37%「防災クイズ」33%であった。

夏休み、自然災害についてレポートを書いたり、防災フェアで他の生徒の多岐にわたるレポートを読んだりすることで、生徒たちは、相次いで自然災害が起こっていることを肌で感じ、災害へのイメージを膨らませることができた。

### ⑤岡山气象台による講演会

局地的な大雨や長野県の土石流など気象庁のアーカイブスを視聴し、豪雨災害や土砂災害の状況と生徒の日頃の生活を重ね合わせて考えることができ、より実践的な減災学習となった。

この講演会で4人に3人が「自分が何をすべきか分かった」と回答し「映像で災害のイメージができた」「自分が、まずすることが分かった」「専門用語の意味が分かった」と約半数の生徒が回答している。更に、保護者にこの講演会の話をした生徒は全体の47%、そのうち「避難はどうするかなどの家族での話し合い」は4分の1の生徒が行っていた。

#### <生徒の感想>

- ・被災したことはなく災害の実感はなかったが、これからは防災情報を聞いたら早めの避難行動を取りたい。
- ・帰って家族で話し合って避難する場所や連絡方法などを決めました。助かる人になる、助けられる人になるよう減災学習に取り組んでいこうと思う。

### ⑥日帰り防災キャンプ

倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会に相談し、アドバイスを受けながら活動内容・日程を決めた。冬休み最終日、生徒54名、保護者1名が参加し、倉敷市災害ボランティアコーディネーター

連絡会メンバー（16名）の手ほどきを受けながら、非常食用炊飯袋での昼食づくり、被災時の対処法やグループワーク「クロスロード」等を行った。

生徒の感想からは、「行動をイメージした」表現が多く読み取れた。

#### <生徒の感想>

- ・災害に遭った人の話ではなく、情報を伝える側の人の話が聞けて良かった。周りの人の情報に流されず的確に行動したいと思う。
- ・直感でどうすれば多くの人が助かるのか自分の考えと行動を確認できた。

**体験しよう、厳冬のキャンプ**  
～日帰り防災キャンプの案内～

1 期日	1月6日(水) 9:00~15:00の予定
2 集合場所	倉敷市立南中学校
3 人数	60名程度
4 費用	昼食代(100円)
5 参加者	①リーダー研修を兼ねているため生徒会執行部・各クラス学級委員 ②倉敷工業高校での夏休み防災研修体験者 ③2学年希望者

注釈：①②は特別な理由の無い限り参加。予定人数を超えた場合は③で調整します。  
希望者は、12月11日(金)までに名担任へ

#### <参加生徒募集ポスター（教室掲示用）>

### ⑦神戸淡路震災学習の宿泊研修

1日目は「人と未来防災センター」「北淡長震災記念公園」を、2日目は「兵庫県広域防災センター」を見学・体験した。本を読んだりテレビを見たりするだけでは分からない当時の雰囲気や心情が、展示物や語り部の方のトーンから伝わり胸に迫ってきた。

また、宿泊場所裏の広場で、早朝集会（午前5時46分・写真下）を行った。真っ暗で無音のビルの谷間、寒さの中、21年前の出来事を一人一人想像し、思いを刻んでいた。



「災害を防ぐことはできないけれど少しでも被害を減らすことはできる。この考えは生きている限り絶対必要になる。災害時にはこの知識を生かし周りにも目が配れるようになりたい。」と、自分から必要な知識・情報を取りに行く強い姿勢が読み取れる感想が多かった。

## 5. 生徒の変容

2月下旬、この1年の活動に関するアンケートを生徒全員に行った。

### ①今までの自然災害学習について

①非常に良かった	77.4%
②良かった	21.4%
③あまりよくない	0.9%
④よくない	0.3%

(①②を選んだ人の理由) (複数選択可)

ア. 専門家の話が聞けた	44.2%
イ. 自分のこととして考えられた	55.2%
ウ. どう行動すればいいか分かった	68.8%
エ. 不安が薄れた	7.4%
オ. 災害に遭う確率が高いから	47.2%

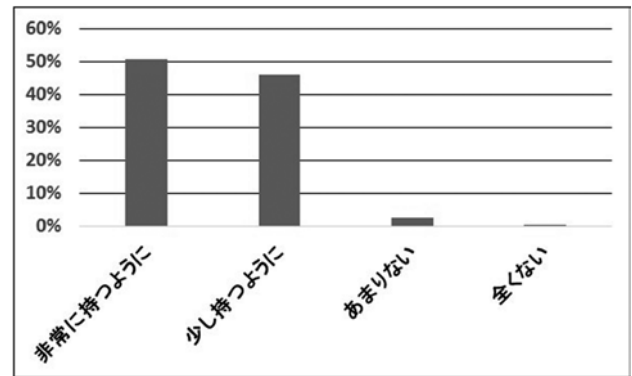
### ②減災学習は必要か?

①絶対必要	83.7%
②必要	14.8%
③あまり必要ではない	0.9%
④全く必要なし	0.3%

<①②を選んだ人の理由>

- ・自分のためになる学習だから
- ・倉敷は安全だけど、安全過ぎると、いざという時的確な行動がとれないから
- ・震災など体験したことがないからイメージできていなかったけど、この学習でイメージできたから
- ・自分の身を自分で守るには絶対に備えが必要だし、災害を最小限に抑えることが大切だから
- ・いつか起きる南海トラフ大地震の時のリーダーになるのは自分たちだから
- ・災害が起きた時に少しでも自分の命や周りの人の命を守れるかもしれないから
- ・災害に遭っていない人たちは甘く見ているから

### ③防災について関心は?



## 6. 成果と課題

○2月のアンケートでは、「防災について関心を非常に持つようになった51%、少しは持つようになった45%」とほとんどの生徒が肯定的な回答をした。これは、4月のアンケートで「非常に意識している4%、少し意識している30%」と比較すると大幅に増加している。この一年間の取り組みが、生徒の実態に即した活動であり、生徒たちが自分の事として取り組んだことを示している。

○「減災学習は絶対必要」と回答した生徒が83%で、自分たちのための学習という意識を強く持つ防災学習ができたことを表している。また、必要と答えた生徒の理由からは、「的確な行動」「準備」「被害を少しでも減らせる」「自分が動けるため」「地域のリーダーとして」等のワードが多かった。このことから、校庭が災害時の避難場所に指定されている生徒たちに「私たちのまちは、私たちが守る」気構えと、地域貢献への基盤が育ちつつあることが分かる。

●4月14日の熊本地震及び余震のため、修学旅行は9月下旬に延期となった。そのため、活動計画の⑧⑨は実施できていない。

## 7. おわりに

7月3日付山陽新聞に「命を守るため減災意識し行動を」の見出しで生徒の投書が掲載された。『まぬがれることのできない自然災害などの被害を少しでも減らし、多くの命を守り、生き抜くためには減災を意識し、行動するしかない。今できることをしていこうと思う。』という内容だった。9月から活動計画⑧⑨を始めるに当たって、生徒から心強い応援をもらった気がした。



# アクティブ・ラーニングの視点からの 数学の授業実践とその考察

岡山県立倉敷天城中学校 教諭 八代 真哉

## 1 主題設定の理由

近年、教育現場では「アクティブ・ラーニング」という言葉が目目され、その視点からの授業改善についての検討が重ねられている。まずはなぜアクティブ・ラーニングが目目されるようになったのか、その経緯と内容の具体について触れることとする。

アクティブ・ラーニングとは、大学教育の見直しから広がったもので、平成24年8月の文部科学省中央教育審議会（中教審）の答申に「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と述べられている<sup>1)</sup>。それを受け、現在では多くの大学でアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が行われ、その意識は大学教育全体に定着しつつあると聞く。

そしてその波が、次期学習指導要領の改訂に向けて審議が進められている小中高の学校教育に反映されるのは、ごく自然な流れであると考えられる。平成28年8月に中教審から示された「次期学習指導要領改訂に向けたこれまでの審議のまとめのポイント」には、「これまでの改訂の中心であった『何を学ぶか』という指導内容の見直しに加えて、『どのように学ぶか』『何ができるようになるか』の視点から学習指導要領を改善」との記述が見られ、「どのように学ぶか」の中にアクティブ・ラーニングという言葉も具体的に示された<sup>2)</sup>。答申資料を基に作成したイメージが図1である。

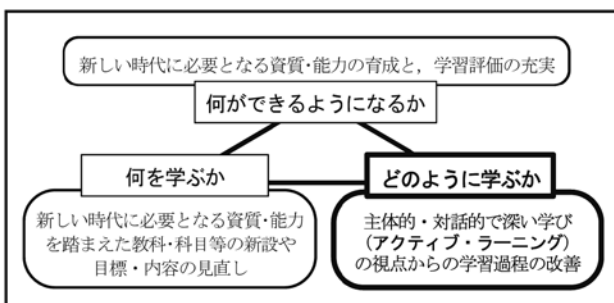


図1 次期学習指導要領改訂の方向性イメージ

アクティブ・ラーニングによる授業改善には、具体的に3つの視点が示されている。それが「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」である。これらを学習過程の中に効果的に取り入れた授業を行うことによって「どのように学ぶか」を充実させ、その結果、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」の実現を目指している。

では、これまで自分が行ってきた数学の授業ではアクティブ・ラーニングは行われていなかったのか。中学校で数学の授業を行うとき、知識や技能を伝達して理解させる学習（アクティブ・ラーニングと対極なものとする）は必要不可欠なものだと考える。しかし、その理解をより効果的なものとするため、様々な工夫を取り入れて日々の授業を創っている。この工夫の部分にアクティブ・ラーニングによる授業改善のヒントがあるのではないかと考えた。

そこで今回は、これまで自分が行ってきた数学の授業の工夫について、アクティブ・ラーニングの3つの視点である「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のそれぞれの視点から振り返り、考察してまとめることとした。

## 2 内容

### (1) 「主体的な学び」の視点からのアプローチ

自ら学びに向かう力を刺激するような課題設定の工夫を取り入れた授業は、生徒の能動的な学習態度を育てるために有効であったと考える。以下にその授業の様子を振り返り考察する。

#### ①問題を身の回りの事象と関連させた課題設定(関数)

[課題] 身の回りにある、ともなって変わる2つの数量(関数)を見つけよう。また、見つけた関数について、いろいろな形で表現して、その特徴を相手に分かりやすく伝えてみよう。

関数の導入の授業として、身の回りの事象から関数関係にあると思われるものを見つけ、4人のグループに分かれて、自分が見つけた関係を言葉、表、式、グラフなどで表現したり、他人が表現した関係の意味をよみとったりして、その特徴を考察することにより、関数関係の意味を理解する授業を行った。

身の回りの事象から関数を見つける課題としたことによって、生徒は実生活と数学の関連について改めて感じることができ、さらに自分が見つけた関係を相手に伝えようと積極的に活動に取り組んでいる様子が数多く見られた。また、この授業で見つけられた事象のいくつかはその後の授業においても例題として取り上げた。生徒たちは、自分たちが見つけた課題を考えることで意欲的に学習に取り組む様子が見られた。

今回は器で米と水の量を測って、米と水の量を調べてみる。  
米:水 = 1:1.2 だった。よって、米の量と水の量は関数である。

米の量(cc)	180	360	540	720	900
水の量(cc)	216	432	648	864	1080

x1.2 関係

生徒のワークシートより

## ②問題の続きを考えさせる課題設定 (連立方程式)

[課題] 家から10km離れた学校まで行くのに、家から途中の公園までは時速4kmで、公園から学校までは時速3kmで歩いたところ、3時間かかった。このとき( )と( )について、連立方程式を用いてそれぞれを求めなさい。  
上の問題の( )の中に言葉を入れて、問題を作って解いてみましょう。

連立方程式の時間と距離と速さの文章題の授業として、途中までの不完全な問題を提示し、問題の続きを自分で考えて解き、2人のペアになって、その解法を確認する授業を行った。

問題の続きを自分で考えることによって、生徒は通常の問題を解くとき以上に場面設定について主体的に考え、自分で作った問題の解法を相手に正しく伝えようと積極的に活動に取り組んでいる様子が数多く見られた。また、時間と距離と速さの関係の把握について苦手意識のあった生徒についても、与えられている条件を整理して考えることによって、与えられていない条件の把握に意欲的に取り組もうとしている様子が見られた。



授業の様子

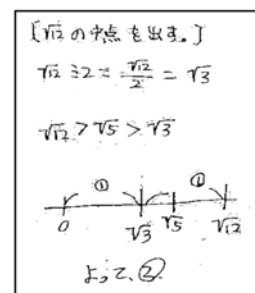
## ③問題を実感的に捉えさせる課題設定 (平方根)

[課題] 数直線上でルート5は、0とルート12のどちらに近い値でしょう。

- ①ルート5は、0に近い方にある。
- ②ルート5は、ルート12に近い方にある。

平方根の学習後に理解を深めるための授業として、既習内容である平方根の大小や近似値、平方根の変形などを用いて上記の課題について考え、4人のグループに分かれて、自分の考え方を説明する授業を行った。

計算や証明する問題でなく、感覚的にも捉えることができる課題としたことによって、自信のない生徒も参加しやすく、ほとんどの生徒が興味をもって取り組むことができていた。また、感覚的に選んだ生徒もその根拠について考えたり、他者の説明を聞いたりすることによって、既習の内容をさらに深めることができていた。



生徒のワークシートより

### (1)の考察

前述の各授業を行った後に、生徒の自己評価としてアンケートを実施した。その項目の中の「課題や今日の学習に意欲的に取り組むことができたか。」について集計した結果が表1である。この結果を見ると、大多数の生徒が課題に意欲的に取り組むことができたことと回答している。また生徒の授業中の様子や授業後の感想などを見ても、自らの課題として意識して取り組んでいる姿が数多く見られ、主体的に取り組んでいる様子が伺えた。

表1 授業後に行った生徒の自己評価アンケートの集計結果

課題や今日の学習に意欲的に取り組むことができたか。	よくできた	5	4	3	2	1
①関数の授業の結果	53%	33%	13%	0%	1%	
②連立方程式の授業の結果	64%	31%	5%	0%	0%	
③平方根の授業の結果	65%	27%	8%	0%	0%	

このような結果から、自ら学びに向かう力を刺激するような課題設定の工夫を取り入れた授業は、生徒の能動的な学習態度を育てるために有効であったと考えられる。前述の①の授業は「問題を身の回りの事象と関連させる」、②の授業は「問題の続きを考えさせる」、③の授業は「問題を感覚的に捉えさせる」という観点

からの課題設定の工夫を考えたが、今後もそれ以外の様々な観点からの工夫についても考え、その成果について検証していきたい。

またその際の留意点として、時間配分のバランスを考える必要があると感じた。課題設定の仕方によっては時間が取られ、その結果、問題演習等の時間が足りなくなってしまうたり、他の単元の時間数に影響が出てしまったりすることも考えられる。授業の中で、単元の中で、または年間の授業計画を立てる中で、これらの時間配分にも十分配慮しながら、バランスを考えて計画を立てて進めるべきである。

## (2) 「対話的な学び」の視点からのアプローチ

他者との対話の場面を取り入れた授業は、数学的表現力を高めたり理解を深めたりするために有効であったと考える。以下にその授業の様子を振り返り考察する。

### ① 4人のグループで協力して課題を解決する活動

共通の課題に対して、それぞれ個人追求をした後、自分の考え方を他の人に説明しながら協力して課題を解決する活動をいくつかの授業で行った。

自分の考え方を相手に説明する場面を設定したことによって、問題解決後も各個人が継続して表現の手直しをするなど、時間いっぱいまで意欲的に取り組む様子が数多く見られた。また、自分とは別の考え方に気付くことによって理解を深めている様子も見られた。



4人で相談している様子

しかし、いざ話し合いの場面になると、次のような様子が見受けられた。

- ・ 数学的表現力が乏しいため、自分の中で解決できていても自分の考え方を相手に上手く伝えることができていない生徒が多い。
- ・ 教える側と教えられる側が固定してしまっているグループがあり、全員が能動的な活動になっていないと言えない。

そこで、「普段の授業から数学的表現力を高める活動を取り入れる」「全員が能動的な活動になるようにする」の観点より次の活動を取り入れた授業を行った。

### ② 2人のペアで相手に自分の解答を説明する活動

普段の授業の問題演習において、2人のペアとなり、相手に自分の解答を説明する活動を取り入れた。

普段の授業から相手に自分の考え方を説明する場面を設定したことによって、継続的に数学的表現力についても意識して高めようとする姿が見られるようになった。さらに、何人かの生徒の解答を教材提示装置で全員に紹介するなどして、相手に伝わりやすい表現の仕方について全体で共有することができた。

また、2人のペアでの活動としたことによって、全員が能動的に活動している様子が見られた。その際に、問題につまずいた生徒も、相手に説明する目標があるため簡単には諦めず逆に説明の過程を表現しようとすることによって正しい解法に気付いていく様子なども伺えた。

しかし、2人のペアにしたことによって、4人のグループの時と比べ、さまざまな考え方に触れる機会が少なくなってしまうデメリットもあった。



2人で説明し合う様子

### (2)の考察

図2は、(1)①の授業のワークシートの生徒の記述の一部である。4人グループで自分が見つけてきた関数を他の生徒に説明する際に、「式やグラフがあった方が分かりやすいのに…」と指摘され、表現を付け加えた様子を示している。この生徒は、数学的表現力を高めることができたと同時に、式と表とグラフを関連付けることによって「比例」の特徴について改めて理解を深めることができていたようである。

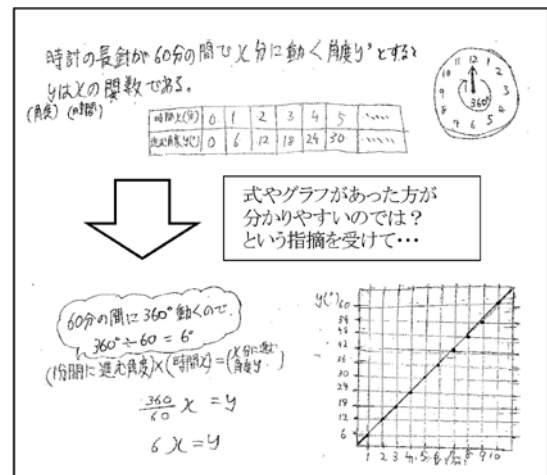


図2 生徒のワークシートより



このような様子から、他者との対話の場面を取り入れた授業は、数学的表現力を高めたり理解を深めたりするために有効であったと考えられる。①のような4人グループでの活動、②のような2人ペアでの活動の2通りの活動を行ったが、前述に示しているとおおり、それぞれについてメリットとデメリットがある。今後は、その授業での目標に応じて、効果的な対話の学びのサイズを選択、設定して行っていきたい。

### (3) 「深い学び」の視点からのアプローチ

課題の数値や条件を変えて考えさせる授業は、既習内容の活用力を定着させるために有効であったと考えられる。以下にその授業の様子を振り返り考察する。

(課題) 次の図のように、マッチ棒を並べて正方形をつくります。正方形を $n$ 個つくるとき、必要なマッチ棒の数は何本となるでしょう？(ただし $n$ は自然数とする。)



(追加課題) 次の図のように、マッチ棒を並べて三角形をつくります。三角形を $n$ 個つくるとき、必要なマッチ棒の数は何本となるでしょう？(ただし $n$ は自然数とする。)



また、同様にして、五角形をつくる時、六角形をつくる時、七角形をつくる時、 $\dots$ の式を考え、 $m$ 角形を $n$ 個つくるときに必要なマッチ棒の数は何本となるか考えてみましょう。

文字式の利用の授業として、上の(課題)に取り組んだ後、課題の数値や条件を変えた(追加課題)を提示し、どのように文字式が変わるかについて考える授業を行った。

課題の数値や条件を変えることによって、最初の課題の解法をヒントにしながら追加課題に取り組む様子が見られた。最初の課題を振り返ることによって問題の構造に改めて気付いたり、数値や条件を変えた課題を考えることによって最初の解法を活用して新たな課題に挑戦しようとしたりする姿が数多く見られた。

### (3)の考察

授業後のアンケートを見てみると、次のような生徒の感想が書かれていた。

- ・規則性の問題は苦手だったけど、いろいろな数に変えて考えることで特徴をつかむことができた。
- ・正方形を三角形や五角形に変えたとき、文字式のど

の部分が変わっていくのか分かったので、何角形になってもできることが分かった。

- ・これからも勉強したことを使って新しい問題に応用していくようにしていきたい。

このような生徒の感想に見られるように、課題の数値や条件を変えて考えさせる授業は、既習内容の活用力を定着させるために有効であったと考えられる。

深い学びとは、数学の学習で得た知識や技能を活用し、問いを見いだして解決することであると考えられる。しかし生徒自らが、どの内容をどの場面でのどのように活用すればよいか気付くようになるためには十分な経験が必要となってくる。上記に挙げた授業などで経験を積み重ねていくことによって、活用に向かう意識をもたせたり、その際の着眼点に気付かせたりすることができるようになるのではないかと考える。

## 3 成果と課題

今回は、これまで自分が行ってきた数学の授業の工夫について、アクティブ・ラーニングの3つの視点である「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のそれぞれの視点から振り返り、考察してまとめを行った。その結果、それぞれの工夫は子どもたちの能動的な学習態度の育成や数学的表現力の向上や既習内容を活用する力の定着に効果があるものであったと改めて感じている。今後もこの3つの視点からの工夫した授業創りを大切にして、数学の学力向上に向けてさらに努力していきたい。

また今後の課題として、評価の充実が必要であると感じている。アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行うことによって、次期学習指導要領に示されるであろう「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」にどのような効果があるのか。次期学習指導要領に関する情報や大学入試制度変更の動向などにも注目しながら、育成すべき資質・能力を育む観点からの学習評価について、今後の研究課題としていきたい。

### ○引用・参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」平成24年8月
- 2) 文部科学省中央教育審議会答申「次期学習指導要領改訂に向けたこれまでの審議のまとめのポイント」平成28年8月



# “学修”する子どもを育てる小学校英語の授業と評価

ーワークシートと指導法の工夫を通してー

倉敷市立連島南小学校 教諭 江尻寛正

## 【はじめに】

2020年度完全実施に向けて新指導要領の骨子が発表されている。その中では、アクティブ・ラーニングという言葉が注目を浴び、文部科学省の論点整理の中ではその視点として「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が挙げられている。

小学校の外国語教育の中では「主体的」「対話的」といったところはこれまでも大切にされてきた。しかし、“楽しい活動を中心に”“英語嫌いをつくらない”という言葉が現場に溢れ、「深い学び」の視点では物足りなかったのではないかと思う。それは子どもの実態調査にも表れている。文部科学省が行った「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」の結果を見ると、「ゲームをすることが楽しい」に対して「あてはまる」と答えた割合は75.1%であり、種々の活動の中では最も高い数値であった。しかし、「英語が使えるようになりたい」に対して「そう思う」と答えた割合はさらに高い82.5%であった。子どもにとって「楽しい」はゴールではないのである。私は、その先にある「英語が使えるようになりたい」という子どもの願いをかなえることが外国語教育においての「深い学び」になると考えている。本論文では、子どもが主体的・対話的に学び、「英語が使えるようになりたい」という願いをかなえるために取り組んできた実践を紹介する。

## 【コミュニケーション能力の素地づくり】

小学校は外国語教育のスタートであり、「コミュニケーション能力の素地」を養うことが目標になっている。私はその具体的な子どもの姿として、「相手意識を持って会話する」「自分のもつ知識を全て使って相手に思いを伝える」と考えた。まずは、その姿が現れる活動を考え、帯活動として繰り返し取り組むようにした。

## ①ペアトーク

- ・朝の会に行う。
- ・曜日ごとにテーマがある。
- ・隣の人とペアで行う。
- ・聞き手と話し手に分かれる。
- ・1分間続けることが目標。
- ・交代で行う。
- ・くじ引きで発表者を決める。
- ・「江尻くん」が選ばれた場合は、江尻くんの話を聞いたペアの人が「江尻くんの昨日の食事は…」という話をする。



このペアトークでは、アイコンタクトや笑顔、うなずきといった反応を大切にするように声をかけている。また、最後の発表は自分のことではなくペアの人の話をさせている。一方的に話すことよりも、相手意識をもって聞き合うことがコミュニケーションだからである。また、ペアトーク開始前に日直がサイコロをふっている。1の目が出た場合は「話し手は日本語禁止」というルールを作っているのである。これは子どもたちに大人気である。1が出た場合は通常以上に盛り上がり、英語を使ったりジェスチャーを使ったりしながら必死に自分の思いを伝えようとする姿が見られる。まさにコミュニケーション能力の素地を育てている実感がある。

反応、相手意識、自分の思いを伝えようとする姿は、外国語教育の中でも大切にされる要素である。朝の会は毎日行っているのだから、週に一回の外国語活動だけで行うよりも教育的効果が高くなる。

## ②Change Game

- ・英語の授業の最初に行う。
- ・ペアになり、先か後かを決める。
- ・一人が顔を伏せ、その間にもう1人に絵を見せる(例：警察官)。
- ・20秒間で相手にその絵が何だったかを、英語やジェ

スチャーで伝える。

- ・「Police」は使わず、別の方法に変えて（Change）伝えるGameである。

子どもたちは、「Car, Black, White, Red」と言ったり、「Speed over, No!」とジェスチャーをしたりして伝えていた。これを交代して行う。

自分の能力をフルに使い、相手に考えを伝えたり、理解できたりする活動を継続することが、外国語を使ったコミュニケーション能力の素地を養うことになると考えている。

### 【ワークシートの工夫】

「自分から取り組むようにしなさい」「よく考えて活動しなさい」と指示を出すことで、主体的になって深く考えるようになるわけではない。大切なのは、主体的になる場や思考できるツールを与えることである。私はワークシートを工夫することでそれを具現化するようにしてきた。

ワークシートは学期ごとに使うものと毎時間使うものの2種類を用意した。

### ①学期ごとに使うワークシート

まず、ルーブリックの視点から児童と目標を共通理解する。ゴールが分からないのに主体的な学修者になることは無理だからである。そこで、外国語活動の目標を児童にも分かる具体的な姿（英語を使って、2分間、会話を続けることができる）として文章化した。また、その上の評価としてS目標を設定し、内容については子どもたちとの話し合いで決めることにした（反応しながらできるだけ英語で授業をする）。

そして、これらの目標が絵に描いた餅にならないように、ワークシートに明示した。また、月に1回程度のふりかえりの中で目盛りに表し、目標に対する自分の進捗状況を可視化できるようにした。

次に、ポートフォリオ評価の視点から子どもが自分の努力を可視化できるようにした。すごろく形式を用いることで、自分が目標に近づいているイメージを持たせることにした。すごろくを進むポイントについては、私がサンパウロ日本人学校勤務時にブラジルでコミュニケーションをはかるうえで大切だと考えたことを授業に当てはめたものである。その進み具合を学期に1度ふりかえることで、自己評価能力を高めることをねらいとした。

**英語マスターへの道** Name \_\_\_\_\_

S 反応をしながらできるだけ英語で授業をする。

A 英語を使って、2分間 会話を続けることができる。

シールまたははんこ

シールまたははんこ

FINISHED

**MY GOAL!**

1学期	2学期	3学期
<input type="checkbox"/>	(5)	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	(6)	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	(7)	<input type="checkbox"/>

**1pointゲットルール**

- (1) 授業中に3回以上手をあげた！
- (2) 質問に答えた！
- (3) ボランティアに協力した！
- (4) 英語だけでトークタイムに参加した！
- (5) 英語だけでゲームに参加した！
- (6) 授業以外でジェニファー先生と英語で話した！
- (7) 授業以外で江成先生と英語で話した！
- (8) TAKE AWAY SHEETをきちんとした！

**【ルーブリック】**

年間の目標（A目標）を児童と共通理解している。  
 (例)「英語を使って、2分間、会話を続けることができる。」  
 (6年生)

また、S目標はクラスごとに話し合い、児童中心で決めている。

目標に近づいているかを月に1回程度ふりかえって目盛りに表し、主体的な学修になるように声をかけている。

4. 「英語マスターへの道」では、(1)～(8)までそれぞれ何ポイント集めましたか？

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
5	7	0	7	0	0	0	4

**【ポートフォリオ評価】**

ワークシートをファイリングしている。

また、英語マスターへの道（図の左側）には、すごろく形式の表とポイント獲得のルールを載せている。そして、学期ごとに、どのポイントを獲得したか自己評価をしている。

それをもとに次の学期の目標を立てさせている。自己評価する力を高めることを狙っている。

②毎時間使うワークシート

思考できる場として、ワークシートにあえて「余白」を設けるようにした。一問一答ではないので、ここに何を書くかは子どもに委ねられる。その過程において思考が不可欠になる。自分が覚えておきたいと思った英語を写す子がいた。英語がもつ抑揚を図で表す子がいた。それらを次の時間に紹介することで、この余白部分を使って思考する子どもが多く現れた。

授業の最後には「今日の英語が使える場面」を考えさせるようにした。ここに書かれたものをその場でスキットにするようにした。具体的な使用場面を見ることで、「自分が英語を使っている」というイメージを全員がもつことができた。また、即興であるので「言いたいけど言えない」という場面が頻出する。この場面こそが前出のChange Gameの学びを生かしてコミュニケーション能力を伸ばしたり、新しい言葉を獲得したりするチャンスになるのである。

ワークシートの右下には、「My dictionary」を設けた。「言いたい言葉」を書けば、英語になって返ってくるのである。言いたい言葉なので、読みたくなる。自分で考えながら読んだり、私に聞きに來たりしながら言葉を獲得していくことができる。また、全員に広げたい言葉はSpecial Wordsとして次の授業開始時に紹介するようにした。使う場面がイメージできるので、意味のある言葉として子どもに紹介することができた。

【指導法の工夫】

素地をつくり、目標や言葉を獲得する方法を与えたうえで、実際にコミュニケーションをはかる場を与えることにした。「言葉を知ってからコミュニケーションをはかる」のではなく、「コミュニケーションをはかるから言葉を知りたくなる」という視点で活動を組むようにした。

①言いたい言葉を引き出す活動と指導法

絵カードを使って、前時までに学んだ英語を復習する活動はよく行われる。その際、絵を見せて「What's this?」と問うのではなく、絵を全く見せずに「What's this?」と問う。すると子どもたちからは「わからない。」「せめてヒントがあったら…」といった声が出る。そこを取り上げ、「『ヒントください。』って英語でどうか分かる?」と聞き、「Hint. Please.」という表現を練習する。具体的な使用場面があるので、ずっと子どもの中に入る。

同じ復習の場面で、絵を一瞬だけ見せることもする。子どもからは、「もう一回!」「ゆっくり!」といった声が出るので、同じように英語表現に直していく。

そして、次の時間の復習の時に、子どもたちが獲得した言葉を使える場をつくるのである。カードを見せなかったり、一瞬だけ見せたり…。子どもが思わず英語を使いたくなる場面を意図的につくることが教師の工夫すべき点であると考えている。

**【余白】**  
 思考しながら授業に参加する態度を養うために、あえて空白のスペースを設けている。ただ「なんでもいから書きなさい」では困る子もいるので、興味がある言葉・覚えておきたい言葉といった視点を与えるようにしている。

**【今日の英語が使える場面は?】**  
 授業で扱う単語や表現は指導者が決めている。このままでは受け身の学習になってしまうので、授業の最後に今日の表現を使える場面を考えて書かせるようにしている。こうすることで、主体的に英語を使う気持ちを育てることにつながると考えている。また、授業中も「どんな場面に使えるか」と考えながら取り組むことになり、学修する姿勢が身につくと考えている。

**【My dictionary】**  
 「こんな言葉を英語で言いたい」と思った時に書くスペースである。私が英語に訳すようにしている。自分の関心がある言葉を獲得できるようにしている。

h li Jj Kk Ll Mm Nn O  
 今日授業で覚えたことや考えたことを書こう  
 今日英語では、ホラ、  
 しかも、ホラ、アハハ初め  
 きんちょうしました。た  
 かんたのでこれから、  
 思いました。  
 今日英語が使える場面は?  
 転入生外務とき  
 Rr Ss Tt Uu Vv Ww Xx Yy Zz  
 My Dictionary

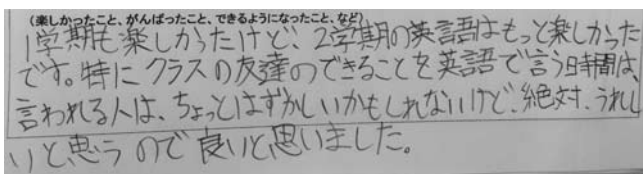
## ②人のために言葉を使う “You can” Time

言葉を獲得したいという気持ちは、相手とコミュニケーションをはかることができたという経験が動機付けになるであろう。しかし、高学年にもなると、内容が浅いと関心が低くなる。

そこで、「相手のために言葉を使う」場として “You can” Timeを設けた。

- ・その日のリーダーを決める。
- ・リーダーが英語で自己紹介をする。
- ・まわりが既習の表現を使って質問する。
- ・リーダーが “できること” をペアで話し合う。
- ・リーダーに英語で “できること” を伝える。

(例：You can play basket!)



子どものふりかえりを見ても、自分の英語で人を喜ばせている実感がわいているのが分かる。この実感こそが、英語教育における “深い学び” だと考えている。

### 【子どもの意識】

6年生に行ったアンケート結果を紹介する。項目は文部科学省の調査に合わせている。全国平均が括弧内であるが、それと比べて高い数値になっているのが分かる。

最後の設問は「英語を使えるようになりたい」という子どもの願いをかなえることができたかどうかの指標にするために独自に設けたものである。「ジェニファー先生 (ALT) と英語でどれくらい話すことができますか」という問いに対して、1分または2分以上と答えた児童の割合が92%であった。

比較対象はないが、この数値はかなり高いと捉えている。つまり、「英語が使えるようになっている」と自覚できている子どもが多いということである。

様々な手立てを取り入れた結果として子どもが “餌を待つ雛鳥になる授業” をするよりも、“子どもの願いにつながる活動を取り入れ、現状を自己評価できる授業” を行う。それを繰り返していくことで、子どもが自分自身で目標に近づいていくのである。教師にとって大切なことは、手綱を引いて子どもを連れていくことではない。子どもが進むべき方向 (目標) を向

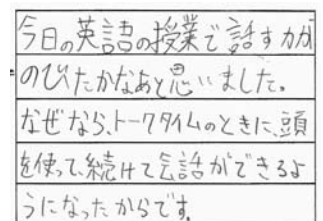
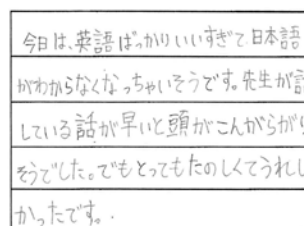
英語の授業は好きですか。	好き 77% (47.8%)	どちらかと言えば好き 18% (27.8%)	どちらとも言えない 0% (16.8%)	どちらかと言えば嫌い 5% (4.5%)	嫌い 0% (3%)
英語の授業の内容をどれくらい理解していると思いますか。	理解している 50% (33%)	どちらかと言えば理解している 26% (29.8%)	半分くらい 21% (30.3%)	どちらかと言えば理解していない 3% (4.8%)	理解していない 0% (2.1%)
英語の授業で楽しいと思うこと	A ゲーム あてはまる 87% (75.1%)	どちらかと言えばあてはまる 8% (18.4%)	どちらかと言えばあてはまらない 0% (3.7%)	あてはまらない 0% (1.5%)	分からない 5% (0.9%)
	B 文字を読む学習をすること あてはまる 66% (26.3%)	どちらかと言えばあてはまる 26% (23.1%)	どちらかと言えばあてはまらない 5% (13.9%)	あてはまらない 3% (7.7%)	分からない 0% (5.9%)
	C 英語を話すこと あてはまる 58% (38.9%)	どちらかと言えばあてはまる 31% (32.2%)	どちらかと言えばあてはまらない 5% (15.2%)	あてはまらない 3% (7.2%)	分からない 3% (3.6%)
英語が使えるようになりたいですか。	そう思う 92% (82.5%)	そう思わない 3% (8.5%)	わからない 5% (8.8%)		
外国人が話しかけてきたらどうしますか。	だまっている 0% (5.3%)	日本語で受け答えする 3% (27.3%)	英語で受け答えする 78% (41.4%)	その場から逃げる 3% (8%)	分からない 16% (17.5%)
ジェニファー先生と英語でどれくらい話すことができますか。	10分 (あいさつ程度) 0%	30分 (少し質問する) 8%	1分 (1〜2つか質問できる) 68%	2分以上 (英語でやりとりする) 24%	

き、現在地を確認しながら (ワークシート)、自分自身で歩いていくことをサポートすることであろう。

英語教育は小学校教育の1コマである。だからこそ、楽しさだけではなく、他につながる学び方も身につけさせるのである。今回の取り組みで言えば、自己評価能力を高めることや、思考しながらワークシートにまとめることである。外国語学習が、“楽習”で終わることなく、その先にある主体的で対話的・深い学びである “学修” につながれば、小学校教育全体が充実していくことになる。と考える。

### 【終わりに】

子どもの感想を紹介する。



これらの言葉に何を感じるであろうか。「英語の時間は先生が楽しい活動をしてくれる」という受け身の姿勢ではなく、「自ら言葉を獲得し、使っていきたい」という子どもの思いが私には感じられる。



# 児童が主体的に学ぶ書写教育の可能性と展望

総社市立総社東小学校 教諭 角 田 早 苗

## I 主題設定の理由

現在、コンピュータの普及により、手書きの文字を書く機会は減ってきている。また、本校の3～6年生で習字を塾等で習っている児童は、24.1%であり、毛筆で字を書く体験は、ほぼ学校の書写の時間に限られるという児童が多い。また、指導者においても、特に毛筆の指導に自信がもてないという職員が増えてきた。

しかし、昨今の美文字ブームもあり、マスコミ等で字を書く体験を扱った番組も多く、成人してから通信教育や塾で学習する等、生涯学習の一環として、美しい文字を書きたいと考えている人は増えてきている。

学校教育としての書写の学習では、手本を中心に「正しく整った文字をどう書かせるか」という技術的な指導に意識が向けられがちである。しかし、新しい時代に必要となる資質・能力の育成のために、学習者が「どう学ぶのか」という主体的な学びを支援するという視点が重要ではないかと考えるようになった。

そこで、書写の学習をアクティブ・ラーニングや特別支援教育等の今日的課題にも十分対応できるようなものとするよう、教材開発を行ったり指導方法を工夫したりして、児童が主体的に学ぶ、魅力あるものにしたと考えた。

## II 研究の構想

児童が主体的に学ぶ書写の学習にするために、授業改善の視点をもとに3つの指導の重点を考え、授業実践を通してその有効性を探ることにした(図1)。

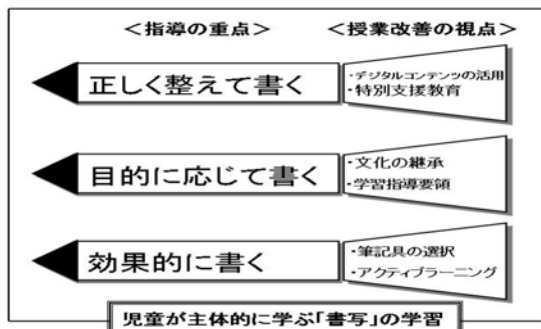


図1 研究の構想図

### 1 正しく整えて書く

#### (1) デジタルコンテンツの活用の視点

ねらいを焦点化したデジタルコンテンツを作成し、活用することで、必要な時に何度でも再生できる利点を生かして、児童に技能を習得させる。

#### (2) 特別支援教育の視点

毛筆の学習を硬筆の学習に生かし、毛筆で大きく大きく書くことで、硬筆でも正しい筆順や点画の組み合わせや、適切な筆圧で書く技能を習得させる。

### 2 目的に応じて書く

#### (1) 文化継承の視点

グローバル化の中で、日本の伝統的な文字文化やこれからの社会に役立つ様々な文字文化に親しみ、進んで日常生活に生かそうとする態度を育成する。

#### (2) 学習指導要領の視点

小学校でも書く速さに関する学習内容が設定された。その主旨を生かして、速く書く技能や、速く書くべき場面か、ゆっくり丁寧に書くべき場面かを、児童自身が判断して書く能力を育成する。

### 3 効果的に書く

#### (1) 筆記具の選択の視点

表現しようとする内容に合わせて、筆記具を選択し、その特徴を生かして効果的に書く能力を育成する。

#### (2) アクティブ・ラーニングの視点

児童が自分のめあてをもって主体的に学び、友だちと協働して対話的に学び、習得・活用・探究の見通しの中で、深く学ぶ態度を育成する。

## III 授業実践

### 1 正しく整えて書く

#### (1) デジタルコンテンツの活用の視点

##### ① 教材・教具の工夫

自作のデジタルコンテンツは、本時の教材に似た字に活用できそうな、3つ程度のポイントにねらいを焦点化した。そして、本時の範書のコンテンツと本時のねらいを外した悪い例のコンテンツを作成した。その

理由は、導入で一度範書しただけでは、ねらいとする技能が身に付きにくいので、児童が必要な時に何度でも見られるようにしたいと考えたからである（写真1）。また、本時のねらいを外すと、違和感のある字になることに児童が気づき、文字感覚を養うことができるようにしたいと考えたからである。



写真1 自作のデジタルコンテンツ

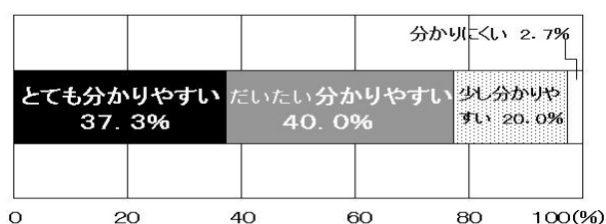


図2 デジタルコンテンツの感想

そして、学習者である児童の意見を聞き、デジタルコンテンツを改良することにした（図2）。自作のコンテンツについて、分かりやすいと解答した児童は97.3%で、その理由は、「先生のかげにならずに見えるので分かりやすい」「何回でも見られるので分かりやすい」「うまくかけるポイントが分かりやすい」「失敗した字の例もあるので分かりやすい」というものであった。分かりにくいと答えた児童は、「暗い」「実際に書いた方が分かりやすい」というものであった。画面が暗いのは、プロジェクターに投影したのが一因であると考えた。そこで、デジタルテレビに投影すると、見やすくなり改善された。また、実際に書いて見せることで感じられる臨場感も大事であると考え、従来の水書板による範書も併用して指導することにした。

## ② 児童の学びの実際

まず、本時のねらいを捉えた範書のコンテンツを見せて、ねらいを確認した。その後、ねらいを外した悪い例のコンテンツを見せると、どこがよくないから違和感のある字になるのかを、児童は即座に言い当てることのできた。このことから、児童に文字感覚が育ち、このように書かなければならない必然性を感じることができたと考える。

また、範書のコンテンツは、児童が作品を書く際に

リピート状態にしておいたので、必要に応じて本時のねらいを確認してから、半紙に書くことができた。



写真2 前後の比較

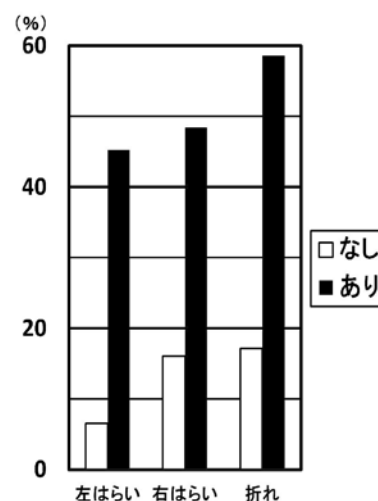


図3 技能が習得できた割合

写真2は、A児が、年間指導計画で配当された時間の学習を終えた時点の作品（上図）と、その後1単位時間、デジタルコンテンツを導入して学習した後の作品（下図）の比較である。上図の左はらいも右はらいも、徐々に力を抜くことができず、不自然な形になっているが、下図はそれができている。

図3は、デジタルコンテンツの有無によって、技能が習得できた人数の割合を比較したものである。コンテンツなしとありを比較すると、約3～7倍の差が見て取れる。技能の習得に果たす、デジタルコンテンツの有効性については、多くの研究がなされているが、年間30時間程度しかない書写の学習でも、有効であると実感することができた。

## (2) 特別支援教育の視点

### ① 教材・教具の工夫

特別支援教育において、指にはめて使用する筆（指筆）と、水で何度でも書くことのできる紙（水書紙）を活用した実践を提案する（写真



写真3 指筆

3)。特別な支援を必要とするB児は、筆順や点画の組み合わせを理解することが苦手である。B児に指筆で文字を書かせることで、腕を大きく動かし、リズムをつけて、筆順や点画の組み合わせを、手続き記憶として記憶させることができるのではないかと考えた。また、大きく太く書くことで、文字のどの部分を書いているのかが分かりやすく、筆順や点画の組み合わせ



を理解しやすいのではないかと考えた。加えて、B児は筆圧も弱い(写真4)。これは、握力や手の力をうまく調節できないからである。B児に指筆を使って、力の入れ方を体感を通して覚えさせることは、筆圧の改善に有効であると考えた。つまり、



写真4 指導前

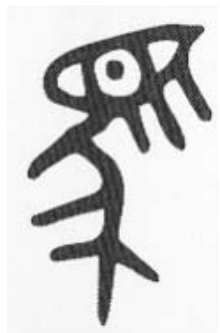


図4 馬の成り立ち

指筆を使った学習が、硬筆を用いて字を書く学習にも、生かされるのではないかと考えたのである。

また、本時の教材を提示する時には、文字の成り立ちを紹介することにした。参考にしたのは、文学博士白川静先生の辞典である。図4の馬の成り立ちでは、横棒3つがたてがみ、そして4本の脚、下方に垂れ下がっているのが、しっぽである。このような指導を加えることで、指筆で書いた漢字の馬が動き出しそうに見え、児童の興味・関心が高まるのではないかと考えたからである。

## ② 児童の学びの実際

B児は、この学習を導入する前、教師が正確に書かせようと丁寧に指導すると、いやがって学習が進まなくなる傾向があった。水で水書紙に指筆で書くという指導方法を導入することで、絵を描く感じで楽しく、漢字を学習することができた。練習を続けることで、やがてB児は、硬筆でも筆順や点画の組み合わせに気を付けて、適切な筆圧で書くことができるようになった(写真5)。



写真5 指導後

## 2 目的に応じて書く

### (1) 文化継承の視点

#### ① 教材・教具の工夫

昨今、手紙や葉書を手書きするという体験が、年々少なくなっている。年賀状の表書きでさえ、パソコンで印字してしまうので、4年生でも、どこに何を書くのか、よく分からない児童が増えてきており、学校で教えない限り分からない。そこで、4学年で学習する葉書の表書きの書き方を、年賀状を書く時期に取り上げ、学校で学習したことをきっかけに、日常生活にも学習したことを生かしてほしいと考えた。

## ② 児童の学びの実際

宛名や差出人の住所、氏名、郵便番号を示した条件で、葉書の表書きが書けた児童は、学習前には17.6%だったが、2単位時間の学習後には、82.4%に増えた。このことから、葉書の表書き等の技能を、日常生活で身に付けることが難しくなっている今、書写の時間で確実に習得させなければならないと考える。

### (2) 学習指導要領の視点

#### ① 教材・教具の工夫

平成20年度に改訂された学習指導要領から、小学校でも書く速さに関する学習内容が設定され、児童自身が、速く書くべき場面か、ゆっくり書くべき場面かを判断して書くことが求められている。しかし、丁寧に書く指導はしてきたが、速く書く技能を十分児童に身に付けさせていないのではないかとという反省をもとに、速く書く技能を習得させる指導に力点を置き、授業実践を行うことにした。主な学習活動は、教材の150字程度の文字を一読した後書き始め、書き終えるまでの時間を計る。書けなかった場合は3分間で書けた所までの字数を数えるというものである。

#### ② 児童の学びの実際

まず、成長するに従って、話された内容から、重要なポイントを聞き取って、書き留めるという作業がより必要となってくることを児童に伝えた。そうすることで、児童は意欲を高め、前回との記録を意識しながら、意欲的に活動に取り組むことができた(図5)。

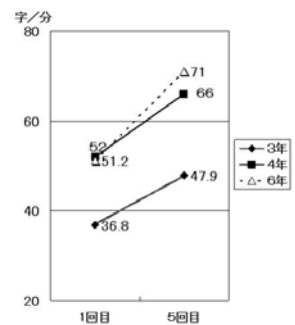


図5 1分間に書ける文字数

## 3 効果的に書く

### (1) 筆記具の選択の視点

#### ① 教材・教具の工夫

行事の節目に、表現しようとする内容に合わせて筆記具を選び、特徴を生かして作品を作った。また、書いた感想を発表させ、全体で共有することにした。

#### ② 児童の学びの実際

・えんぴつよりも書きにくかったが、慣れるとうまく書けるようになった。小筆よりは、筆ペンの方がうまく書けた。次に続く気持ちで書けた。

・筆ペンの筆先がうまく使えた。

・はねやはらいが、えんぴつより書きやすかった。

図6 筆ペンで書いた児童の感想

図6に筆ペンを選んだ児童の感想を示す。このことから児童は、筆記具を比較したり、筆先をうまく使って書いたり、円滑な点画のつながりに気を付けたりして作品を作ることができたと考える。また、円滑な点画のつながりを意識して書くには、墨つぎの回数をなるべく減らした方が望ましいので、墨つぎのない筆ペンを選択したことは、理にかなっていると考えられる。

## (2) アクティブ・ラーニングの視点

### ① 教材・教具の工夫

基本となる文字の習得、よく似た字への活用、そして今までの学習を振り返って、作品作りをする探究という位置付けの中で、深い学びができるようにした。

また、自らめあてをたて、めあてに対しての友だちのアドバイスを参考に、見通しをもって取り組み、これまでの活動を自分の言葉で振り返る主体的な学びができるようにした。

対話的な学びでは、児童が作品を作る過程で、友だちのめあてや字の配置等の工夫や作品に託した思いを知り、コンピュータに取り込んだ友だちの作品の画像を丁寧に見て、感想をもつ活動を導入した(写真6)。



写真6 作品の閲覧

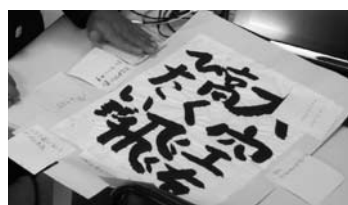


写真7 付箋による交流

そして、友だちの作品のよさやワンポイントアドバイスについて、グループで話し合ったり、付箋に書いてフィードバックしたりする活動を位置付けた(写真7)。このような学習活動を工夫することで、アクティブ・ラーニング型授業スタイルを書写の授業に導入し、授業改善を行うことにした。

### ② 児童の学びの実際



写真8 作品例

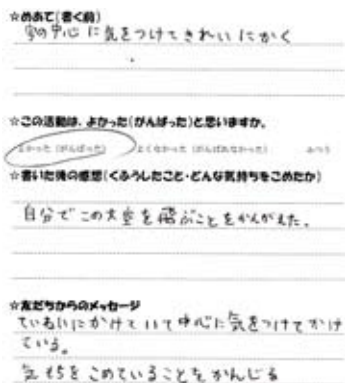


図7 めあてと振り返り

手本がないので、これまでに習得・活用した学びを振り返って自分のめあてをたて、試行錯誤しながら自分なりの工夫をして、作品を創り上げることができた(写真8)。図7は、写真8下の作品のめあてと振り返りである。このことから、自分のめあてが達成できたときや、自分なりの工夫や作品に託した思いが、作品を通して友だちに伝わったとき、児童は有用感を感じ、次の学びへの動機付けができると考えられる。

## IV 成果

図8は、児童が1年間の振り返りカードで、自分にとってよかったと思う教材を選んだものである。選んだ理由については、葉書や手紙等の実用書では、手

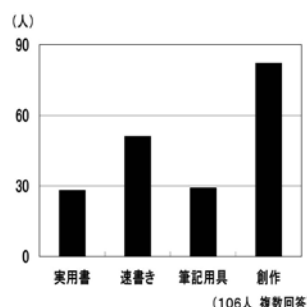


図8 よかったと思う教材

書きのよさについて、速書きでは、日常生活で速くメモできるようになったことについて、筆記用具の選択では、日常生活での筆記用具の使い分けについて、記述されていた。創作を選んだ児童は非常に多く、その理由は、「自分で工夫して、自分で考えて書けた」「友だちの工夫がすばらしかった」「自分の思いが表現できるよう、集中して何回も何回も書いた」というものであった。このことから、主体的に学ぶことで、児童の中に自己教育力が芽生えることが明らかになった。

本研究では、授業実践を通して、基礎となる知識・技能の習得、日常生活での活用、自己決定、協働的な学びが、児童の主体的な学びを育てることが分かった。また、児童が主体的に学ぶには、次の学びにつなげるための、やってよかったという有用感が不可欠であることも分かってきた。そして、探究の場面で、児童がさらなる高みに挑戦することで、主体的な学びを促進し、友だちと協働しながら、自らのめあてを達成することで、高いレベルでの有用感につながることで、児童の姿を通して明らかになった。

書写教育は転換点へ来ており、従来の手本中心の学習のみでは、アクティブ・ラーニング等の教育改革の波に乗り遅れることが危惧される。私は本実践を通して、新しい書写教育の1つの方向性を提案することができたのではないかと考えている。今後とも、児童が主体的に学ぶ書写教育について問い続け、その可能性について模索していきたいと考えている。



# 働くことの喜びを感じ、 進んで働く児童を育てる道徳の学習

倉敷市立倉敷東小学校 教諭 伊住 継行

## 1. はじめに

平成27年7月に「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」が出された。今回の改訂の発端となったのは、いじめ問題への対応である。児童がいじめ等の現実の困難な問題に主体的に対処することができる実効性のある力を育成していく上で、道徳教育の果たす役割が大きく求められている（文部科学省、2015）。今回の改訂では、道徳教育を学校全体でより一層確実に推進していくために、道徳の時間を教育課程上「特別の教科 道徳」として新たに位置付け、目標、内容、教材や評価、指導体制の在り方等、道徳教育の具体的な指導に関する事項の改善がなされたのが特徴である。今、学校全体の教育活動を通して、道徳性を育成していくことが喫緊の課題であり、そのために、各学校の実態を踏まえた道徳教育に関する対応が求められている。

そこで、本論文では、平成26年度担任していた第6学年の児童を対象に行った道徳教育の実践が児童に与えた影響について考察することにする。

## 2. 関連的な道徳の学習について

岡山県小学校教育研究会道徳部会の、道徳の時間を要とした関連的な道徳の学習の考え方を参考に、児童の主体的な学習を生み出すために、次のような五つの支援を設定した授業づくりを行った（岡山県小学校道徳教育研究会、2008）。

支援1…関連的な道徳の学習の入り口で道徳的価値に対する構えに高める

支援2…要となる道徳の時間の前に、子どもの心をたがやし、道徳的価値にかかわる課題意識を高める

支援3…要となる道徳の時間に、自分とのかかわりで道徳的価値をより深くとらえる

支援4…道徳の時間にとらえたことを日々のくらしや体験活動で確かにする

支援5…自分の変容に気づき意欲を高める

## 3. 研究仮説

平成26年度、本校全体で定められた重点項目1-(2) 勤勉・努力、2-(2)思いやり・親切、3-(1)生命尊重、4-(4)勤労・奉仕の中で、特に第6学年では、3-(1)生命尊重、4-(4)勤労・奉仕が学年の重点になっていた。そこで、研究仮説を、次のように設定した。

### 【仮説】

**重点項目を関連的に授業すると、児童の価値理解が深まり、道徳的実践意欲が高まるだろう。**

上記の仮説について、児童の授業での様子や感想、意識調査などを基に考察することにした。

## 4. 重点項目に関する関連的な道徳の授業づくり

年度当初、最高学年として頑張ろうと新鮮な気持ちで取り組んできた始業前のボランティア活動（本校では愛校活動と呼んでいるので以下愛校活動として表記する）であるが、次第に新鮮な気持ちも薄れ、実践意欲も下がり気味になっていた。そこで、道徳の学習を要として、勤労の価値理解を深め、働く意欲を高めていけるよう、9月から始まる関連的な道徳の学習を構想した。

### (1) ねらい

道徳の時間を要として、日々の生活の中で行っている愛校活動や委員会活動など、人のために働いたことについて振り返る「はたらく日記」の取組との関連を図りながら学習を進めることで、集団や社会のために働くことで得られる喜びに気づき、進んで社会奉仕活動などに取り組もうとする態度を養う。

### (2) 関連的な道徳の学習の実践の様子

#### ① 支援1の様子

2学期が始まって、「私たちの道徳」の「三方良し」の話を読み聞かせた。「三方良し」の話は、富山の薬売りが、働くときには、自分、相手、社会が良くなるという話であり、みんなのために働く6年生の姿と重なるため、この話を読み聞かせた。

読み聞かせの後、愛校活動を例に挙げ、「愛校活動

では、挨拶をする相手は気持ち良くなるし、草抜きをして学校は良くなるけど、自分良しになっている？」と質問した。児童たちは、首をかじげたり、じっと考えたりしていた。そこで、「これから、働くことって自分良しになるのか考えていこうね。」と告げてその時間を終えた。

## ② 支援2の様子

「みんなのために働くことで、自分良しになるのかな。」という思いをもって、日々の生活の中でみんなのために働いたことを「はたらく日記」に記録していった。愛校活動、委員会、仲良し班掃除、その他（地域の清掃など）という4種類の活動を意識して、活動を通して思ったことを日々記録していった。カードは音読カードに貼り、帰宅後、その日の活動を振り返り、日記を書いて、翌日提出するようにした。

取組から一週間がたった頃、「一週間を振り返ろう」ということで、その週の自分の取組を振り返り、感想を書いた。「ぼくは何も思わずやっていたから、次週は何かを思ってやろうと思いました。」(A児)というように、これまであまり意識して働いていなかった自分に気付くことができた。また、記録の中には、「朝、5分間マンションでごみひろいをした。」(B児：記録1)などと書かれた日記があった。このことから、学校内から地域へと自主的に働く範囲を広げている児童がいたことが分かった。一方、自分にとって働く意味を感じていない児童も多数見られた。そこで、働くことについて、児童が自分の思いと重ね合わせて考えられるような道徳の授業を設定したいと考えた。

～はたらく日記～

日にち	活動内容				活動を通して、どんな気持ちになりましたか？
	愛校	委員会	そうじ	その他	
9月1日(月)		<input checked="" type="checkbox"/>			何もしないでた。
2日(火)					
3日(水)					朝5分間マンションでごみひろいをした。
4日(木)		<input checked="" type="checkbox"/>			みんなのために働くのは、うれしいです。

〈記録1 地域の清掃活動を行ったB児の記録〉

## ③ 支援3の様子

主人公の「わたし」が駅の掃除をやめてしまおうと思ったときの気持ちを考えた後、「だけど、やめなかったのはなぜ？」と発問することで、みんなのために働き続けた主人公の思いと日々の暮らしでみんなのために働いている自分自身を重ねて考えることができるように仕掛けた。

A児:自分がやめたら今度使う人が困るから。  
 C1:自分が掃除しなくなったら駅が使いにくくなるから。  
 C2:他の人が使うから。  
 C3:朝早くて寒くて大変だけど、おばあちゃんが転ばないようにしよう。  
 C4:他の人も手伝ってくれているから。  
 C5:たくさんの人笑顔や言葉があるから。  
 T:どんな言葉がもらえる？  
 C5:ありがとう。  
 C6:寒いし疲れるけど、みんなが安全に使えるから。  
 C7:最後まで諦めずにやりたい。  
 C8:古川さんの気持ちも背負っているからしっかり頑張りたい。  
 C9:駅員さんや車掌さんにありがとうと言ってもらえる喜び。  
 B児:今までありがとうと言われてきて嬉しいから。

A児は、自分がやめたら今度使う人が困るからと発表した。みんなのために働く理由として、使う人が困らないようにしたいという思いが表れていることが分かった。相手を意識して行動しようとするA児の心の変化が伝わってきた。

上記授業記録のように、みんなが安全に使えるからという社会奉仕、駅を利用する人から「ありがとう」と感謝される喜び、古川さんの思いも引き継いでいるからという使命感・責任感という意見が出された。

しかし、自分自身がみんなのために働くことで感じる達成感や充実感についての意見が出なかったため、さらに、切り返しの発問を続けた。

T:「しなくちゃ」という思いだけで続けられるかな？  
 [ペアトークを促した後、全体発表]  
 B児:「ありがとう」と言ってくれたらうれしいから。  
 C6:人から褒められたり、感謝の言葉を言われたりするとうれしくて、またきれいにしようという気持ちになる。  
 T:じゃあもうちょっと聞くとよ。嬉しい気持ちは分かるんだけど、「ありがとう」とか言われな

いと続けられない?

C7: 地域みんなが使うところをきれいにしようという気持ちがあると続けられる。

T: どこからくるの?きれいにしようという思いは?

B児: 達成感があって自信につながる。

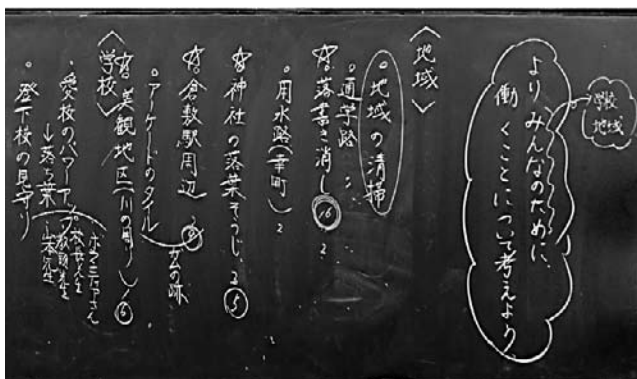
B児は、「はたらく日記」の中で、記録1のように朝5分間、マンションのごみ拾いをしたと書いていた。清掃活動を通して、自分の達成感からそれが自信へとつながっていくことを、B児は感じているのではないかと思った。みんなのために働く理由として、自分自身の達成感が支えとなり、マンションの清掃活動も行うことができているのだろうと思った。このように、道徳の学習で自分と重ね合わせながら勤労の価値について理解を深めていくことができた。

#### ④ 支援4の様子

授業後も「はたらく日記」を継続し、みんなのために働くときの気持ちを記録していった。そうする中で、愛校活動で掃除をしている児童の記録に、「草が抜けてすっきりした。」という感想が見られるようになった。このことから、他の人の感謝の言葉やそこを使う様々な人のためという思いだけではなく、自分にとってもいい気持ちになるという思いが高まっていることが分かった。

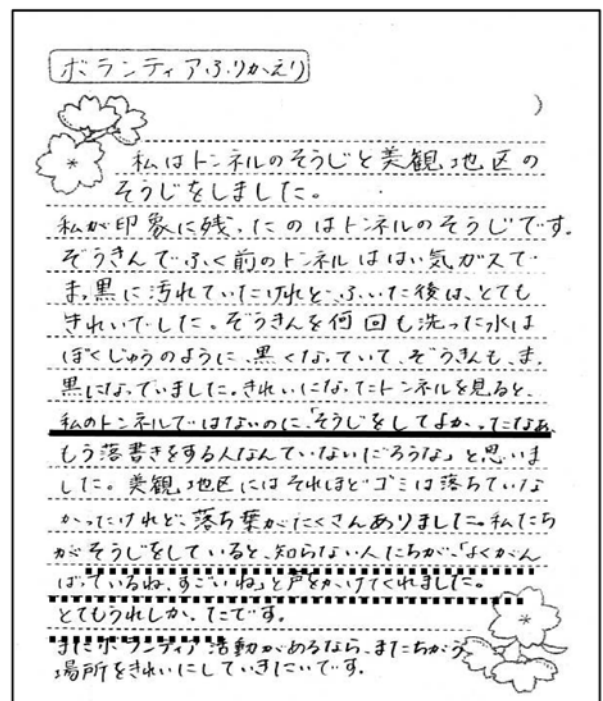
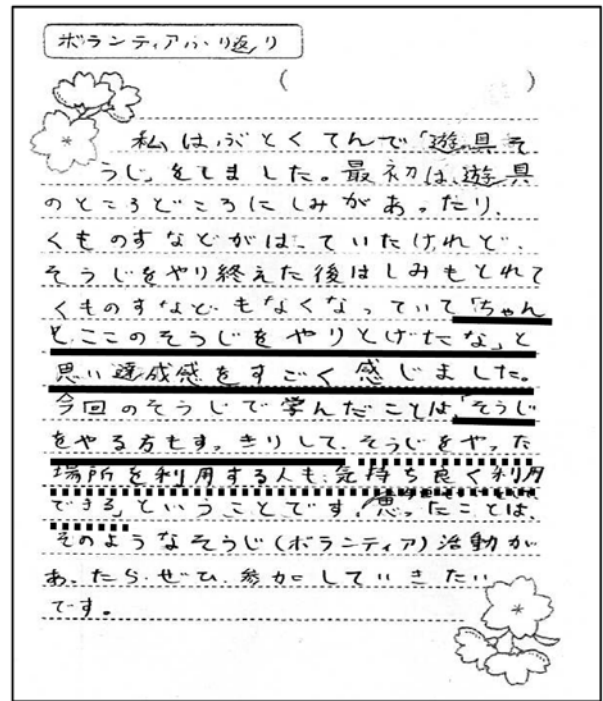
また、授業の最後に地域の清掃活動の話題が出たため、地域にも目を向けるよう、学級活動の時間に地域のために働くことについて話し合った。その結果、地域の清掃活動や落書き消しの活動に取り組むことになった(写真2)。

実際に、清掃活動をすることを通して、みんなが使う公園に、たくさんのごみや落ち葉があることに気づき、どうしてごみを捨てるのかという疑問をもったり、



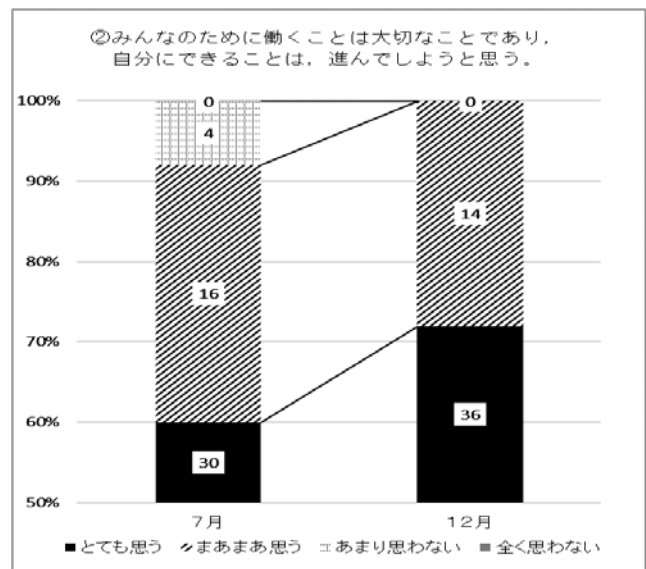
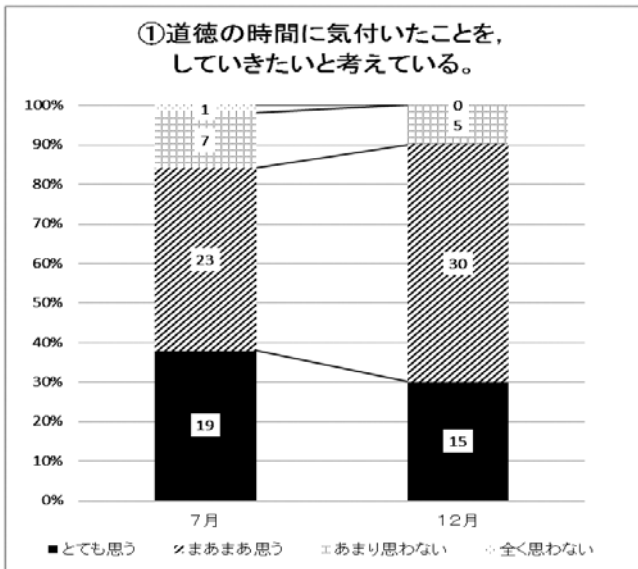
(写真2 学級活動:「地域ボランティア活動をしよう」の板書)

自分たちでその場をきれいにしていくことの達成感を味わったりすることができた。また、学校近くのトンネルの落書きを消す活動に取り組んだ児童は、自分たちの活動によって、トンネル内のものすごい汚れに気づき、さらに、落書きを消すことができ、「自分良し」となる充実感を味わうことができた(記録2)。



(記録2 清掃活動を行った児童の振り返り)

※ 振り返りの中の実線の下線は、自分から働くことで感じる喜び、点線は相手や社会が良くなることで感じる喜びを示していると思われる部分に著者が引いたものである。



### ⑤ 支援5の様子

みんなのために働くことについてこれまでの学習を振り返り、みんなのために働くことについて、自分が変わったな、新しく気付いたなと思うことを書いてまとめた。「はたらく日記」を見直したり、ボランティア活動の振り返りを読み直したりして、児童たちは、みんなのために働くことによって、人、その場所や物、そして、自分の全てがよくなっていくことに気付くことができた（記録3）。

私は、愛校やボランティア活動を通して、自分が少し変わった気がしました。例えば、みんなのために働くことが自分良しで、そして、働いてもらった方も良しということに気付き、「もっとやろう！」という気持ちに変わっていったことです。でも、最初のころは、少し大変だったけど、例えのような気持ちをもちはじめると、進んで活動できました。なので、この気持ちを忘れずにこれからも進んで活動したいと思いました。

〈記録3 日々の暮らし：「はたらく日記を振り返ろう」の感想〉

### 5. 結果と考察

学年の重点項目について、関連的な道徳の授業づくりを行ったことで児童の意識がどのように変化したかを調べるため、7月と12月の2回に分けて、全校でアンケートを行った。回答は、「とても思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で行った。第6学年の児童数は全員で50名であった。

### アンケート項目

- ①道徳の時間に気付いたことを、していきたいと考えている。
- ②みんなのために働くことは大切なことであり、自分にできることは、進んでしようと思う。

グラフを見ると、①からは、道徳的实践意欲が高まったことが分かる。また、②では、12月には、「とても思う」「まあまあ思う」という肯定的回答が100%になっている。重点項目にしたことで、教師も児童も意識が高まり、関連的な道徳の学習で価値理解が深まり、道徳的实践意欲が高まったためであると思われる。

### 6. 終わりに

以上のように、学校や学年で重点項目を決め、道徳の時間を要として他教科や日々の暮らしと関連を図りながら実践をしていくことで、児童の価値理解が深まり、道徳的实践意欲が高まることが分かった。道徳の時間が要として機能するよう、他教科や日々の暮らしと積極的に関連を図りながら、教科化に向けて道徳教育を推進していきたい。

### 〈参考文献〉

- 永田繁雄監修 岡山県小学校道徳教育研究会. (2008). [新学習指導要領の趣旨を生かした] 新しい自分に出会う道徳の学習. 東洋館出版.
- 文部科学省. (2015). 小学校学習指導要領解説道徳編





# 中学2年「電流」問題解決学習

—アクティブ・ラーニングを取り入れた授業作り—

倉敷市立玉島東中学校 教諭 山本 芳幸

## 1 はじめに

本校の学校教育目標は、以下である。

「盛んな向学心，豊かな心情，たくましい心と体をもった生徒を育てる。」

また，指導の重点は次の①～③である。

「①問題解決能力の育成 ②温かい心の育成

③実践力の育成」

上記の①～③を実践するために，本校では次の研究主題に取り組んでいる。

豊かな心を育み，確かな学力を育成するための教育の実践

- ・「岡山型学習指導のスタンダード」の推進
- ・自己を見つめ，よりよい生き方をめざす道徳の時間の研究
- ・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくり

今年度より「アクティブ・ラーニング」を取り入れた授業研修を繰り返している。

文部科学省・教育課程企画特別部会が平成27年8月に示した論点整理では，アクティブ・ラーニングについて，詳しく論議がなされている。その定義は以下の通りである。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学習することによって，認知的，論理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習等が含まれるが，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等も有効なアクティブの方法である。

特に理科に関して，次の記載がある。

科学的に探求する学習（自然の事物・現象の中に問題を見だし，予想や仮説を設定し，それらを基に観察，実験などを計画・実行し，得られた結果を分析して解釈して，相互に話し合う中から科学的な見方や考え方を養うなどの学習）

本年度，理科でも科学的に探求する授業を繰り返してきた。

## 2 めざす生徒像

玉川大学の谷和樹教授の提唱を参考に，アクティブ・ラーニングに関して以下のステップに分類分けした。

- ① 問題を発見する。【発見】 →主体的に課題を発見し，解決に導く力の育成
- ② 問題を追求する。【追及】 →問題を追及する中で創造力や発想力の育成
- ③ 結果を整理する。【整理】 →コミュニケーション能力や事実を整理できる態度の育成
- ④ 異なった結果・考えを認める。【分析・解釈】 →様々な意見を認める態度や科学的思考力の育成
- ⑤ 根拠に基づく結論をする。【推論】 →課題から導かれる結論を見いだせる態度の育成

理科では，これらの流れを授業の中でいくつか組み，生徒に上記のような力を付けられるようにした。本校生徒が上記ステップでアクティブ・ラーニングを行うことで，国際社会に生き抜く力をつけ，自らの人生を切り開くことができるようにしていきたい。

## 3 中学2年 電流「問題解決学習」での実践

本実践を行う前に，以下の器具をマスターする。

電圧計，電流計，テスター，電源装置

このうちテスターは抵抗を測るときに用いる。

それぞれにパフォーマンステストを行い，合格すれば次の装置に進める。

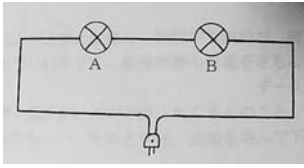
合格した生徒は，他の生徒の判定ができるので，生徒同士で楽しみながらテストができ，かつ器具の使い方を習得することができる。

パフォーマンステストを通して，電気器具の習得ができる他，相手に自分の技能を見てもらうことで，その時に器具をどう扱うか考えたことを表現できる。思考力や表現力の育成にもつながる。

すべての器具をマスターした上で，実践が可能である。次の問題を全体に投げかける。



AとBの2つの電球があります。Aは100W、Bは40Wです。



1つずつスイッチをいれて電流を流すと100Wの電球の方が明るく輝きます。では、左のような

回路にしたら、AとBの電球ではどちらが明るく輝くでしょうか？

- 【予想】 ア Aの電球の方が明るい。  
イ Bの電球の方が明るい。  
ウ AもBも同じ明るさである。  
エ その他（ ）

予想させ、理由を言わせた後、実験をする。Bの電球の方が明るくなる。

答えはイである。イを選択する人はほとんどいないので、驚きの声があがる。

1つずつならAの100Wの方が明るいのに、なぜ直列にするとBの40Wの方が明るくなるのか。それを生徒自ら実験方法を考えさせ、実験させ、レポートにまとめさせる。

実験道具には、以下を用いる。

6.3V 豆電球(40W電球の代わり), 3.8V 豆電球(100W電球の代わり), 乾電池, 乾電池フォルダー, リード線(6本), 電圧計, 電流計, テスター, 電源装置(4V)

3時間まるまるこれらの道具を使って実験を行い、レポートにまとめさせる。

この実践では、導入が大切である。最初の演示実験を失敗するとその後の探究活動も鈍くなる。

ワークシートに掲載している実験についての文を掲載する。生徒に安心して探求していけるよう促している。

☆これから約3時間、自分で実験の方法を考えて、追求していく授業になります。皆さんは、パフォーマンステストに合格し、電圧計、電流計、テスターなどを使いこなせるようになっているはずです。これらの器具は、皆さんが疑問を解決していくときの強力な手助けになるでしょう。積極的に実験をして疑問を解明しましょう。

☆しかし、自分だけの実験や考えでは、なかなか思うように進まないことがあります。そんなとき、ほかの人との情報交換が大切になってきます。自分の実験でわかったことを他の人に伝えたり、他の人から情報をもらったりすることが大切になってきます。

☆ノートが書けたら、どんどん見せて下さい。代表的なものを印刷してみんなに紹介します。先生のプリントは、しばらくお休みです。他のクラスのノートも掲示します。

★疑問に思ったこと、調べてみたいと思ったことを自分で実験の方法を考えて、追究していくのです。探究する途中で、回り道をしてしまうこともあるでしょう。でも、それでいいのです。自分の歩んだ道をきちんとノートに記録して下さい。データが、あとで役立つことがあるでしょう。回り道や寄り道が多い人のほうが、たくさんのことを学ぶことになります。わからなくなったら、先生を呼んで下さい。アドバイスします。

レポートの作成には、例を示している。課題は黄色のカードに書く、考察はピンクのカードに書く、実験の方法と結果はその間に書く、などである。

レポート作成を通して、生徒の科学的な表現力を鍛えている。3時間、生徒だけで実験させ、レポートにまとめる。優秀なレポートはコピーして各班に配布する。

### レポートの書き方



疑問, 予想

実験の方法と結果

考察

配布する資料には、基準がある。

- ・実験結果から正確に考察を導き出しているレポート
- ・こちら(教師)が進めてほしい実験で作成しているレポート



A 豆電球の抵抗を測定



B 直列回路の電圧を測定



C 直列回路の豆電球の明るさの違いを測定



D 結果からのレポートの作成



E 理科室内での実験の様子



F 他人のレポートを参考にしている

1時間目では、すぐにできる実験でレポートを作成する傾向にある。豆電球の抵抗を測る、直列と並列で明るさを見る、などである（下図の2つのレポートより）。

**課題**  
直列と並列とは電球の明るさが異なるのはなぜか？

**予想**  
直列は並列よりも電球の明るさが異なる。

**実験の方法**  
豆電球A(3.0V)と豆電球B(3.0V)を電源装置につなぎ、つなぎ方を図1の直列と図2の並列でそれぞれ調べる。

**直列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を直列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**並列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を並列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**考察**  
電球はつなぎ方によって明るさが異なる。

**レポート例**

**直列と並列のときの豆電球の明るさの違い**

**課題**  
3.0V、3.0Vの電球を2つ繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**予想**  
明るさは同じ。

**実験の方法**  
豆電球A(3.0V)と豆電球B(3.0V)を電源装置につなぎ、つなぎ方を図1の直列と図2の並列でそれぞれ調べる。

**直列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を直列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**並列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を並列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**考察**  
3.0Vの電球の抵抗は3.0Ωと測定した。電球の明るさは同じ。

**レポート例**

**各豆電球の抵抗の測定**

**課題**  
直列と並列とは電球の明るさが異なるのはなぜか？

**予想**  
直列は並列よりも電球の明るさが異なる。

**実験の方法**  
豆電球A(3.0V)と豆電球B(3.0V)を電源装置につなぎ、つなぎ方を図1の直列と図2の並列でそれぞれ調べる。

**直列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を直列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**並列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を並列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**考察**  
電球はつなぎ方によって明るさが異なる。

**レポート例**

**直列と並列のときの各場所での電流の大きさの違い**

**課題**  
直列と並列とは電球の明るさが異なるのはなぜか？

**予想**  
直列は並列よりも電球の明るさが異なる。

**実験の方法**  
豆電球A(3.0V)と豆電球B(3.0V)を電源装置につなぎ、つなぎ方を図1の直列と図2の並列でそれぞれ調べる。

**直列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を直列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**並列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を並列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**考察**  
電球はつなぎ方によって明るさが異なる。

**レポート例**

**直列と並列のときの各場所での電流と電圧の大きさの違い**

3時間目になると、考えられたレポートが作成されるようになる。（上図と左下図のレポートより）

2つのレポートは、豆電球を直列と並列に配線し、各場所の電流と電圧を調べたものである。

電流計をどこにおいても電流の値は変わらないことを見出していた。また、電圧が足し算になることも見出していた。つまり、

教師が教えなくとも、直列回路の  $I = I_1 = I_2$  や  $V = V_1 + V_2$  を発見していた。

問題を解決する過程で、さまざまな原理原則を自分の手で探し当てる作業は、子どもたちにとって夢中になる活動である。

3時間目になると、生徒が自ら実験したい、というようになる。そして、次々とレポートを作成する。印刷が追いつかなくなるほどである。

**課題**  
3.0V、3.0Vの電球を2つ繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**予想**  
明るさは同じ。

**実験の方法**  
豆電球A(3.0V)と豆電球B(3.0V)を電源装置につなぎ、つなぎ方を図1の直列と図2の並列でそれぞれ調べる。

**直列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を直列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**並列の明るさ**  
A(3.0V)とB(3.0V)を並列に繋ぎ、電球の明るさを調べる。

**考察**  
3.0Vの電球の抵抗は3.0Ωと測定した。電球の明るさは同じ。

**レポート例**

**電圧を上げて電流が多く流れるのを調べる実験**

**オームの法則で扱う**

また、上記レポートは、電源装置の電圧を上げ、豆電球に流れる電流の値をグラフにしている。

電圧と電流が比例関係にあることや豆電球の抵抗でグラフの傾きが違うことなどを見出していた。つまり、

教師が教えなくともオームの法則を発見していた。

問題の解決には至っていないが、このような原理を追求したレポートは、後のオームの法則の実験の導入で用いることができる。

3時間を終えてのまとめの授業では、1時間を用いて直列での電圧と電流、並列での電圧と電流を、生徒

の実験結果からまとめる。そして、直列回路、並列回路の各豆電球にかかる電圧と電流を掛け算することで、明るさの違いを理解させる。

そして、それが電力と呼ぶことも教える。このまとめを通して、問題を解決していく過程で知ったことが、実は大切な電力の定義であることを理解することができる。

生徒の感想を紹介する。

- ・レポートをまとめるのが楽しかった。
- ・自分で実験を考えられるので、班の人と色んな実験を考えた。
- ・他の人のレポートを見ながら、どんな実験ができるか考えた。
- ・結果が思った通りになったときはうれしかった。
- ・私のレポートを刷ってくれたのがよかった。

アクティブ・ラーニングのステップで当てはめてみる。

【「問題解決学習」アクティブ・ラーニングのステップ】

①問題を発見する。	100W と 40W の電球を直列につないだところ、40W の方が明るくなる現象が起きる。なぜそうなるか問いかける。
②問題を追求する。	6.3V 豆電球 (40W 電球の代わり), 3.8V 豆電球 (100W 電球の代わり), 乾電池や電源装置, テスターなどを用いて, 自分で実験を考え, 実験を行う。
③結果を整理する。	実験結果から, 考察を考える。レポートを作成する。
④異なる結果・考えを認める。	他のレポートや班の実験結果を参考にする。
⑤根拠に基づく結論をする。	実験レポートを出す。結論からまた新たな課題を見出す。 ①から⑤を繰り返す, 問題の解決にクラス全体で取り組んでいく。

4 考察と今後の課題

本実践は日本理科教育支援センターの小森栄治氏の実践に基づいている。電流の課題への問題解決のために、課題設定→予想→方法→実験→結果→考察→新たな課題設定、を繰り返す。レポート作成を通して、思考を高めていく形式は、アクティブ・ラーニングといえる。

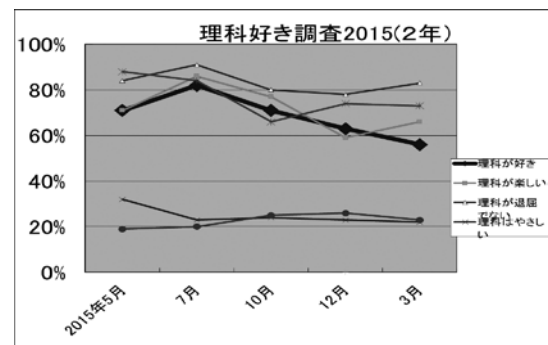
また、お互いのレポートを見合ったり、過去のレポートを見たり、優秀なレポートを参考にしたりも、アクティブ・ラーニングといえる。

今後の課題として、電流への意識調査をとる必要がある。電流へのイメージの変化や、電流を通した考え

方への変化を事前と事後でデータ化し、よりエビデンスのある実践を目指していきたい。

TIMSS (国際数学・理科教育動向調査) に基づく生徒の意識調査を行った。2015年度の中学2年3クラスで実施した結果は以下のとおりである。

2015年度中学2年	5月	7月	10月	12月	3月
理科が好き	71%	82%	71%	63%	56%
理科が楽しい	71%	86%	77%	59%	66%
理科が退屈でない	84%	91%	80%	78%	83%
理科はやさしい	32%	23%	24%	23%	22%
理科は生活に大切	88%	84%	66%	74%	73%
科学を使う仕事をしたい	19%	20%	25%	26%	23%



理科が好きと答える生徒は、中学2年で56% (3月時点) であり、国内平均 (2011年) の56%と同程度である。

中学2年で理科好きが減っている原因として、以下が考えられる。

- ・電流単元でペースの速い授業が続いたこと
- ・電流の定期考査が難しかったこと
- ・探究活動に魅力を見いだせなかったこと

これらを改善できるよう、ゆとりをもって進めたい。

また、科学に関する職業に就きたい、と答える生徒は、前中学1年で28% (3月時点)、前中学2年で23% (3月時点) と低い。国内平均 (2011年) の20%は上回っているが、国際平均は56% (2011年) であり、まだまだ指導する必要がある。

科学に関する職業について語ったり、職業のプリントを配布したり、職業と科学の関連について教える必要がある。

5 おわりに

本実践は、アクティブ・ラーニングには極めて効果的な実践と考える。次期学習指導要領に備えるため、本実践が効果的であることを、さらに証明したい。

本実践に際し、本校の理科担当の職員より多くの協力をいただいた。また、小森栄治氏には多くの指導助言をいただいた。謹んでお礼申し上げます。



## 農業教育における

# アクティブ・ラーニング型授業の取り組み

## 一科目“生物活用”の協同学習を通じてー

岡山県立井原高等学校 教諭 前崎 靖彦

### 1 はじめに

現在、中央教育審議会では次期学習指導要領の議論が進められており、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」を重視し、育成すべき資質・能力、教育目標や学習指導の在り方も一体的に検討されている。その指導方法の在り方として注目されているのが「アクティブ・ラーニング」(以下、AL)である。

では、なぜ次期学習指導要領にALの要素が強調されていくのかを整理しておく。これからの社会は少子高齢化やグローバル化、情報化が加速する中で劇的な変化が予測されている。技術革新等の影響により、子どもたちの65%は将来、今は存在していない職業に就く(キャシー・デビッドソン氏2011)とも予測されている。OECD(経済協力開発機構)は将来、職業に求められるスキルの推移の変化として反復系の手作業は減り非反復系で分析・双方向性を伴うものが増加すると示している。つまり、これからはキャリア選択に関わらず高い志を持って、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、様々な課題を解決するために論理的に考え、他者にわかりやすく表現する力などの汎用的能力を備えている人材が求められるようになってくると示している。<sup>1)</sup>

以上、このような将来の社会的背景を捉えた上で今後の学校教育の変革、授業改善が求められている。本論は、「生物活用」の授業において、講義形式の授業形態に加えてALの要素を取り入れながら生徒の姿・成長について質的研究を進めてきた実践内容である。

### 2 学習活動のねらい

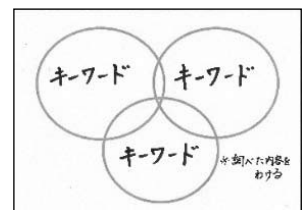
#### (1) 学習活動のプロセス

現在、確かな学力の要素の一つ、「思考力・判断力・表現力等の能力の育成」が重要視されている。そうした中、田村<sup>1)</sup>は、「授業の中に、思考・判断・表現するなど“子ども一人ひとりが能力を発揮する場面”が用意されていないといけない」と述べている。つまり、

学習活動のプロセスが充実してこそ、個々の能力は育成されるものであるとしている。本学習活動の一つ目のねらいは、課題解決に向けた取り組みの中で、自分の思いや願いを表現しながら実現できるように、授業の中にインタラクション(相互作用)とりフレクション(振り返り)を活動場面に応じて取り入れることである。また、知識・技能の習得においても教師が教え込むよりも、子ども自身が思考・判断・表現する学習プロセスの中で身につけた方が効果的であることが明らかになってきており、「生徒がどのように学ぶか」を大事にし、授業展開することにした。

#### (2) 思考ツールを活用した探究的・協同的学習活動

生徒が自らの課題解決に向けて学ぶALを実現するためには、探究的プロセス①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現を意識することがポイント



【図1：思考ツール例】

と示している。<sup>2)</sup> このプロセスの中で、とりわけ難易度の高い整理・分析およびまとめ・表現の過程についての思考ツール(図1)を活用した。本学習活動の二つ目のねらいは、これまで比較的指導しにくかった「整理・分析」場面において、生徒が主体的に取り組み、収集した情報を比較、分類、関連付けできる場を設定することである。また、思考ツールを活用することで、限られた一部の生徒同士の話し合いに終始せず、全ての生徒が授業の目標に向けて、学び合いに参加できるということも視点に入れながら内発的動機付けを行うこととする。そうした活動は、松下<sup>2)</sup>が記す「参加の平等性」と「活動の同時性」という2つの要素を大切に、グループ活動がより効果的なものとなるように、協同の意味と価値の認識を高めていきたいと考えた。

#### (3) 体験的な食育を通じた学習活動

平成22年度に文部科学省から「学校における食育の推進」が掲げられ、以来、子どもの発達段階に応じて

様々な教育活動を通し、食育が進められてきた。本学習活動の三つ目のねらいは、野菜を育て、調理し食するといった一連の体験的学習を展開することである。そのことは、本校の学科総合型（普通科・園芸科・家政科）の授業連携の中で、家庭科目を学ぶ生徒の力を最大限に発揮できる系統性の高い指導に加えて、ALの効果が高まると考えた。指導目標として、食に対する感謝の心を育むこと、栄養面や安全面、食文化に関すること等、学習教材と関連付けすると共に将来の社会生活に結びつく授業展開になるように工夫することにした。

### 3 アクティブ・ラーニング型授業の実践

本授業の学習プロセス・学習形態を以下に示す。

表1 アクティブ・ラーニング型授業の学習プロセス

研究課題	夏野菜のプランタ栽培	
単元目標	夏野菜のプランタ栽培から食育活動を通じた汎用的能力の育成	
育成内容	○野菜栽培の基礎的知識（知識） （要素）○野菜栽培の基本的管理（スキル） ○野菜の栄養価と調理（知識・スキル） ○グループワーク、調べ学習・発表会 （スキル・情意）	
科目	生物活用（2単位）	
学習期間	平成27年 4月～平成28年3月	
対象	家政科 3年生	
学習プロセス	①課題（種別）設定	【グループ】
【形態】	②課題の栽培基礎管理	【個人・グループ】
	③課題の情報収集	【個人】
	④課題の整理・分析	【個人・グループ】
	⑤課題のまとめ・表現	【グループ】
	⑥課題の発表・評価	【全体・グループ】
	⑦課題の調理計画	【グループ】
	⑧課題の調理と試食	【グループ】
	⑨学習の振り返り・評価	【個人・グループ】
	⑩学習のまとめ（年間）	【個人・グループ】

#### ①課題（種別）設定 ②野菜の栽培基礎管理

「トマト」、「ミニトマト」、「ナス」、「ピーマン」、「カボチャ」の5種類の夏野菜の中から各グループが1品目を選択し課題設定とした。生徒は、簡易的に栽培できるプランタに野菜を定植するところから支柱・誘引、追肥、灌水、収穫の一連的な栽培管理について体験的学習を行った。また、日々の灌水管理（当番制）と合わせて観察日記をつけることで野菜の成長に目を向けると同時に、責任感やクラスの連帯感を持たせることを意図とした。



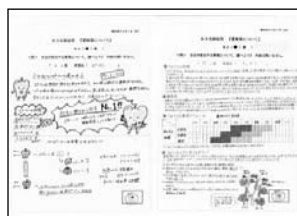
【図2：野菜管理】



【図3：野菜収穫】

#### ③課題の情報収集 ④課題の整理・分析

栽培している野菜について、自らの興味・関心、問題意識の高い情報をまとめる個人レポート（図4）を課し、生徒は原産地、歴史、云われ、栄養素、健康増進、調理法等様々なカテゴリーについて調べ学習を実践した。また、各自行った野菜の調べ学習のレポートの内容を付箋に書き出し、思考ツール（図5）を用いてグループでカテゴリーの分類分けや整理を行いながら、情報共有や学び合いを深めることができた。



【図4：個人レポート】



【図5：思考ツール】

#### ⑤課題のまとめ・表現 ⑥課題の発表・評価

学習活動をさらに深化させるため、グループ内で整理・分析した内容について発表ポスター（図6 模造紙1枚）および発表要旨（A4紙1枚）を制作課題とした。最終的に全体での発表場面（図7）を設定し、各グループが各種野菜についての学びを発表した。まとめた内容は、歴史、産地、栄養、健康、料理法など豆知識の領域も含まれており、興味深い内容であった。ポスターセッションに向けた内容の精選、文字の大きさや色使い、伝達方法といった学習プロセスは生徒の思考力・表現力の育成に繋がったと考える。また、全ての生徒へ発表機会を与え、聴衆者は発表内容について感想・評価を記入できるシートを準備した。記入後は個々の評価シートを切り分け、再度各グループへフィードバックした。客観的評価を見返すことで、生徒は達成感を味わうと同時に、声の大小など伝達場面



【図6：ポスター製作】



【図7：全体発表会】

での課題も明確になり、次時の改善に繋がるものとなった。

### ⑦課題の調理計画 ⑧課題の調理と試食

栽培している5品目の野菜について、グループワークを通じて調理計画を立てた。必ず作るマスト課題と自由な発想で作るジャンプ課題を設定した。マスト課題のテーマは「夏野菜カレー」とし、ジャンプ課題のテーマは「食べたい夏野菜メニュー」とした。カレー調理については、一般的なカレーライス、ドライカレーやカレードリア、カレーうどん、ナンカレーなど様々なアイデアあふれる品ができ、どれも完成度は高かった。また、つけ合わせになった調理品としてのサラダや天ぷら、肉詰めピーマン等、夏野菜をふんだんに使ったメニューが揃った。各グループのメンバーが調理法について情報収集し、想像を膨らまし思考を凝らすことで、多様かつ独創的なメニューの調理ができ、生徒たちの充実感に繋がったと考える。



【図8：調理実習】



【図9：調理品】

### ⑨学習の振り返り・評価 ⑩学習のまとめ（年間）

学習指導要領に示された「生物活用」の目標を授業者および学習者が相互に達成できたかを振り返るための場面を設定した。科目目標は、「園芸作物や社会動物の活用に必要な知識と技術を習得させ、それらの生物の特性を活用した活動や療法の特性を理解させるとともに、生活の質の向上を図る能力と態度を育てる<sup>3)</sup>」ことである。現行の学習指導要領に改訂される際、前述の“生活の質の向上を図る能力と態度を育てる”という文言が付記された。生活の質とは、精神・身体・社会・教育的効用がもたらす心の豊かさや満足度であると示されている。本科目では、年間を通じて野菜の栽培と調理に関すること、花に関するアレンジのこと等体験的な学習を中心に取り組んできた。年間最後の授業では学習のまとめとして、シートや思考ツールを活用しながら生活の質の向上について個人レベルで分析し考えることとした。それぞれの単元について知識とスキルを総合的に評価（図10）し、心と体の満足度について自らの充足度を分類別け（図11）した。さらに、個々の意見を集約し記録するまとめシート（図12）を



【図10：単元振り返りシート】



【図11：心と体の満足度シート】

もとにグループで議論し、意見や感想を全体発表した。このような学びの振り返りやツールによって、生徒一人ひとりが各単元における心の豊かさや満足度を分析・整理することができるのと共に授業者が指導目標の達成を図る基準の尺度となった。



【図12：まとめシート】

## 4 アクティブ・ラーニング型授業実践のまとめ

単元の目標に掲げた汎用的能力の育成について、以下のとおり授業実践前の4月と事後の7月に意識調査を実施した。いずれの質問項目についてもグループ学習を柱にしてきた経緯と場面設定から“できる”以上の数値が上昇した。特に質問項目1（図13）については、緊張感のあまり他者と会話できない実態もアンケートやヒアリング調査から読み取ることができたが、実践前より“できる”以上が26.4%も上がった。人前で自分の意見や考えを表現できる項目2（図14）も“できる”以上が21%上昇した。また、項目3（図15）については、当初グループ間で協力が全くできそうに無いと感じていた生徒も、事後には協力できたと感じたようである。

今回、AL型授業の柱である協同学習を実践する上で、QUアンケート結果やクラス担任との情報交換も指導材料の一つとして捉え、全ての生徒が学び合いに参加できる「参加の平等性」を重視した。また、離脱が予測される生徒のところへは教師はファシリテーター（図16：学びのつなぎ役）としての役割を意識し、話し合いの場を作り、つなげるということを意図的に行った。さらに、協同意識や学習意欲が高まるように、グループ間のアイデアや創造を大切に、成果に対して称賛することを継続的に行ってきた。

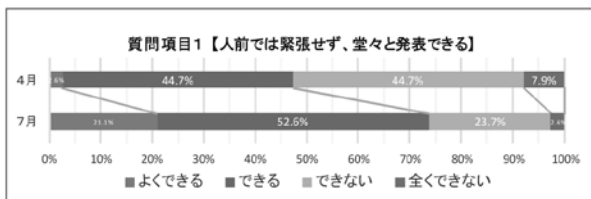


図13：コミュニケーションスキルアンケート結果

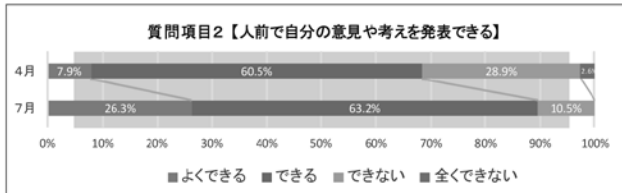


図14：コミュニケーションスキルアンケート結果

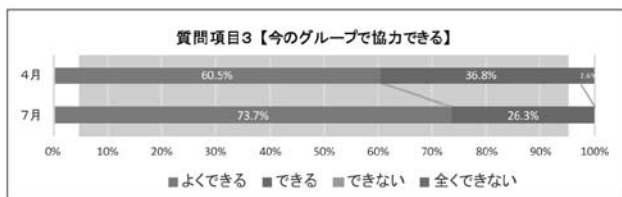


図15：コミュニケーションスキルアンケート結果

**【アクティブ・ラーニング型授業の生徒感想】(抜粋)**

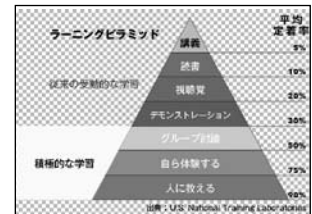
- ポスターを作る中で、自然と役割分担ができていて、誰か一人だけが作るということもなく、それぞれのアイデア・調べたことを生かすことができました。
- 今回の発表はあまり緊張せず、堂々と発表できたと思うので前よりは成長できたのかなあと感じました。
- 同じ野菜を班の中で調べたのに、知らなかったことが多く、興味深く勉強になった。
- 「見やすく」、「わかりやすく」伝えるのは難しくポスター作りはセンスも問われるので苦手だった。でも、班の人達と苦手なことをカバーし合い、いいものが作れてよかった。[H27. 7月実施]

生徒一人ひとりが「どのように学ぶか」ということに視点と力点を置いた授業展開は、アンケート項目および感想の記述から授業者として一応の手応えを感じることができた。中でもポスターセッションに関する感想が多かったが、パソコンによるプレゼンテーションではなく、あえて手書きにしたため難易度の高いものと感じていたが、他者との協力によって課題を克服し達成できたことは、生徒の充足感に繋がったといえる。また、知識の活用という面で、調べた内容を伝える学習形態は、生徒同士が興味・関心を持ち意欲的に学ぼうとする姿勢が見受けられた。記憶の定着率を示すラーニングピラミッド(図17)によると、講義や教

示よりもグループ討議や体験学習、あるいは生徒自身が人に教えた時の方が格段に記憶に残ると示されている。こうしたことから、実践した一連の授業展開は、生徒の学びを定着させることに加えて、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を養うことができるものと考えられる。



【図16：学びのつなぎ】



【図17：ラーニングピラミッド】

**5 おわりに**

3年間にわたる授業実践を振り返ると、1年目は生徒の興味・関心度を高める単元構想や学習教材の確立に重点を置き、2年目は、協同学習を実践しながら授業の教育的効果を高める工夫を行ってきた。そして、3年目はAL型授業の要素を取り入れ、学習プロセスを確立し、実践、振り返り、評価、まとめを行った。その中で感じたことは、ただ単に生徒を活動させることを目的とするのではなく、活動を通じてどのような知識や能力を身につけさせたいのかを明確にし、授業内容や生徒実態に合わせて取り組むことの重要性を自ら学ぶことができた。

将来の社会生活にとって必要とされている汎用的能力について一科目を通し、生徒に身につけさせることができたか否かについては今後も検証、分析していく必要があると感じている。ただ、多くの生徒が植物を育てる楽しみ、食する喜び、感謝する気持ちで取り組んでくれたことで、本科目がねらう心の豊かさを高めようとする能力と行動力を培うことができたと考えられる。

**【参考文献】**

- 1) 田村学(2015)「授業を磨く」東洋館出版社
- 2) 松下佳代(2015)「ディープ・アクティブラーニング」勁草書房
- 3) 教育課程企画特別部会(2015)「論点整理PP.1-19」文部科学省 他





# 生徒の学校適応感を高める

## 主体的グループ活動の実践

—リーダー研修をMulti Level Approachの観点から考える—

岡山県立岡山大安寺中等教育学校 教諭 大西 由美

### はじめに

生徒が生活する学校やコミュニティの中で、他者とのつながりを作る力が乏しくなっている。「他者を理解しよう」と関心を向けて積極的に関わること」また、「自己を見つめ自分自身を知ること」がコミュニケーションを円滑に行う上での不可欠の要素だと考えると、つながりを作る力の乏しい生徒はコミュニケーションに苦戦しているといえる。苦戦しながらも前向きに他者と関わろうとしているならまだしも、傷つくことを恐れて殻に閉じこもるようになってしまうと、困難に直面してもだれにも相談できないまま傷を深めてしまいかねない。不登校等の深刻な事態になってしまうこともある。その未然防止のためにも、生徒につながるの力で問題を解決できる能力を育てていくことが必要である。その中で、特に生徒の学校適応感を高め、主体的に問題解決に向けて動くことのできる集団に育てる取り組みの骨格となる理論としてMulti-Level Approach（包括的生徒指導アプローチ）（栗原、2013）が注目されている。本稿では、このMLAの観点から、平成27年3月に実施した生徒会のリーダー研修会の実施内容を検証し、効果的な活動のあり方を示す。

### 実践

#### 1 実践の目的

「平成26年度岡山大安寺リーダー研修会実施要領」はその目的を「リーダー研修会を通じて、岡山大安寺中等教育学校生としての自覚や仲間意識を強め、学校生活上のマナーやルールなどについて考えることを通して規範意識を高める。今年度の学校行事について総括、中等教育学校の完成年度にあたり、行事の取り組み、中等教育学校生としてのありかたなどについて考えさせることにより、本校リーダーとしての自覚をもつ。」と記している。ここからは「生徒としてのあり方の自覚」「仲間意識の醸成」「規範意識の獲得」「リーダーとしての自覚」が実践の目的として読み取れる。

#### 2 実践の概要

この年度のリーダー研修会は平成27年3月7日（土）から8日（日）までの1泊2日の日程で「岡山県青少年教育センター閑谷学校」（岡山県備前市閑谷784）で実施している。参加生徒は生徒会執行部・書記部・専門委員会（年度下半期）委員長・同副委員長（前期課程・後期課程）及び有志生徒の26名であった。実施当日の日程は【Table 1】のとおりである。

##### (1) 事前学習

この研修に先立ち、平成27年2月15日（土）に、鳥取大学医学部の高塚人志准教授による「ヒューマンコミュニケーションセミナー」を企画し、教職員の研修とともにリーダー研修会に参加する生徒に「気づきの体験学習」を通じて「人はみんな違う考えを持っているということを前提にコミュニケーションを考えなければならない。」ということに思いを致させるとともに、「自己概念（セルフ・イメージ）」を豊かにさせる事前トレーニングをさせている。コミュニケーションの主要素としての伝え合うための工夫・聴き方・話し方などについて、実際にペアやグループでワークを行い、その実践から得られる実感として「①よりよい伝え方に気づくこと」「②自分を知ること」をテーマとした活動である。参加した生徒は、「自分のことはわかっているようでわかっていないとわかった。」「自分の頑張っているところを見直すことができた。」「自分の性格をみつめなおした。」などといった振り返りを残した。この「ヒューマンコミュニケーション」を通じて生徒はよりよいコミュニケーションのあり方について考えるだけでなく、「よりよい自分のあり方」についても、リーダー研修会に参加する前から考えるようになった。生徒のメタ認知を促進させる非常に有効な仕掛けであったと考える。

【Table 1】リーダー研修会日程

3月7日(土)	3月8日(日)
8:20 学校集合 8:30 出発式	6:30 起床, 洗面
10:00 関谷学校到着 オリエンテーション	7:00 朝の集い, 清掃
11:30 昼食(各自持参)	7:45 朝食 8:30 部屋点検,
13:00 ヒューマンコミュニケーション	8:45 講堂へ移動
15:00 講演会	9:00 講堂学習
17:00 夕食 18:00 入浴	10:30 研修ふりかえり
19:00 班討議+全体協議 現状分析 活動方針等	活動計画 プレゼントシート
21:00 情報交換会	12:00 昼食
22:30 就寝	13:00 まとめ・閉会
	13:30 関谷学校出発
	14:30 学校到着 解散式

## (2) アクティブラーニングのグループ構成

リーダー研修会の実施に当たり、当該年度の責任者として生徒を指導した教諭（保健体育・生徒会係）は、事前の準備や当日の活動担当を異年齢の構成員で作る生徒の班に分け持たせ、担当する活動の準備・司会進行等を全て生徒主体で運営するように仕掛けている。研修の事前指導の段階で全ての班がどこかの場面で主役になるように分担を決め、プログラムの実施準備と司会進行、さらにはまとめまで、極力教師が手を貸さず、生徒たちが協力して考え、実践するようにさせている。このことによって、異年齢集団の中の高学年の生徒は自然に自覚して班の中心的役割をこなすようになり、班員全員に目を配り、意見を吸い上げて活動を構築しようと動くようになる。また低学年の生徒も、班の一員として、自分にできることを率先してやろうとするようになる。ただし、担当教諭は「どうしても困ったら相談しなさい」と、逃げ道もちゃんと用意していた。これにより、生徒たちは先生が自分たちを信頼して任せてくれていることを自覚し、また、うまくいかなかったときは先生に相談できるという安心感も持ちつつ、何とか自分たちでやり切ろうとして一層生き生きと活動を構築していくことができた。筆者は考えている。

## 3 実践の結果

### (1) 生徒の活動計画

生徒たちは研修の最後に活動目標を短い言葉でまとめている。それにはいくつかの傾向が読み取れる。第

一には「自己成長」に関するもので、「積極的にあいさつを、自分から相手の方を見てする」「人の意見を聴くときは、相手に正面から向き合って積極的に聴く」「自転車通学のマナーをまずは自分が意識する」「人のためになることをいつも考えて行動するようにする」などである。第二には「他者貢献」に関するもので、「学年に関係なく困っている生徒がいたら声をかけて手助けする」「周りをよく見て忙しい人をサポートする」などである。そして第三は「環境を整える」という観点からのもので「黒板を毎時間きれいにして、気持ちよく授業を受けられるようにする」「雨の日は教室の前に雑巾を置く」「自転車置き場のごみを拾う」などである。これらの行動が実際に行われていくと、学校風土はあたたかく受容的なものとなり、生徒が集団として力を発揮できるようになり、気持ちのよい環境が保たれていくと思われる。生徒がこのような活動目標を語れるようになったということは、研修の成果が上がり、先に述べた実践の目的が達成されたということであろう。すべての参加生徒が主体的に関わる仕掛けを作り生徒を信頼して待つ姿勢を教師が貫いたことも大きな成功要因であると筆者は考える。

### (2) ASSESSによる効果測定

リーダー研修会の効果を客観的に測定するために、活動の事前事後でASSESS（6領域学校適応感尺度；Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）の質問紙を使って参加生徒の変化を測定した。結果は【Table 2】のとおりである。ASSESSの6領域とは「生活満足感＝生活全般に満足していると感じている」「教師サポート＝教師から理解され適切なサポートを受けていると感じている」「友人サポート＝状況に応じて適切に友人からサポートされると感じている」「非侵害的関係＝いじめられたり無視されたりからかわれたりしていないと感じている」「向社会的スキル＝教師や友人にあいさつしたり、相手を助けたりなど積極的に関わっていると感じている」「学習的適応＝学習に対する不安がなく、学習についていけていると感じている」の6つである。どの項目も平均が50で、それを超えると良好な状態と考えてよい。その観点から見ると、この集団は、研修前の段階から生活満足感が高く、他のすべての領域においても良好な適応感を持っているということが出来る。（第一回；平成27年2月）。それが、研修の後さらに数値を伸ばしていることがわかる。（学習適応感を除く。）

【Table 2】 ASSESSの数値変化

項目	第一回	第二回
生活満足感	58	68
教師サポート	64	65
友人サポート	58	61
非侵害的關係	61	65
向社会的スキル	61	64
学習的適応	59	59

## 考 察

これまで述べてきたことから、平成27年3月実施のリーダー研修会では、活動計画の記述からも、ASSESSの客観的数値からも、生徒の成長が見られたといえる。学校におけるすべての教育活動は、教育基本法が謳うところの将来の「平和で民主的な社会の形成者」として、生徒が成長していくことを目指して行われるものであるから、活動の事前と事後では生徒に何らかの成長がみられることが期待されている。今回のリーダー研修会は期待にこたえて成果を上げた優れた活動であった。それは、研修のプログラム構成がMLA（マルチレベルアプローチ）（栗原，2013）の理にかなっていたからであると考えている。

マルチレベルの「レベル」は、支援のニーズによる三つのレベルをいう。「一次的生徒指導＝生徒が自分で問題を解決する力を育てる」「二次的生徒指導＝生徒同士が支えあっていく力を育てる」「三次的生徒指導＝教師や専門家が支える」の三つである。この各次元の支援ニーズを充足するように支援と指導を同時に多角的に行っていくのがMLAである。「生徒たちが集団として成長し、仲間とのつながりの中で互いに交流し、支えたり支えられたりしながら、目の前の問題に主体的に関わり、力を合わせて解決していけるように育てていくこと。（専門的支援が必要な生徒にも二次的・一次的生徒指導は施される。）」、と言い換えてもよいと思う。その具体的な指導の方法としては、一次的生徒指導では「協同学習」「SEL（社会性と情動の学習；Social and Emotional Learning）」「品格教育」「PBIS（ポジティブな行動介入と支援；Positive Behavioral Interventions and Supports）」などが挙げられる。また二次的生徒指導では「ピア・サポート」「保護者との連携」「保こ幼小中連携」などが挙げられる。そして三次的生徒指導は「教師や専門家がチーム

となって個別支援すること」である。実施されたリーダー研修会の活動要素をこのMLAの観点に照らしてみると、その内容の多様性がよく見える。以下に整理して述べる。

### 1 協同学習の要素

リーダー研修会におけるグループ討議は、協同学習である。班に与えられたテーマについて、まずは自分自身で考え、その意見を班で討議してまとめていく。それを全体で共有した後、意見をより確度の高いものにブラッシュアップしていく。この活動は、小さな「ピア・サポート（仲間支援）」の面も含んでいる。討議のテーマについて、真剣に考えたうえで他者の意見を聴くことで、考えが広がったり深まったりする。良質なコミュニケーションとアクティブラーニングの舞台となるものであった。

### 2 SELの要素

SELは「自己のとらえ方と他者との関わり方を基礎とした、社会性（対人関係）に関するスキル、態度、価値観を身につける学習」（小泉，2011）と定義されている。他者に対して自分の考えをどうやって伝えるか（アウトプットスキル）ということも大切だが、自己の内面を理解したり、他者の表情や仕草から相手の感情を読み取ること（インプットスキル）が備わっていないために起こるトラブルも多く、SELではこのインプット面にも焦点を当てている。このリーダー研修会では、その事前学習「気づきの体験学習（ヒューマンコミュニケーション）」における自己理解促進の取り組みや、研修での「聴き方」のトレーニングがSELの要素を十分に備えているといえる。

### 3 ピア・サポートの要素

ピアは「仲間」、サポートは「支援」である。ピア・サポートは仲間同士で支え合う活動である。リーダー研修会では、前述の通り、あらゆる場面で異年齢の生徒集団が力を合わせて課題に立ち向かい、つながりの力で与えられた仕事をやり遂げていった。この活動そのものがピア・サポートである。また、ピア・サポートは、トレーニング→プランニング（活動計画）→実践→振り返り→トレーニングというように循環していく活動である。リーダー研修会で学んだことをもとに、活動計画を立てることは、このピア・サポートの「ト

レーニング→プランニング」の実践に他ならない。そして活動計画を学校現場に帰って実施していき、定期的に活動の成果を報告し合ったり、うまくいかなかった点を話し合ったりすることで、改善を加えながらあらたな実践へと循環させていくことができる。

#### 4 品格教育・PBISの要素

リーダー研修会を主催した教諭は、常々生徒たちに「大安仁」という言葉を伝えている。「大安寺」の学校名に「仁」（儒教の徳目・人間愛・思いやり）をかけたものである。学校生活のあらゆる場面で他者を思いやり尊重し合う気持ちを大切にしようという教えであり、「大安仁の日」というボランティア清掃の日が各学期ごとに計画されるなど、生徒の間ではおなじみの言葉となっている。すべての生徒があたりまえのように「仁」を心がけるように言葉かけをしていき、それを定着させていることは、品格教育としても素晴らしいことであると筆者は考える。岡山大安寺中等教育学校は平成27年度から本格的に品格教育に取り組み始めたが、この「大安仁」はその先駆けであるといえよう。

PBISは、おおざっぱに言えばポジティブな行動を強化して習慣化させていく取り組みである。アメリカでは、強化のためにカードやシールを贈っている。また、岡山県総社市の中学校では「Good Behavior Card」を作って活用しているところもある。リーダー研修会で、研修の最後に「プレゼントシート」を贈り合うことは、この研修で様々な活動をともした仲間に対して、力を合わせて考えたり悩んだり楽しんだりしたすべてのことを含めて振り返りたたえ合うことでもある。PBISで教師が生徒にカードなどを贈って望ましい行動を強化するのは方法は違うが、研修の最後の「活動計画」で考えた前向きな取り組みをより強化し、実践に向けて勇気づけるものとして「プレゼントシート」が類似の効果を持つと考える。

#### 結果と展望

生徒の成長を期して実践される教育活動が一定の成果を上るものとなるためには、効果のあった活動の優れた面を分析し、次回の取り組みに活かしていくことが必要である。本稿では、平成27年3月に実施したリーダー研修会は生徒を主体的に積極的に活動させる優れた仕掛けであるだけでなく、MLAの観点に照らして、生徒指導に有効な良質で優れた取り組みの要素を

たくさん持っていたことが分析できた。このことから、今後、リーダー育成だけではなくすべての生徒を育てる取り組みのあり方として、MLAの理論に基づく多様な仕掛けを各学校の既存の具体的な取り組みと関連させながら、教育活動に取り入れて実践していくことが有効であると考えられる。

筆者は平成27年度から「品格教育」を、そして平成28年度からは「PBIS」の実践を、先生方の協力の下に進めている。異学年交流や協同学習の持つ意義を認識し、効率重視や学力偏重に陥ることなく、生徒の人間力を育てる教育活動を現場に合った形で推進していく工夫をしている。今後、教育の現場においてより望ましい実践形態を探求していくうえで、ここに述べた実践のあり方が大きな示唆を含んでいるといえよう。この報告が、優れた教育実践について主体的に学び（自己研鑽）自己の実践に効果的に取り入れようとする前向きな姿勢（進取の精神）を持って教育実践を行っておられる諸先生方の参考になれば幸いである。

#### 参考文献等

- 石井 眞治・井上 弥・沖林 洋平・栗原 慎二・神山 貴弥 2009「児童・生徒のための学校適応ガイドブック—学校適応の理論と実践—」（協同出版株式会社）
- 栗原 慎二・井上 弥 2010「アセスの使い方・活かし方」（ほんの森 月刊学校教育相談7月増刊号）
- 栗原 慎二 2013 生徒指導・教育相談・特別支援をデザインする—ピア・サポートを軸とした学校改革—ピア・サポート研究,10,35-48
- 池島 徳大・松山 康成 2014 学校における規範意識の向上を目指した取り組みとその検討—“PBISプログラム”を活用した開発的生徒指導実践— 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」6,21-29
- 枝廣 和憲・松山 康成 2015 学校全体における積極的行動介入および支援の動向と実際 —イリノイ州 District15公立中学校における取り組みを中心に— 岡山大学教師教育開発センター紀要,5,35-43
- 総社市教育委員会 2015「だれもが行きたくなる学校づくり入門」
- 池本しおり 2009 岡山朝日高等学校におけるピア・サポート活動の実践 —あたたかい学校風土作りのために— 岡山朝日研究紀要,30,39-44
- 大西 由美 2010 岡山朝日高等学校におけるピア・サポート活動 —自重互敬の学校風土醸成と生徒の社会的成熟への支援—岡山朝日研究紀要,31,17-28

# 著 書 部 門



# 『宮脇紀雄 人と作品』

—備中の奥深い山ひだに生まれ育った童話作家—

岡山県立図書館 主事(再任用) 岡 長 平

著者・発行者 岡 長 平

発行年月日 平成28年(2015) 4月

体 裁 63,17p A 5判

## 1 はじめに

あなたは、おかあさんがありますか。あなたは  
おかあさんがあるしあわせを、ほんとうに知って  
いますか。また、あなたは、おかあさんがいないも  
ののかなしみを知っていますか。山のおんごく村  
の、まずしい家で、おかあさんをなくした、ひと  
りの少年の話を、まあきいてやってください。

(『山のおんごく物語』巻頭)

私は中国山脈のとある山ひだの、さびしい村の  
百姓の子に生まれた。長男だったけれども、十四  
の秋に母が死んで、幼い弟妹に、義母と祖母の間  
には生まれ、ひととおりの哀しい少年の日を送った。  
もし私に、少しでも多感なものがあるとすれば、  
この少年時代のおくりものだろうか。

(『わが還暦記』『わが鶏肋の記』)

宮脇<sup>としお</sup>紀雄(1907~1986年)は、明治の末に、備中の  
奥深い山ひだの百姓家に生まれ、母を早くに亡くした  
ことから、長男でありながら家を出て、単身文学修業  
に励む。その日その日のパンを得るため、クズ屋稼業  
まで経験しながら、少しずつ童話作家として認められ  
ていく。

宮脇の作品に共通するのは、多感な少年期を過ごし  
た、故里の風物であった。そこでは、実際に経験した  
つらさ、悲しさを描くのだが、穏やかに語りかけるよ  
うな文章には、不思議とじめじめとした暗さはない。  
むしろ、逆境を跳ね返そうとする強い意志がわいてく  
る。

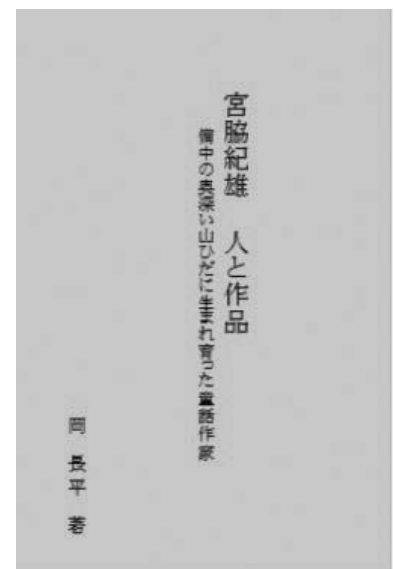
宮脇は、昭和54年に文庫化された『山のおんごく物  
語』の巻末に自筆(自作)年譜を載せている。5ペー  
ジの略年譜だが、人生の主要な出来事とその時に生ま

れた作品を簡潔にまとめている。

本書は、自身のエッセーや自著の前書き、後書き、  
また、宮脇を取り巻く他の作家の作品評、人物評など  
を参考に、この年譜に肉付けする形で補い、宮脇の人  
と作品をたどってみたものである。



『生きている森』(文研出版)より



本書表紙書影

## 2 本書の構成

本書は、(1) 口絵、(2) 本文、(3) 単行本目録の3部で構成した。

### (1) 口絵

年代順に宮脇の主な著書計36点をカラー図版で収録した。

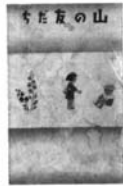
カラー口絵イメージ



3 山の子どもの村の子ども 14p



2 テブクロトコネズミ 13p



1 山のともし火 13p



12 ふしぎな野原 20p



11 悲しき榮冠 20p



10 悲しき野みち 20p



6 こども百物語 16p



5 力あらず 15p



4 乙女の涙 14p



15 早春の丘 23p



14 たのしい童話の園 22p



13 夢から白鳥 21p



9 山版収く村 19p



8 おじいさんと野がも 19p



7 小坡物語 18p



18 子うさぎミミイ 28p



17 ピノチオ 25p



16 きつねと子うさぎ 23p



21 母恋人形 30p



20 悲しき歌姫 30p



19 四つ葉のクローバ 29p



30 しし子ケン 47p



29 わが機助の記 47p



28 なくなみそちよ 46p



24 山かげの石 36p



23 りょうかんさま 33p



22 ずらいの乙女 31p



33 おきんの花かんざし 50p



32 ねこの名はヘイ 48p



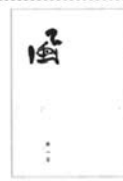
31 生きている森 48p



27 やまのゆうびんやさん 45p



26 山のおんこく物語 44p



25 風 43p



36 おじいちゃんにピョーショジョー 54p



35 あめの日かげの目 53p



34 かきの木いっぴんみが三つ 52p



## (2) 本文

次の内容で構成した。

### ■年代順にたどる生涯と作品

- 山のおんごくに生まれ育つ
  - 備中・吹屋の風土
- 母、三十二歳で病死
- 岡山へ出て本屋を始める
- 文学を志し単身上京するが
- 再び上京
- 作品が売れる
- 結婚、山暮らし、終戦
- 海外名作童話の再話
- 単行本を次々と刊行
- 日本児童文芸家協会の創立
- 偉人伝の執筆
- 民話と宮脇
- 「三種の神器」と宮脇
- 父の死、山のおんごく物語
- 円熟の「宮脇ワールド」

### ■作家仲間が語る人柄と作風

## (3) 単行本目録

- 童話、民話、伝記、再話等に限らず、宮脇が著作者（翻訳を含む。）となった単行本を収めた。編集のみの場合は除外した。
- タイトルの五十音順に配列した。
  - 各記述には、タイトル、著者表示、発行者、発行年月、叢書注記、収録内容（本文記載のものを除く。）を納めた。
- 本文に解説等を記載したものは、記述の最後に本文ページを記した。

残した著書220数冊、創った童話や読み物の数は（筆者が確認しただけで）1,100編に及ぶ。

創作単行本は、昭和59年11月の『少年風の中をいく』が最後となったが、没後も、偕成社の低学年向け「アンデルセンどうわ」や「偉人伝」、また、再話ものの一つ、バーネットの『小公女』（ポプラ社文庫）も版を改めて長く親しまれた。

..... 【あ】 .....

■愛よ永遠（とこしえ）に：少女小説 宮脇紀雄 ポプラ社 昭和24.5 .....	21
■あかい童話 二年生 宮脇紀雄著 沢井一三郎絵 鶴書房 昭和29.4 .....	30
■あめの日かげの日 宮脇紀雄作 井口文秀画 岩崎書店 昭和56.11（岩崎小学生文庫） .....	53
■アラビアン・ナイト 宮脇紀雄文 太田大八絵 偕成社 昭和37（幼年絵童話全集6）	
■アラビアンナイト集 宮脇紀雄等文 滝原章助等絵 講談社 昭和42（ワイドカラー世界の名作童話4）	
⇒昭和46年に「デラックスカラー世界の名作童話4」として再刊	
■アラビヤナイト：ひらがなどうわ 宮脇紀雄著 まえたにこれみつ絵 同和春秋社 昭和28 .....	25
■アラビヤナイト物語 宮脇紀雄著 東光出版社 昭和31.12	
■ありとぎりぎりす ウォルト・ディズニー絵 宮脇紀雄文 講談社 昭和38.11（講談社のディズニー絵本45）	
■アリババと四十人のとうぞく みやわきとしおぶん やぐるますずしえ 旺文社 昭和45（旺文社ジュニア図書館）	
■安寿と亀王：日本伝説 森嶋外原作 宮脇紀雄編著 新井五郎絵 偕成社 昭和31（児童名作全集21）	
⇒昭和47年に「児童名作シリーズ7」として再刊	
■安寿と獅子王 玉井徳太郎、石井健之絵 宮脇紀雄文 講談社 昭和38.10（講談社の絵本クラウン版22）	
■アンデルセンどうわ 一年生 宮脇紀雄編著 川島はるよさしえ 偕成社 昭和31.11（学年別幼年文庫4）	
収録内容：はなとおひさま、みにくいあひるのこ、五つぶのえんどうまめ、こうのとりのなぎく、ほんとうのおひめさま、こぶたのじまん、なまりのへいたい、こまとまり、イーダちゃんのはな、とびっこ、一まいのはな、ゆきだるま、そばとゆうだち、おやゆびひめ、くさったりんご	
■アンデルセンどうわ 二年生 宮脇紀雄編著 井口文秀さしえ 偕成社 昭和31.12（学年別幼年文庫4）	
内容：はくちょうのおうじ、うぐいす、二ほんのろうそく、そらをとぶかばん、パンをふんだ子、ねむりのせい、あかいくつ、ちょうのおよめさん、のろまのハンス、二わのおんどり、あまのはなし、はりのじまん、こがねむしのたび	
■アンデルセン童話 三年生 宮脇紀雄編著 輪島清隆さしえ 偕成社 昭和31.12（学年別幼年文庫4）	
収録内容：人魚のおひめさま、ふるいがいとう、トックくん、マッチ売りの少女、もみの木のはなし、みのないなしの木、大クラウスと小クラウス、水のしずく、バラダイスの園、しあわせの家	

■家なき子 マロー原作 宮脇紀雄編著 武田将美絵 偕成社 昭和31（児童名作全集19）	
⇒昭和47年に「児童名作シリーズ9」として再刊	
■生きている森：ふるさとの森を考える 宮脇紀雄、宮脇昭共著 佐藤広喜絵 文研出版 昭和50.3（文研科学の読み物） .....	48
■偉人の話 一年生 宮脇紀雄著 武田将美さしえ 偕成社 昭和32.7（学年別幼年文庫11） .....	35
収録内容：にのみやきんじろう、じえんなー、やまだながまさ、すとらふじん、とよとみひでよし、きりすと、せいしょうなごん、はーげんべっく、たかみねじょうきち、ねーる	
⇒1989年に改裝版刊行	
■偉人の話 二年生 宮脇紀雄著 矢車涼絵 偕成社 昭和32.9（学年別幼年文庫11） .....	35
収録内容：みやざわけんじ、ミレー、みなもとよしつね、キュリーふじん、りょうかんさま、コロンプス、こうしさま、フランクリン、ほそかわガラシヤふじん、ノーベル	
⇒1989年に改裝版刊行	
■偉人の話 三年生 宮脇紀雄著 大日向明絵 偕成社 昭和33.5（学年別幼年文庫三年生11） .....	35
収録内容：（世界のはつめい王）エジソン、（日本の国をまもった）勝海舟、（こくじんをじゆうにした）リンカーン、（うつくしい詩をつくった）石川啄木、（赤十字のもとをひらいた）ナイチンゲール、（みだれた日本をまとめた）鐵田信長、（すばらしい音楽をこした）ベートーベン、（ただしおこないをおしえた）中江藤樹、（かがやくげいじゅつ天才）レオナルド・ダ・ビンチ、（人るいの恩人・日本のほこり）野口英世	
⇒1990年に改裝版刊行	
■いそぶえほん イソップ著 みやわきとしおぶん くまだちかほ絵 集文館 昭和42（集文館ワイドえほん）	
■イソップ童話 宮脇紀雄著 さわいいちさぶろう絵 童話春秋社 昭和25	
※ 本表示画家名は「ふかいいちさぶろう」だが、重版の画家名などから「さわいいちさぶろう」の誤植だと思われる。	
■イソップものがたり イソップ著 みやわきとしおぶん おのかおるえ ポプラ社 昭和46（おはなし絵文庫8）	
■イソップ物語 イソップ寓話2 イソップ著 宮脇紀雄編著 武井武雄絵 講談社 昭和26（世界名作童話全集28）	
■イソップ物語：イソップ寓話3 イソップ著宮脇紀雄編著 安泰絵 講談社 昭和29（世界名作童話全集42）	
■ウィリアム・テル 宮脇紀雄文 湯川久雄絵 鈴木出版 [1950年代]（鈴木出版のおはなしえほん9）	
■牛若丸の島めぐり 宮脇紀雄文 羽石光志絵 大日本雄弁会講談社 昭和30.6（講談社の絵本138）	

### 3 おわりに

岡山県立図書館に勤務していた時、「岡山県郷土作家百人展」という展示会をして、図録を作った。宮脇はその百人のうちの一人だったが、図録を作るにあたって、その資料の少ないことに驚いた。

『日本文芸鑑賞事典』第20巻（ぎょうせい 昭和63年6月）に『山のおんごく物語』が紹介されているが、その中で執筆者の小林俊也は、「宮脇紀雄の作品論や作家論としてまとまった論考は、今のところほとんどなく、今後の研究を待たなくてはなりません。」としており、「資料が少ない」と感じた現状を説明している。

その後、ある機会に古書店で「風」3部が出品されているのを見つけた。昭和44年に宮脇が満を持して私家版で発行した個人雑誌である。その第一号には、野間児童文芸賞を受賞した長篇童話『山のおんごく物語』が収録されている。

読んでたちまち魅了された。

◇中国山脈に連なる深い山々の谷間の村、そこの貧しい農家の子、功という名の少年が主人公で、家族は祖母、父、病死する母、姉、弟の六人構成。物語は十四の話が、ある年の早春から次の年の春がくるまでの季節の順にオムニバスの形式で、巧みに民話風に運ばれている。母親を失った子の哀愁と夢想が綴られ、人の世の明暗が語られ、ときどきにユーモアが取りあげられて、素朴な表現が物語の興味を倍加している。（第七回野間児童文芸賞要項 「児童文芸」昭和45年1月号）

母を診察に来た医者靴をかくす「くつまつり」、病気の母の患部を冷やすための「氷買い」、母の快癒を祈祷する「かべぬり法印」、近所の婚礼と母のとむらいを描く「よめどりとおとむらい」、功や子どもたちが亡き母を思い慕う場面を描く「お遍路さん」「たこやぶり」、そして、コンニャク商売に奔走して失敗した父との「夜なべの親子」など、作品は、春の訪れに始まり、その後一年間の主人公・功の生活を、四季折々の風物とともにたどる。

◇あまたある宮脇さんの作品の中でも代表作とって間違いないうだろう。宮脇さんの半自伝で、青年の頃、山の遠国(おんごく)である故郷を出てから、長い間心の中にあたためてきた、なつかしい思い出の風物や季節感を横糸に、母に死別した少年の、父と姉と弟(と祖母)の寂しい生活を縦糸として、美しく織りあげた物語である(内野富男「宮脇紀雄論」)。(かっこ内補記は筆者)

◇宮脇さんの物語が、生死にまつわる重い素材をとり上げながらも、さわやかな印象を残してくれるのは、その生い立ちによって培われた強靱な生きる意志が底を流れているからだと思います。底辺の生活を、肩肘はらず謙虚にくぐりぬけてきた心情が、明日を生きる子どもたちの素朴な心にとけこみ、哀しみをこえた向日性の境地をひらいてくれるのです(西沢正太郎「山のおんごく物語解説」)。

それまで「岡山県郷土作家百人展」以来、心に引っかかっていた気持ちは、はっきりと、宮脇に関する資料をまとめなければ、という奇妙な責任感に変わった。

本冊子は、作品論でも作家論でもなく、宮脇の書いたものを年代順にたどり、前書きや後書きなどから引用したものである。あるいは、他の作家が書いた作品評も引用した。こうすることによって、宮脇のその時その時の気持ちや考え方、作品に対する思い、また童話や、場合によっては、人生に対する考え方が読み取れるのではないかと考えた。

楽しみとして、宮脇童話を読む人のいくらかでも参考になれば幸いである。

なお、本書は、私家版として発行し、県下の公共図書館に配布するにとどめた。興味のある方は、お近くの図書館でご覧いただきたい。

# 平成28年度「日教弘教育賞」

## 最優秀賞

(学校部門) (個人部門)

# ふるさと見附を愛する子どもを育む地域教育プログラムの創造

～地域と協働で取り組む3年総合「私たちの力で大好きな商店街を盛り上げよう」の実践を通して～

新潟県見附市立見附小学校

校長 布川 治夫

## I はじめに

見附小学校は、見附市で推進している学校、家庭、地域が一体となった総掛かりの人材育成を目指す「共創郷育」のもと、ふるさと見附を愛する子どもを育むために、「地域に学び、地域でつながり、地域を創る学習」の展開に努めている。また、コミュニティスクールを導入し、学校運営協議会や学校支援地域本部を通して、地域との連携強化にも取り組み、地域との好循環を生み出しやすい環境にある。見附市商工会(以下、商工会)や青年会議所の方々との連携による成果も上がっている。

## II 研究の概要

新潟県では、目指す人づくりの姿を「ふるさとへの愛着と誇りを胸に、粘り強く挑戦し未来を切り拓く、たくましいひとづくり」としている。これまで、当校に於いても、地域連携を教育活動の軸に据え、学校が計画を立案し、教育コーディネーターを介して関係機関との調整による活動や、地域の要請による活動を推進してきた。しかし、子どもが地域に対して、主体的に働き掛ける姿に弱さが見られた。これは、子どもに、地域を動かしたり、変えたりする体験や、地域から認められる経験を十分に味わわせることができず、自己有用感に裏付けられた地域に対する愛着を育むことまで至らなかったからである。

そこで、学校と地域とが一緒に活動を計画し、子どもの成長と地域課題の解消を見据えたWIN-WINの活動(以下、学校・地域共同開発型の活動)の在り方を明確にし、地域教育プログラムとして教育課程に位置付けることが必要であると考えた。本研究では、学校と地域とで、目指す子どもの姿と地域課題を共有しながら活動の計画を作成する。そして、活動を進める中で、子どもの思い・願いと地域の思い・願いの変化を共有する。このことにより、子どもの主体的に地域にかかわり続ける中で、自己有用感を高めていく姿や、地域の新たな取組を生んだり、意識を変えたりする姿につながると考えた。

## III 研究の内容

### 1 研究の実践内容

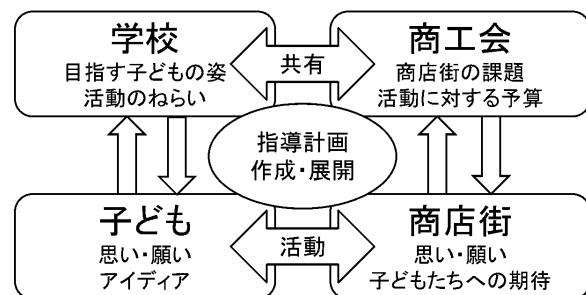
平成26・27年度第3学年総合的な学習の時間

単元名「盛り上げよう 私たちの大好きな商店街」

### 2 研究の方法

(1)目指す子どもの姿と地域課題を共有した指導計画の作成。

当校では、3年の総合の他に、2年生活科や6年総合でも、商工会や商店街と連携した活動を行ってきた。しかし、学校・地域共同開発型の活動を目指すには、3年総合で目指す子どもの姿と商店街の課題を、学校と商工会・商店街で共有することが必要である。また、活動を進める中で、子どもの思い・願いと商工会・商店街の思い・願いを共有しながら、指導計画を作成していく必要もある。そこで、以下のような流れで指導計画を作成、展開する。



(2)子どものアイデアを生かした活動を検討、実行する中で、互いの思い・願いを交流する場の設定。

子どもに地域に対する愛着を育むためには、地域に対する自己有用感を高めることが必要である。そのために、子どもの思い・願いが具現され、成功体験を実感できる活動を組織する。その際、子どもと商工会・商店街の思い・願いを交流し、実現可能な活動について検討できるようにする。

## IV 研究の実際

### 1 平成26年度第3学年実践

(1)学校と商工会とでの指導計画作成について

3年総合の打ち合わせで商工会を訪問した。そこで

は、総合を通して目指す子どもの姿として「自分たちの住む地域をよりよくしようと努力している人々の思い・願いに気付くこと」「自分たちでできることを考え、実行・発信できること」を伝えた。商工会は、「商店街としても行き詰まっている。昔のような賑やかな商店街を目指して取り組んでいるが、新しいアイデアがほしい。」と答えた。そこで、学校と商工会で話し合いながら以下の指導計画を作成した。

第1次 商店街の工夫や店の人の思いを調べよう

第2次 商店街の今の様子を詳しく調べよう

第3次 自分たちでできることを実行しよう

第4次 自分たちの活動を振り返ろう

作成後、商工会が、「商店街の活性化のためにありがたい。商店街も喜んで協力する。学校のねらいや要望は私が伝えます。子どもたちのアイデアに予算を付けたい。」と言った。学校と商工会とで指導計画を作成したことにより、活動の見通しを共有することができた。

#### (2)子どもと商店街の交流

子どもに、社会科のスーパーマーケットの学習を基に商店街に目を向けさせた。そして、お店ごとのグループを作り、商店街のことを詳しく調べることにした。すると、子どもは次のようなことに気付いた。

- お店のよいところを詳しく教えてくれたり、試させてくれたりする。とても優しい。
- 商店街には自慢できる商品がたくさんある。

商店街のよさに気付いてきたところで、商工会から商店街の歴史と現状について聞く場を設定した。昔は賑やかで、子ども



の遊び場でもあった商店街が変化してきている現状を知った子どもは、「昔のような賑やかな商店街にしたい。」と思い・願いをもった。続けて、商工会代表が、「みなさんのアイデアをください。」と言った。子どもは、アイデアを考えることに意欲的な姿を見せた。

#### (3)子どものアイデアを生かした活動の実際

グループで検討した結果、以下のようなアイデアが出された。

- お店のゆるキャラとよさを伝えるポスターを作る。
- スタンプラリー大作戦をする。

このアイデアを学校と商工会とで検討し、実現可能

かどうか確認した。すると、スタンプラリーの賞品は、商工会で予算を付けて用意することとなった。商工会代表は、「ゆるキャラは我々だけでは思い付かない。スタンプラリーも流行っているの、ぜひやってもらいたい。」と言った。子どもたちの思い・願いが地域に認められたのである。

#### • お店のゆるキャラとポスター作り

17店舗でそれぞれゆるキャラとお店の紹介ポスターを作成した。作成したゆるキャラの意味を説明したり、紹介ポスターを掲示してもらったりした。子どもは、お店の方に、「お店の特徴が表れていてとってもうれしいです。」「上手にできていてすごいね。お店に飾っておくよ。」と言われた。振り返りカードにも、「お店の人にほめられてうれしかった。いろいろな人に紹介して、たくさんの人に来てもらいたい。」と書く子どもが多く見

見附市商店街 12/5(金)~12/14(日)  
スマイルスタンプラリー



#### • スタンプラリー大作戦

作成したゆるキャラを使って、スタンプラリーカードを作成した。子どもが、お店の方に説明すると、「スタンプを作っておくね。」と言った。子どもは学校でも全校放送で呼びかけたり、保護者にチラシを配ったりして参加を呼びかけた。



その結果、200名以上の方が商店街に訪れた。商店街の方から、次のような感想をもらった。

- 昔のように、久しぶりに子どもが走り回る賑やかな商店街になってうれしかった。
- 子どもの、「ごめんください。」の音が響いて、お店が明るくなった。

思い・願いを具現し、それに対する商店街の感想を聞いた子どもたちは、活動を多くの方に知ってもらえたと意欲を高めていった。



・地域の方に宣伝する

子どもは、商店街のよさや、取り組んだ活動について、より多くの地域の方に発信したいと願ってきた。そこで、見附市の教員とPTA、地域の方が集まる見附アカウンタビリティで取組を発表した。その発表の様子をDVDにして、見附市交流センターで放映した。

(4)子どもと商工会・商店街の思い・願いの交流

子どもの活動に対して、商工会・商店街から感謝状を贈呈したいと申し出があった。商店街の方から、次のような感想をいただいた。



みなさんが商店街を盛り上げる活動に取り組んでくれたことに、刺激を受けました。私も、新しいことに挑戦しようと意欲が沸き、新しい機械を導入しました。みなさんも新しいことに挑戦し続けてください。

これは、学校・地域共同開発型の活動の一つの姿である。

2 平成 27 年度第 3 学年実践

(1)学校と商工会とでの、平成 26 年度の成果・課題の共有と指導計画の修正

平成 26 年度（以下、昨年度）の活動を受け、平成 27 年度（以下、今年度）の活動を学校・地域共同開発型の活動として地域に根付かせるとともに、教育課程に位置付けるために活動の目的を整理する必要があると考えた。そこで、学校と商工会とで、昨年度の成果・課題を共有しながら、指導計画を加筆・修正する場を設定した。次の成果・課題を共有した。

- <学校>
- ・商店街との交流によりコミュニケーション能力の素地が養われた。
  - ・自分でも地域の役に立てるという認識を育めた。
  - ・お店が限定されていて、追求の姿に差が見られた。
- <商店街>
- ・子どもらしい新しいアイデアがいただけた。
  - ・子どもの質問に刺激を受けて、新しいことにチャレンジしようという意欲が高まった。
  - ・より多くのお店とかかわらせたい。

この成果・課題を基に、次のように指導計画の 1 次を修正した。

平成 26 年度	平成 27 年度
商工会が協力する商店街のお店を提示し、子どもが選択する。	商工会が、商店街に活動の目的を伝える。子どもが追求したいお店を選択する。

(2)自分が追求したい商店街のお店との交流

子どもは、第 2 学年の生活科で商店街見学を経験し、どんなお店があるか知っていた。そこで、「お店の方の工夫」「お店の方の思い・願い」という視点を与え、商店街で追求したいお店を調べる活動を行った。その中で、「休みの日でも連絡があれば仕事をする。」「お客さんと話をしながら、その人に合ったものを提供する。」という工夫や「地域に親しみをもってもらえる商店街にしたい。」という思い・願いを知ることができた。子どもの感想には、「商店街をもっと賑やかにしたい。」ということに関する記述が多く見られた。商店街に対して、愛着をもち始めた姿である。

(3)活動に対する意欲を高める子どもと商工会・商店街の思い・願いの交流

今年度は、子どもがもち始めた商店街に対する愛着を、商店街に主体的にかかわる意欲へと高めるための手立てとして、子どもと商工会・商店街の思い・願いの交流の場を設定した。商工会・商店街からは、「商店街の歴史と現状」「昔の子どもたちにとって店頭で商品を作る商店街はとても楽しいワンダーランドのような所だったこと」「現在は店舗数も来客数も減っていること」を聞いた。また、昨年度の 3 年生が活動したことが次のように商店街を大きく動かしたことも聞いた。

- ・子どもたちが活性化しようと活動したことで、刺激を受けた店主が新しい機械を導入したこと。
- ・子どもたちのアイデアであるスタンプラリーを取り入れて、商店街でもスタンプラリーを行ったこと。



子どもたちは、「自分たちも商店街が盛り上がるために、何かしたい。」と子どもたちは言い始めた。そこで、提案するアイデアを考える場を設定した。

(4)商店街の思い・願いを受けた子どものアイデアを生かした活動の実際

商店街を盛り上げるため、子どもたちは次のアイデアを出した。

- 子どもの遊び場を作り
- おまけプレゼント
- 試食コーナーや手作り体験イベント
- ゆるキャラシール作り
- 宣伝ポスター
- チラシ
- 店の紹介本作り
- テーマ曲、CM作り
- 商店街での呼び込み・宣伝

これらのアイデアについて、実現可能かどうか学校と商工会・商店街で検討した。すると、商工会・商店街の提案で、昨年度実施した「店の紹介本」の他に、おまけプレゼントとしてティッシュの配布をすることになった。ティッシュの予算は商工会で用意し、子どもは、お店ごとのティッシュに入れるチラシを考えることになった。また、商店街CM作りもお願いされた。

• おまけ（チラシ入りポケットティッシュ）作り  
 これまで調べてきたお店ごとのグループで、ティッシュのチラシを作成した。お店の特徴を絵や文で簡潔に表した。グループ同士で見せ合い、よいところを取り入れながら、取り組んだ。



ティッシュのチラシ作り

• 商店街CM作り  
 お店ごとのグループの代表が集まり、商店街のCM作りを行った。「商店街のよさと魅力が伝わるCM」を合い言葉に活動を進めた。おまけプレゼントのティッシュのことも内容に入れて、調べてきたお店のよさを簡潔に分かりやすく伝わるCMを作成した。そして、見附市交流センターに交渉し、期間限定でCMを放送してもらった。商店街の方から次のような感想をいただいた。



商店街CM

- たくさんのお客さんが来てくれた。ティッシュを見て笑顔になるお客さんを見て元気が出た。
- 見附市交流センターでCMを見たとき、自分もがんばろうという思いになった。

子どもたちの振り返りには、「自分たちで商店街を盛り上げることができたこと」「商店街の方を笑顔にできたこと」に関する記述が多く見られた。これは、活動が子どもの自己有用感につながった姿である。

(5)子どもたちの活動への評価

昨年度に続き、商工会・商店街からの感謝状を受賞した。その他、地元新聞に掲載されたり、見附市ライオンズクラブから2年間の取組に対する表彰を受けたりした。表彰後の感想では、「自分たちの力で商店街を元気にできたことが嬉しかった。」と述べた。地域を自分たちで変えることができることを実感した姿である。



地元新聞掲載記事

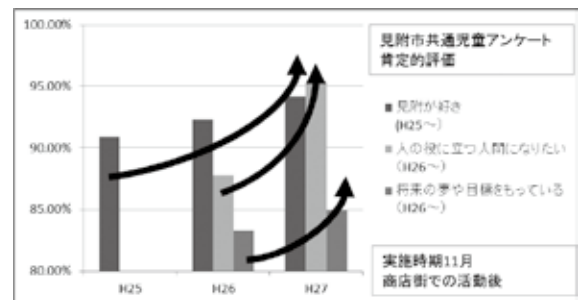


ライオンズクラブからの表彰

V 成果と課題

1 成果

- 学校と商工会とで目指す子どもの姿と商店街の課題を共有して活動を進めたことにより、商店街のそれぞれのお店に活動の目的と内容の速やかな共通理解につながった。その結果、子どもの活動に対する商店街の方の意欲的な姿を生むとともに、商店街に対する子どもの主体的な働きかけの姿を生んだ。
- 子どものアイデアが商店街の活動に実際に生かされ、認められたことは、地域に役立つという子どもの意識を育むことにつながった。また、商店街の活性化を目指して、商工会・商店街の意識を変え、行動を促すきっかけにもなった。また、学校・地域共同開発型の活動は、見附を愛する子どもの育みにもつながることが見えてきた。



2 課題

目指す子どもの姿を、より具体的に描くことで、子どもに対する地域のかかわり方が明確になる。学校・地域共同開発型の活動を、地域教育プログラムとして教育課程編成に反映し、持続可能な地域連携活動へと高めていくことが必要である。



# 児童の意欲を引き出す体育の授業を考える

～「もっと運動がしたい」を目指して～

栃木県宇都宮市立陽東小学校

教諭 五十嵐太一

## 1 はじめに

「体育は、できないから嫌い。」「持久走は、疲れるだけでおもしろくない。走りたくない。」「ドッジボールは、速い球を投げられる人以外はずっとよけているだけでつまらない。」・・・。

児童は、体育にさまざまなイメージをもち、ひいては体育全般に得意不得意を感じることもある。そして、それが体育の授業の中で意欲として大きく表れる。意欲がときとして、反復練習や課題への取り組みの阻害の材料になっており、ますます体育に対する意欲・技能習得の二極化を進める大きな要素になっている。

昨年度、本校第4学年は、5月にとちぎっ子学力調査を行った。その際、第4学年の質問紙に体育に関する問いが2点あった。1つ目は、「体育の教科は、しょう来のために大切だと思いますか。」という質問である。この質問に対して、93.1%が「はい」と答えている。これは、県の平均である90.0%を3.1ポイント上回っている。2つ目は、「体育は好きですか。」である。この質問に対して、67.3%が「はい」と答えている。これは、県の平均である73.6%を6.3ポイントも下回る結果となっている。

また、昨年度6月に行った体力テストにおいて、本校全体の体力合計点が全国平均をやや下回っていた。その中でも、特に「20mシャトルラン」と「ソフトボール投げ」の平均が全国平均を下回る学年が多く、担任をもった第4学年においては、20mシャトルランでは、t検定で-6.22の差が出ており、危険率が5%で有意と判定が出ている。また、ソフトボール投げでは、-3.53の差が出ており、危険率が1%で有意であると判定が出ている。

この2つの調査結果から、児童は体育の有用性を十分に感じているが、体育を好きになれずにいることと体力を十分に獲得できていないことが推察される。

以上の調査結果をもとに、本実践研究において以下の2つの仮説を立てた。

### 仮説①

- ・苦手意識をもちやすい単元の教材の工夫を図れば、体育に積極的に取り組む児童が増えるのではないかと。

### 仮説②

- ・興味を持続させ、運動量を確保できるような教材の工夫を図れば、授業に対して意欲的に活動することで、技能の高まりを期待できるのではないかと。

2つの仮説を明らかにしておく方法として、以下に挙げた内容を実践することとした。

### 仮説①に対する実践①

児童の発達段階に沿った単元計画の作成

### 仮説②に対する実践②

児童にとって魅力ある教材や教具の工夫

## 2 実践結果

### ① 児童の発達段階に沿った単元計画の作成

- ・開発実践単元「バウンドバレーボール」

#### 【ねらい】

技能の簡易化と学習過程、ルールの工夫により、全員がアタックしたりレシーブをつなげたりする喜びを味わえる授業を目指す。

#### 【ルール】

- ・1チーム4～5人
- ・ラリーポイント制
- ・時間制（1試合5分）
- ・ポジションはなし
- ・サーブは順番を固定
- ・バドミントンコート
- ・ソフトバレーボール（180g使用）

単元における「本時のめあて」、「各時間におけるステップごとのルール」、「予想される児童の姿」を以下の表にまとめた。（次項参照）

表-1

単元時数	「本時のめあて」 ・各時間におけるステップごとのルール ☆ゲーム例（第1時における活動例） 予想される児童の姿(○メリット ●デメリット)
1	「ソフトバレーボールを使ってさまざまな遊びを楽しもう」 ☆ボール運びリレー ☆ワンバウンドラリー ☆アタックで命がせよ ☆アタックキャッチ！ ○全体でボールに慣れ親しむ ○運動量を確保できる
2	「ラリーを楽しんでゲームをしよう。」 ステップ1<ルール>
3	・レシーブ側はワンバウンドしてキャッチする。 ・キャッチした人がアタックラインより後ろから好きなところに移動してアタックする。 ○ルールが単純で簡単 ○ラリーが続く ●運動能力の高い児童だけが活躍する
4	「友達と2段こうげきをせいこうさせよう。」 ステップ2<ルール>
5	・レシーブ側はワンバウンドでキャッチする。
6	・キャッチした人は、アタックする人のところに行き、トスを上げてアタックさせる。(男⇔女、番号順などの制約をいれてもOK) ○トス→アタックの流れが分かる ○バランスを考えてゲームに取り組む ○技能に応じて作戦を考えるようになる ●同じ人がキャッチ、アタックすることになる
7	「3段こうげきでゲームを楽しもう。」 (第8時からリーグ戦)
8	ステップ3<ルール>
9	・レシーブ側はワンバウンドしてからレシーブする。 ・レシーブされたボールを別の人がキャッチする。 ・キャッチした人は、アタックする人のところに行き、トスを上げてアタックさせる。 ○3段こうげきの流れが分かる。 ○バランスを考えてゲームに取り組む(こうげきから守りまで) ○運動量が増える。 ●レシーブやトスの技能を高める必要がある

(実践結果)

第2時でキャッチやアタックに消極的だった児童は、授業で仲間との練習を重ねていくにつれ、2段攻撃→3段攻撃と難易度が上がるのに反して、攻撃に積極的に参加する機会が増えた。ほぼ全員がアタックが決められるようになり、第9時においては、運動が苦手と言っていた児童が、積極的にレシーブをし、仲間とボールをつなぐ楽しさを十分に味わうことができていた。

本単元のルールの設定や授業計画を通して、仲間とかわりあう時間をたくさんとり、ゲームの簡易化とステップアップを図ることにより、3段攻撃によるラリーゲームをクラス全員が汗びっしょりになるまで楽しむことができた。

そして、第5学年時の「ソフトバレーボール」の単元においても、ルールをノーバウンドに変えるのみとすることで、運動の特性を理解して運動に親しむことができた。また、多くの児童が「3段攻撃の心地よさ」を経験することで、チームごとにレシーブ、トス、アタックの基礎練習を選んで活動することができた。

② 児童にとって魅力ある教材や教具の工夫

【ねらい】

短い時間で児童が運動を楽しみ、意欲的に能力を高める時間をつくる。

(1) ボール投げの能力強化

本学級では、体育の授業前やちょっとした空き時間、業間休みや昼休みに実施できるボール投げの能力強化として、「校庭ゴルフ」「手作りジャイロ」の自校化を図った。

「校庭ゴルフ」では、児童の投げる力がある程度均一された小グループを作り、校庭内に設置した計9ホールのゴールに向けて、順番にポテックスを投げる活動を行った。ポテックスは、投げたときに腕の振りと手首の返しがうまくいき、きれいな回転がかかると「ヒュー」と高い音を出して飛ぶ。



校庭ゴルフに挑戦する児童の姿



校庭ゴルフ図

児童は、その音の有無で、自分の投げ方の良し悪しを判断することができるため、より大きい音を目指して、何度も挑戦していた。また、チームの合計投球数がスコアとなるため、チームの仲間が遠くへ投げられるように互いに投げ方をチェックし、どのグループも声をかけ合っていた。

また、すべてのホールを回るタイムもスコアに加算されることから、走りながら投げる活動を行うことで、体力増強にもつながったと考えられる。すべてのホールを回り終わるのに、およそ10分から15分程度で終わることもあり、児童が飽きることなく、意欲的に投げる運動に取り組むことができた。また、運動量も十分に確保することもできた。

「手作りジャイロ」とは、紙やペットボトルの胴体の部分を切って輪を作ることのできる、投げる教材のことである。工程も簡単なため、手作りで教材を作り、自分だけのものを一人一人が投げることができた。



これは、素材が軽いので、**手作りジャイロ** どこでも安全に投げることができる。そのため、業間休みや昼休みなどに自分の手作りジャイロをもって外遊びに出る児童が多くいた。体育館を解放した時にも、遠くに飛ぶように何度も投げる運動を楽しんでいた。

その他にも、メンコを牛乳パックで作ったり、紙鉄砲を作ってクラスの朝の会の時間に実施したりと、体育の時間以外にも楽しめる手作り教材を身近に置くことで、安全に楽しめる環境を教室にも作ることができた。

## (2) 持久力の強化・・・「校庭ミニ駅伝」

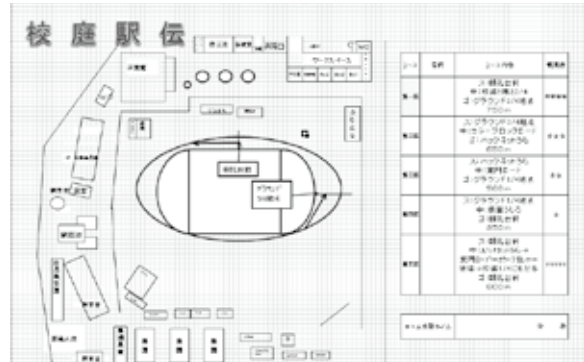
体育の中でも、運動が苦手な児童がひときわ苦手とするのが持久力を高める運動である。そこで、意欲を高めるため、クラス内で5人1組のミニ駅伝チームを作り、校庭内に第1区から第5区までのコースを設定した。それぞれのコースは、距離や走路の状態等が違うので、得意不得意なども含めて話し合わせて走るコースを決定させた。また、駅



伝と同じように、各チームごとにたすきのカラーを選択し、第1区からたすきをつないでゴールまで届けることを意識させて走らせた。

実践した結果、チーム対抗戦になったことで、最後まであきらめず、全員が歩かずに走りきる児童が多くいた。自分で決められた区間を走り切ろうとする使命感をもった児童が多くいたためであるだろう。

また、友達とたすきをつなぎ合う楽しさを感じ、「違う区で挑戦したい。」「またみんなで走りたい」という児童からの意見が多かった。



校庭駅伝コース図

## 3 取り組みの成果

半年以上における授業の単元を見通して考えることで、意欲を高めるためにさまざまな観点から授業を見直し工夫することができた。アプローチの方法もさまざまあり、教材のレベル、ルール、出合わせ方、学習形態、時間配分、ミニ単元の組み合わせ（15分でできる授業）などを考えていくことで、児童が飽きることなく何度も取り組みたいと思える授業づくりを、数十時間の体育で実践できた。

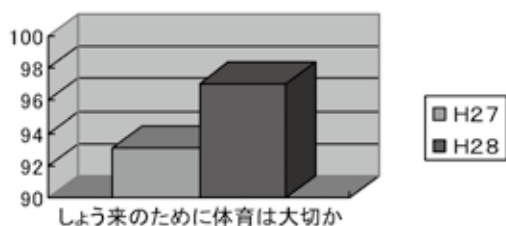
以上における実践の成果を検証すべく、今年度第5学年の体育の授業において、4月「体づくり運動」5～6月「バウンドバレーボール」（数時間）と「ソフトバレーボール」を単元として設定した。また、学年の体育すべてを担当し、実践に取り組んだ。実践における結果と考察は以下のとおりである。

### ① 児童の体育への意識と意欲についての考察

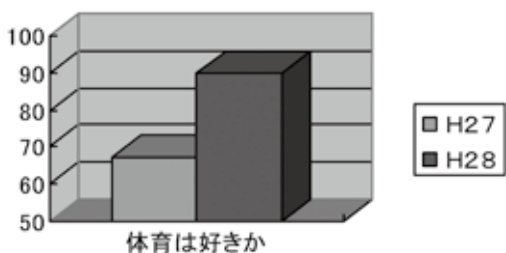
今年度も、平成27年度の調査同様、体育に関する問い2つに関する調査を行った。（※「1 はじめに」参照）

1つ目は、「体育の教科は、しょう来のために大切だと思いますか。」という質問である。この質問に対して、平成27年度の調査では、93.1%が「はい」と答えている。これに対し、平成28年度の調査では、「はい」と答えた児童が97%であった。これは、平成27年度の同調査において3.9%も上回る結果となった。

また、「体育は好きですか。」という質問に対して、平成27年度での調査においては、67.3%が「はい」



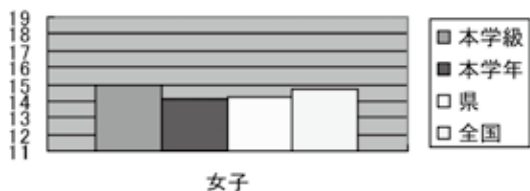
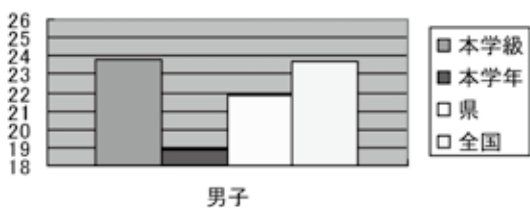
と答えている。これに対し、平成 28 年度の調査では、「はい」と答えた児童が 90%であった。これは、平成 27 年度の同調査において 22.7%も上回る結果となった。



以上の結果から、体育へのプラスの意識が高まり、より体を動かすことへの意欲を引き出したと考えられる。

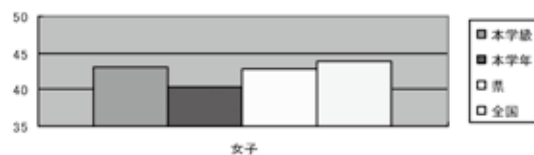
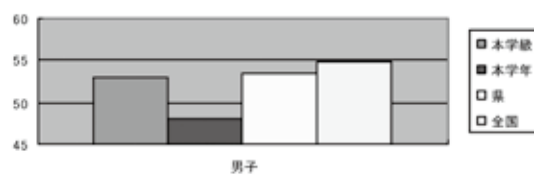
## ② 児童の体力の高まりについての考察

今年度の体力テストのソフトボール投げにおいて、本学級の平均、本学年の平均、同学年の県・および全国の平均は、以下のようになっている。



以上の結果から、実践を行った本学級は、本学年の他学級と大きな記録の差が見られた。また、本学級の男女ともに、全国の平均を上回ったことから、十分に投げる力をつけるのに効果的だったと言える。

また、20 mシャトルランの結果は、以下のようである。



男子の平均回数は 53 回で、これは県平均の 53.8 回よりやや下回った。また、女子の平均回数は、43.1 回で、これは県平均の 42.9 回をやや上回った。どちらも全国平均に達することができなかったが、同学年の他学級との比較では、それぞれ 3 回以上の差が見られた。

このことから、効果こそ結果として十分ではなかったが、今後も興味のある運動を考え続けていき、児童の体力の変容を追いつけていきたい。

## 4 終わりに

今後としては、来年度の体力テストを元にどの能力が身に付いていないかを分析し、次年度への課題を見出すことが必要となってくる。それは、本校だけの問題としてとらえるのではなく、地域学校園や宇都宮市全体の傾向をつかみ、教材や教具、場の効果的な与え方を多くの職員同士で共有していくことで、児童の体育への意欲を高めていきたい。そして、児童が「もっと運動がしたい」と思える授業を考え続けていきたい。

### <参考資料>

- ・楽しい体育の授業 4 月～11 月 明治図書 2015/4/1～11/1
- ・すべての子どもが主役になれる！「ボール運動」絶対成功の指導 BOOK 明治図書 2015/4
- ・よい体育授業を求めて 大修館書店 2015/5/20
- ・体育における「学びの共同体」の実践と探究 大修館書店 2015/4/20
- ・平成 27 年度 体育方法研究会（栃木県）資料

## あ　と　が　き

日教弘岡山支部は、昭和31年、全国に先駆けて教育研究助成事業を開始し、個人研究、グループ研究、教育研究論文・著書助成事業と順次事業を拡大して61年目を迎えました。これまでに延べ1,533人の方々に総額79,165千円を助成いたしました。

また、平成5年、創立40周年記念事業の一環として「教育研究集録」を創刊して以来、本県の教育振興に寄与するべく県下の学校・教育機関に頒布し、今回で第25号の発刊となりました。

今後とも、本県教育の振興・発展を支援するべく、本事業の更なる充実に努めてまいりますので、学校現場等が抱える課題の解決に向けた日々の取り組みや、教材研究などの実践・研究を論文としてまとめられ、多数応募されることをご期待申し上げます。

---

---

平成29年3月 教育研究集録 第25号

---

平成29年3月15日発行

編 集 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

発 行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

〒703-8258 岡山市中区西川原255番地

TEL 086-272-1909

印 刷 株式会社 創 文 社

---

---